

2018 年度

外国にルーツをもつ人々の
アイデンティティ構築と原則

千葉大学大学院

人文社会科学研究科

博士後期課程

ミラー成三

目次

第1章 先行研究と本研究の位置づけ.....	1
1.1 アイデンティティに関する先行研究.....	1
1.1.1 Erickson のアイデンティティ理論.....	1
1.1.2 社会的アイデンティティと文化的アイデンティティ	3
1.1.3 相互行為を通して構築されるアイデンティティ	3
1.1.4 新しいアイデンティティ概念.....	5
1.1.5 日本の異文化接触とアイデンティティに関する先行研究.....	7
1.2 接触場面研究に関する先行研究.....	7
1.2.1 接触場面、外来性、言語管理理論.....	7
1.2.2 接触場面向かう言語管理.....	9
1.3 本研究における問題意識.....	10
1.4 本研究の立場と目的.....	10
1.4.1 本研究の立場.....	10
1.4.2 本研究の目的.....	12
第2章 方法論	13
2.1 本調査の目的.....	13
2.2 本調査の概要.....	13
2.2.1 調査方法	13
2.2.2 調査協力者.....	14
2.2.3 調査手順	15
2.2.4 データの文字化.....	15
2.3 調査データの概要.....	16
2.3.1 自然会話データ	16
2.3.2 インタビュー・データ	17
2.4 調査協力者の概要.....	18
2.4.1 パクの概要.....	18
2.4.2 ロングの概要.....	19
2.4.3 スミスの概要.....	19
2.4.4 チャドの概要.....	20
2.4.5 ワンの概要.....	20
2.5 本章のまとめ.....	21
2.6 本論文の構成.....	22

第3章 分析の枠組み.....	23
3.1 自然会話データの分析枠組み.....	24
3.1.1 成員カテゴリー化装置.....	24
3.2 インタビュー・データの分析枠組み.....	27
3.2.1 ポジショニング分析.....	27
3.2.2 類型論的アプローチ.....	31
3.2.3 遂行的アイデンティティ構築の原則.....	33
3.3 本章のまとめ.....	37
第4章 自然会話データにおける遂行的アイデンティティの分析.....	38
4.1 文化的カテゴリーと外国人カテゴリー.....	38
4.2 逸脱が生じている場面で構築されるカテゴリー.....	40
4.2.1 日本語の「学習者」としての「外国人」.....	40
4.2.2 中国語の「言語ホスト」の構築.....	41
4.2.3 社会文化的知識をもたない「外国人」.....	43
4.2.4 逸脱を理解するための「ハワイ人」カテゴリー.....	45
4.3 逸脱が生じていない場面で構築されるカテゴリー.....	47
4.3.1 「新潟人」カテゴリーの表示による勧め.....	47
4.3.2 「外国人」カテゴリーの自発的表示による説得.....	48
4.3.3 カテゴリーの潜在化.....	50
4.4 蓄積されたカテゴリーの表示.....	52
4.4.1 蓄積された「韓国人」カテゴリーの表示.....	52
4.4.2 蓄積されたブラジル人としての認識.....	54
4.5 表示されたカテゴリーに対する交渉.....	55
4.5.1 代替カテゴリーの構築.....	55
4.5.2 「外国人」カテゴリーからの距離.....	56
4.6 個人化されたカテゴリー.....	60
4.6.1 習慣化された逸脱の確認.....	60
4.6.2 冗談のためのリソースとしての言語能力.....	62
4.7 本章のまとめ.....	63
第5章 インタビュー・データにおける遂行的アイデンティティ構築の原則の分析.....	66
5.1 ワンの語りにおけるポジショニングの分析.....	66
5.1.1 語りの分析.....	67
5.1.2 ワンの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル3).....	71
5.2 ロングの語りにおけるポジショニングの分析.....	72
5.2.1 語りの分析.....	73

5.2.2	ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル 3)	80
5.3	スミスの語りにおけるポジショニングの分析	81
5.3.1	語りの分析.....	81
5.3.2	スミスの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル 3)	87
5.4	パクの語りにおけるポジショニングの分析	89
5.4.1	語りの分析.....	89
5.4.2	パクの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル 3)	94
5.5	チャドの語りにおけるポジショニングの分析	97
5.5.1	語りの分析.....	97
5.5.2	チャドの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル 3)	107
5.6	本章のまとめと考察.....	108
6 章	遂行的アイデンティティ構築の原則に関する考察と仮説.....	111
6.1	各調査協力者の考察	111
6.1.1	ワンの遂行的アイデンティティと原則.....	111
6.1.2	ロングの遂行的アイデンティティと原則.....	113
6.1.3	スミスの遂行的アイデンティティと原則.....	114
6.1.4	パクの遂行的アイデンティティと原則.....	116
6.1.5	チャドの遂行的アイデンティティ	118
6.2	遂行的アイデンティティと原則に関する考察.....	120
6.2.1	遂行的アイデンティティの交渉と蓄積.....	120
6.2.2	遂行的アイデンティティの交渉に影響する権力と社会制度.....	121
6.2.3	蓄積アイデンティティおよび遂行的アイデンティティ構築の原則の変容	122
6.3	本章のまとめ : 遂行的アイデンティティと遂行的アイデンティティ構築の原則に関する仮説	124
6.3.1	蓄積アイデンティティおよび遂行的アイデンティティ構築の原則の変化	125
6.3.2	アイデンティティの新しい枠組み.....	126
7 章	本研究のまとめと今後の課題.....	128
7.1	本研究のまとめ	128
7.1.1	遂行的アイデンティティ	128
7.1.2	遂行的アイデンティティ構築の規則、および蓄積アイデンティティ	129
7.1.3	アイデンティティ、および蓄積アイデンティティの変化を捉えるための枠組み	130
7.2	本研究の意義.....	131
7.3	今後の課題.....	132

謝辭	134
參考文獻	135

第 1 章 先行研究と本研究の位置づけ

平成 29 年 6 月末の在留外国人数は、247,458 人で、前年末に比べ 8 万 8, 636 人(3.7%)増加している(法務省 2017)。グローバル化の進展を考えるとこの数は今後もますます増加していくことが予想される。異文化接触はアイデンティティに大きな影響を与えるものであるとされており(丸井 2012)、彼/彼女らがどのようなアイデンティティを持ち、またどのような相互行為を通してどのようなアイデンティティを構築させているのかを知ることは極めて重要であると考えられる。

アイデンティティは、これまで様々な分野において研究されてきており、膨大な量の研究成果が残っている。一方で、各研究においてアイデンティティをどのように捉えるかや、研究の方法は少しずつ異なっている。本章ではアイデンティティに関するこれまでの研究を概観し、本研究の立場を確認する。特に、Erickson のアイデンティティ理論から、社会的アイデンティティへの流れを見た後で、今日一般的になりつつある、相互構築的なアイデンティティの研究について述べたうえで、近年のアイデンティティ研究について触れる。また、日本の外国人の言語使用の研究において大きな役割を果たしてきた接触場面研究について概観する。そしてそれらを踏まえたうえで、本研究における問題意識や立場、そして本研究の目的を述べる。

1.1 アイデンティティに関する先行研究

1.1.1 Erickson のアイデンティティ理論

本節ではまず、今日の研究でも引用される、アイデンティティ概念の基礎となった Erickson のアイデンティティ理論を概観する。

現在、様々な学問分野において応用されているアイデンティティ概念の多くは、Erickson のアイデンティティ理論(1963=1977&1980, 1959=1973, 1968=1973 など)を出発点としている。Erickson は人生を、それぞれに発達課題のある 8 つの発達段階に分類し、またそれぞれの段階に課題を達成できなかつた際に生じる危機とその課題を達成することで獲得するものについて考察している(cf. Erickson, 1959)。その中でも特に中心的な概念として挙げられているのがアイデンティティ(自我同一性)であり、Erickson はアイデンティティを、生涯続く発達過程であるとし、また人間にとって必要不可欠なものとして説明している。

一方で彼は、アイデンティティについて「この主題について書けば書くほど、この言葉は、総括的で不可解な何者かをさす述語になってしまう」(Erickson, 1968=1973: i)と述べるなど定義があいまいで、多義的でもある。Erickson はアイデンティティの定義として、「自分が他ならぬ自分として、生き生きとした生命的存在として生き続けているという実在的

な意識であり、同時に自分が所属する社会の人々とある本質的性格において共通しており、世界との一体感をもつという実感である」(1963=1977:)や、「個人的な同一性の意識的感覚」、「個人的な性格の連続性を求める無意識的な志向」、「「自我総合」ego synthesis の無言の働きに対する一つの基準」、「特定の集団の理想と同一性との内的な「一致」(連帯)の維持」(1959=1973: 132)などと述べている。つまり、アイデンティティとは集団、あるいは他者と共有され、一致した自己の意識の一貫性や斉一性のことを指しているように思われる。

このような Erickson のアイデンティティ理論は、自我アイデンティティの形成を核としているが(河井 2011)、Erickson は自我アイデンティティの他に人格的(パーソナル、もしくは自己)アイデンティティについても言及しており、両者の違いを以下のように述べている。

人格的アイデンティティをもっているという意識的な感覚というものは、二つの同時存在的観察にもとづいている。時間—空間における自分の存在の斉一性と連続性の自覚、および、他人が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚、である。しかし、わたしが自我アイデンティティと呼ぶものは、存在のたんなる事実以上のもの、いわば、この存在の自我資質のようなものに関連している。したがって自我アイデンティティとは、その主観的局面では次のような自覚である。つまり第一に、自我の総合方法にそれ自体の斉一性と持続性があるという自覚である。この自我の総合方法は自分の個性的な存在のスタイルでもある。第二に、このスタイルが、自分が直接接触する共同体の重要な他者に対する自己の意味の斉一性と持続性とに合致しているという事実の自覚である(1968=1973: 55,56)

すなわち、自我アイデンティティの感覚は自我総合の方法の自覚という自分自身に対する活動に焦点が当てられているのであり、対自関係が問題になる、という点において人格的アイデンティティと異なっているわけである(河井 2013)。さらに、河井(2013)は両者の違いについて以下のように指摘している：「知覚と観察に基づくパーソナル・アイデンティティの感覚は相互行為状況で問題となるが、より包括的な自覚と省察に基づく自我アイデンティティの感覚が問題になるのは、コミュニティそして社会という文脈においてであるという点からも両者を区別する必要がある。(中略)自我アイデンティティの感覚は、対他関係だけでなく対自関係の相互性 mutuality をまとめ、信頼の感覚やパーソナル・アイデンティティと異なって相互行為状況だけでなく社会との関係において形成される」(642)。

Erickson 自身はこのような区別をしたうえで、自我アイデンティティを中心としてアイデンティティ理論を形成していた。一方、社会学、心理学分野におけるその後の研究は、自己アイデンティティを理論の中心に考察がされているものがほとんどである(椎野 1980)。

1.1.2 社会的アイデンティティと文化的アイデンティティ

Erickson によるアイデンティティ理論の提唱後、アイデンティティは様々な学問において様々に広がっていった(鑑他 1984-2002 など)。その中で大きな流れの一つとなったのが社会的アイデンティティの研究である。社会的アイデンティティは、「社会的集団ないし社会的カテゴリーの成員性に基づいた、人の自己概念の諸側面、およびその感情・評価その他の心理学的関連物」(Turner et al. 1987, p29)と定義されている。すなわち、自分がある集団の一員であるという認識や感覚から形成される自己概念が社会的アイデンティティである。社会的アイデンティティを対象とした研究の中でも、とりわけ社会的アイデンティティ理論(Tajfel & Turner, 1979)や、自己カテゴリー化理論(Turner, 1987=1995)などが知られており、これらは特に集団間葛藤の統合理論として提唱されたものである。

社会的アイデンティティは集団アイデンティティとも呼ばれており(鈴木 2013)、社会における行為の基盤として位置づけることができるとされている(Connolly, 1991=1998)。集団アイデンティティは、ナショナル・アイデンティティやエスニック・アイデンティティなどに細分化されており、それぞれがまた様々に定義されている(c.f. 金 2011; 津田 2014)。他方、グローバル化によって人々の世界的な移動が日常化している現代において、国や民族では規定できないアイデンティティが見られるようになってきており、ナショナル、あるいはエスニックという言葉では包含できないような社会的アイデンティティを文化的アイデンティティとして捉える研究もある(i.e. 鈴木 2005; 2008)。他方、近年は文化的アイデンティティを異なる視点でとらえる立場も存在する。例えば Hall は、文化的アイデンティティ(Cultural Identity)とは、「常に記憶や幻想、語りや神話を通じて構築されて」(1990=2014: 94)いるものであり、歴史や文化を語る文脈において創られるアイデンティフィケーションの地点であると述べている(Hall, 1989; 1990=2014)。Hall はさらに、このような文化的アイデンティティの考え方から従来の本質的とみなされていたアイデンティティについても考察している。それによると本質的な文化的アイデンティティというのも、ポスト・コロニアル社会の中で創られた、一つの位置であるという。言い換えるならば、「一つの国民/一つの民族文化は、ある人々によってなされる努力」、すなわち位置づけの総体であり、「その努力は、その人々がそれ自体を作り出し存続させ続ける行為を叙述し、正当化しそして称揚する思考空間において」(1990=2014: 103)なされているものである。

1.1.3 相互行為を通して構築されるアイデンティティ

このような文化的アイデンティティの視点は、「わたし」が「ある」ものだという考えではなく、「わたし」は「する」ものだという考え方(中河 2010:53)にもとづいている。自己を

このように捉える視点のさきがけとなったのが Goffman(1959=1974, 1963=2001)である。Goffman(1959=1974)では、「自己」が、人々が行う自己の属性の呈示（可視化と不可視化）と、その呈示の受け手による解釈によって成り立っているとしている。例えば、スティグマを持っている者は「成りすまし」(passing)、「カモフラージュ」(covering)(訳は石川 1992)などの印象操作によって役割距離を示すことで、他者に積極的に働きかけを行っており、他者はその行為を自分なりに解釈し、スティグマを持っている者としてはみなさなくなる(Goffman 1963=2001)。このような考えに従えば、アイデンティティは相互行為を通してこそ存在しうる。すなわち Goffman はアイデンティティを、個人ではなく状況に埋め込まれたものとして考えていたわけである。Goffman はまた、このようなアイデンティティすなわち会話上の自己を分析するためにフットイングという概念を提示している(Footing: Goffman, 1981)。フットイングは、「人が発話の生成あるいは受容を管理するやり方において表現される」(Goffman,1981; 18)のものであり、他の参加者に対する自己の位置調整であるとしている。

フットイングと類似した理論にポジショニング理論(Positioning Theory; Davis & Harré, 1990)がある。ポジショニング理論による分析では、言語実践によって自分もしくは他者に対する位置づけによる、発話者が認識、もしくは対話参加者ひいてはコミュニティ内に了解されている談話機能に注目をする(猿橋 2016)。位置づけはその場面の参加者から双方向的にされるものであり、相互作用的でありまた流動的である。言語による実践の中で人はお互いに位置づけ、また位置づけられ、その関係性の中からアイデンティティが生み出されるのだという。ポジショニング理論と Goffman の役割理論、またフットイングは類似した概念であるが、近年はその違いが示されつつある。例えば役割理論は、役割がポジショニングと比較すると固定的に考えられている点、またポジショニング理論では位置づけの主体が個人だけではなく組織や文化なども含む点などが挙げられている(Harré & Slocum, 2003)。またフットイングは、その会話が行われている「今、ここ」に注目するのに対し、ポジショニングは会話における位置取りに加え、その位置取りがアイデンティティの維持や変容にどのように関わったのかに注目をしているのだという(Ribeiro, 2006)。

Hall の文化的アイデンティティ論も含め、それぞれに違いはあるものの、このような考えでは、アイデンティティは個人に本質的に備わっているものではなく、場面や状況に応じて流動的に変化していくものとしてとらえられている。このような視点は、社会学や社会構築主義の立場の研究においても見られ(i.e. 上野 2005)、日常的に使用する言語とその場で表出される自己が強固に関連しており、アイデンティティは静的ではなく動的であると考えられている(Gergen, 1999=2004)。アイデンティティが動的で、多層的であるという考え方は、従来の心理学の分野においてあまり一般的ではなかった(末田 2012)。一方で、社会学や第 2 言語習得の分野においては、アイデンティティを実践に現れる流動的で、複雑なものとして捉えた研究が広がっている (i.e. Norton, 2000; Pavlenko 他 2001)。他方、これらの研究

ではアイデンティティの変化や揺らぎを捉えようとしているものの、変化やゆらぎを主張するためにはある程度固定的なアイデンティティを前提としなければならず、それが明確に示されてはいない。また、Goffman が述べるような「成りすまし」などの行為の影響、すわちある程度固定的なアイデンティティと相互行為を通してやりとりされるアイデンティティを実際に結びつけている研究は私見では非常に少ないように思われる。

1.1.4 新しいアイデンティティ概念

ここまで見てきたように、アイデンティティは様々な分野において対象とされ、研究されてきた。一方でその多くはインタビューのデータを主とした研究である。しかし北出(2013)は、Cross(2010)を参照しながら「アイデンティティは自己の理想部分と現実を切り離すことは難しく、インタビューや内省データで捉えた内容は実際の行動で示されるアイデンティティや他者から見たものと異なる可能性がある」(北出 2013:290) と述べ、インタビューなどによるデータだけでは「語られるアイデンティティ(narrated identity)」を分析することができても、「演じられるアイデンティティ(enacted identity)」を分析することは困難である指摘し、インタビューと実際の行動を結びつけて分析することの重要性を説いている。

また、これまでのアイデンティティは、これまでの研究において“self”、“role”、“subject position”、“Subjectivity”など、様々な概念と関係して研究されてきたものの、それらの概念がどのように使われているのかについては明確にされていない場合があるという。Luk(2008)によると、“最も基本的な形として、アイデンティティとは私たちの自己に関する感覚、もしくは私たちが誰なのか”を指し、“基本的に‘自己(self)’は個々の感覚と関連づけられ、‘役割(role)’はアイデンティティの静的で形式的、儀礼的な側面に焦点が当てられている。一方、主体的ポジション(subject positions)/主観性(Subjectivity)は、主体性(agency)、意識的な行動(conscious action)や[ある行動の]著者であること(authorship)に暗示される”(pp.121-122、引用者訳、[]内は引用者による)。すなわち、アイデンティティ研究では大きく分けて Identity と Subjectivity についての研究がされていながらも 2 つが同じ概念として扱われている場合があるということである。

Baynham(2011)はこの2つを区別して分析すべきであると主張し、Subjectivity とはその場その場の会話で言語を通してどう自らを表現しているか (identity brought about) であり、Identity は Subjectivity よりもう少し固定的なもので、自分が繰り返し構築してきた自己 (identity brought along) であると述べている。さらに Baynham(2015)では、それぞれについて以下のように述べている(p. 73、引用者訳、[]は引用者による)。

「'Identity brought along' thus captures the accumulation and sedimentation of identity positions in habitus not as some essentialist preexisting category but as discursively constituted,

enabled and constrained by the limits of language.」(「蓄積アイデンティティ」は、本質主義的に先在するカテゴリーではなく、言語によって可能となりまた強いられる、ディスコース上で構成される、ハビトゥスとしてのアイデンティティ・ポジションの蓄積そして堆積をとらえる[言葉である]。)

「'Identity brought about' captures the performativity by which identity is contingently made and remade in discourse, either with or against the grain of dominant discourse.」(遂行的アイデンティティとは支配的なディスコースの性質への賛成、もしくは反対によってディスコースで偶然的に構成、再構成される全てのアイデンティティのパフォーマティビティをとらえる[言葉である]。)

後者は例えば、Hall(1990=2014)が述べる文化的アイデンティティと同様であるように思われる。すなわち、「歴史と文化の言説の内部で創られるアイデンティフィケーションの地点、アイデンティフィケーションや縫合の不安定な地点」であり、「本質ではなく、一つの位置化(positioning)である」(p. 94)。すなわち、ここでのアイデンティティとはディスコース上で、相互行為を通して構築されるものであり、Butler(1990=1998)が指摘するパフォーマティビティを指している。

これに対して、前者は蓄積された、歴史化されたアイデンティティ(historicized identity)がディスコースに、どのように潜在的に持ち込まれるか(brought along)を示している。Baynhamはこれを、説明するために、Bourdieu のハビトゥスという概念を提示する。Bourdieu(1980=1988)によると、ハビトゥスとは、「歴史の生産物」とし、「それら過去の経験は、各々の組織体に・知覚・思考・行為の図式という形で沈殿し、どんな明確な規則よりも・・・時間の推移の中での実践の恒久性を保とうとする傾向をもっている」(p. 86)ものである。すなわち日々の生活の中でのパフォーマティブな行為が繰り返される(反復; Butler, 1990=1998)ことによって蓄積されて習慣化、あるいは身体化されると指摘していると言えよう。Baynham(2015)が指摘するように、アイデンティティはこのどちらの性質も持っているため、両側面から分析することが望ましい。

またこれに加え、この蓄積アイデンティティがディスコースにおける言語使用によって、遂行的アイデンティティとして構築される過程においては、本人が他の参加者にどのように見られたいかが関わってくると考えられる。例えば Goffman(1963=1980)が指摘するように、当該場面においてスティグマだと判断されうると本人が感じているようなアイデンティティがあったとすれば、それを他者には知られたくないという意識が働き、ディスコース上では、別のアイデンティティを演じて構築することによって、自身のスティグマを潜在化させるのである。この二つのアイデンティティを同時に捉えようとするならば、遂行的アイデンティティの構築に関わる意識にも目を向ける必要があるだろう。

1.1.5 日本の異文化接触とアイデンティティに関する先行研究

ここまで見てきたように、アイデンティティ研究は様々な視点でからされている。本節では日本におけるこれまでのアイデンティティ研究を概観したい。特に、ここでは異文化接触とアイデンティティの関係性について扱っている研究について記述していく。日本では海外移住など、文化間の移動を経験した日本人の研究がある。例えば留学など、海外へ一時的に滞在する日本人を対象とした研究(窪田 2005; 岩崎 2007)や、海外での一時滞後に帰国した児童や生徒を対象とした研究(塘 2010)、また短期ではなく、海外に移住した長期的に滞在する日系人やその子供に関する研究(前山 2001; 野崎 2007)などがある。またそれ以外に、日本に居住する外国人を扱った研究もある。例えば、山下(2001)や原田(2007)による在日朝鮮人などを対象とした研究や、日本人と国際結婚をした外国人配偶者やその子供を対象とした鈴木(2008)や Oikawa & Yoshida(2007)、南米からのニューカマーを対象とした関口(2003)、外国語指導助手(ALT)を対象とした浅井(2006)などである。

これらの研究の多くは、異文化に身を置くことが、個人のアイデンティティ形成や揺らぎ、また変容にどのように関わっているのかについて焦点が当てられている。また、対象となるのは日本人が多く、日本で生活する外国人に焦点が当てられているものに関しては比較的数が少ない。他方これらの研究では、グループディスカッションの分析も行っている Oikawa & Yoshida(2007)や、フィールドノートやビデオ録画、アンケートなども使用している浅井(2006)をのぞくと、Norton & McKinney(2011)が指摘するように、インタビューを主たるデータとして使用したものが圧倒的に多い。すなわち、インタビューから蓄積アイデンティティの分析を試みようとする研究や、インタビュー自体をインタビュアーとの相互行為と捉えて遂行的アイデンティティの分析を試みている研究が多いように思われる。また、自然会話を分析することによって遂行的アイデンティティの構築を扱った研究は、西阪(1997)、杉原(2003)、細田(2008)、赤羽(2017)など散見されるもののそれほど多くはない。また遂行的アイデンティティと蓄積アイデンティティ両方に目を向けている研究は非常に限られていると言えるだろう。

他方、接触場面における言語使用に焦点を当てる言語管理研究では近年、Baynham の指摘するような問題と同様の問題意識から、ミクロな相互行為とその相互行為の蓄積の結果である相互行為に向けられる意識という観点から言語管理研究を発展させている。

1.2 接触場面研究に関する先行研究

1.2.1 接触場面、外来性、言語管理理論

接触場面研究の出発点は、母語(Native)、あるいは内的(Internal)場面と区別される外来(Foreign)、もしくは接触(Contact)場面の存在である(Neustupný, 1985a: ネウストプニー1995

など)。ここで場面と呼ばれるものは、Hymes(1972)の SPEAKING モデルとして知られている、コミュニケーション能力によって適切な言語使用が可能となる場面を指している。すなわち、場面ごとにデフォルトすなわち適切な言語使用を設定するために適用されるコミュニケーション要素の束を指しており、これが(規定)規範と呼ばれている(村岡 2016a)。ファン(2010)が指摘するように、このような規範は「常に固定されたものでも、1つの種類しかないわけでもなく、参加者間の中で交渉され、変動しうる。例えばフェアブラザー(2000)は、接触場面においては接触規範と呼ばれる、デフォルトが緩められた規範が適用されていることを指摘している。このような場面では第三者からみると明らかに間違った発音や文法であっても、参加者間では気にされない。すなわち場面への参加者は、目に見えず、常に修正あるいは変動する場面の中で、その都度適切、あるいは許容される言葉遣いや非言語行動などを選択していることになる。そのため後述するように、接触場面研究では通常規範そのものに焦点を当てるわけではなく、規範からの逸脱を研究の出発点とするのである。

一方で内的場面と接触場面、すなわち文化内か文化間かが区別される要因は、外来要因あるいは外来性(Foreign Factors)の存在であるとしている(Neustupný, 1985a)。Fan(1994)やファン(2006)では、これらの外来性を、言語コード、コミュニケーション規範、社会文化規範を共有することばの共同体(speech community)と結びつけ、以下の三つの外来性を定めている。

- ①言語的外来性(linguistic foreignness)
- ②社会文化的外来性(sociolinguistic foreignness)
- ③社会文化的外来性(sociocultural foreignness)

すなわち、これらの全てが共有されている場面が内的場面であり、どれかが一つでも共有されていない場合は接触場面となりうるということである。またファン(2006)では外見の外来性社会文化的外来性に含まれるものとしている。

接触場面ではそれぞれの場面で行われるインターアクションや、その場面で起きた言語問題のプロセスを理解することに焦点を当てている(Neustupný, 1985b)。すなわち、プロダクトとして行われている言語行動がなぜ行われたのか、または問題が生じる以前の調整、すなわち問題の回避などがなぜ行われたのかを明らかにすることに主たる関心が置かれてきた。そのため、接触場面における言語問題に対しては、言語管理理論(Jernudd & Neustupný, 1987: ネウストプニー1995 など)が主たる分析モデルとして使用されてきた。実際の分析には以下のような言語管理プロセスのモデルが用いられる。

- ①規範からの逸脱の段階

- ②留意の段階
- ③評価の段階
- ④調整計画の段階
- ⑤実施の段階

言語管理理論では、言語問題は規定規範からの逸脱から始まるとされており、第三者からみると明らかな問題に見えるものであっても、参加者間で問題とされていない限り、問題として取り上げるべきではないとしている(ネウストプニー1997)。すなわち、留意された逸脱に注目するのである。留意された逸脱は参加者によって否定的、または肯定的に評価される。評価された逸脱は調整計画が立てられ、実際に実施される。ただし、逸脱が起きたとしても留意されない場合があるように、どの段階においても終了する可能性があり、必ずしも実施されるわけではない。

他方、接触場面研究では、「母語話者」対「非母語話者」という枠組みが使用され、彼らが接触場面においてどのような言語使用をしてきたのかに注目してきたと言える。その反面どのようなカテゴリーが適用されているのか、どのようなやりとりを通してそのカテゴリーに属する者として位置づけられているのかについてはあまり注目をしてこなかった。近年の研究では footing の概念を用いて、会話の参加者がどのように相手、また自らを位置づけでいるのかを分析する試みがされているもの(e.g. 今 2010; 村岡 2016b)、村岡(2016a)が指摘するように、参加者の「属性」がどのように決定されていくかに関しては研究の余地が残されていると言えるだろう。

1.2.2 接触場面に向かう言語管理

ここまで接触場面と外来性、言語管理理論について概観してきた。このような言語管理理論を用いた研究は接触場面の参加者がどのような言語行動を行っており、またなぜその言語行動を行ってきたのかが研究されてきた。一方で、近年はディスコース上でみられる言語管理には、当該場面に限られた「接触場面における言語管理」のみならず、接触場面に参加する際の言語に対する態度や意識の表れである「接触場面に向かう管理」が含まれることが指摘されてきた(村岡 2010: 49)。このような接触場面に向かう管理は、様々な場面で実施されてきた言語管理を蓄積してきた、言語管理の軌道の結果、接触場面に対して一定の言語行動の方針を持つようになったものであり、接触場面における言語管理とはとは区別される(村岡 2018)。このような、接触場面に向かう管理、あるいは習慣化された言語管理は、自身の外来性に関して行われる場合がある。例えば参加者が、日本人らしい言語使用をしたいという意識を持っている者であれば、接触場面における言語管理を積極的に行うことによって自身の言語的な外来性を顕在化させる。逆に、意思疎通ができればいいと

いう意識を持っている者は接触場面における管理をせず、言語を使用しているのである(雛2013)。ここでは、「日本人らしい言語を使用したい」と言っているように、ここでは、他の参加者である日本人からどのように評価されたいかに関わる意識であると言えよう。

1.3 本研究における問題意識

ここまで、アイデンティティ研究と接触場面研究に関する先行研究をまとめ、概観してきたが、以下のような課題が残されていると言えよう。一つ目は、日本に居住する外国人、あるいは外国にルーツのある者を対象とすることである。日本国内では、これまでは異文化接触を経験してきた日本人が研究の対象となることが多かったが、グローバル化の進展によって日本に居住する外国人は今後も増加すると予想され、彼/彼女が日本で生活をしてきてどのようなアイデンティティを持つに至ったのかを研究することは重要になってくる。また、外国人のみを対象とするのは十分ではなく、外国にルーツを持つ者と対象を広げ、研究を行っていく必要があるだろう。二つ目は彼/彼女がどのような遂行的アイデンティティを構築させているのかを分析する、と同時にどのような蓄積アイデンティティを持っているのかを分析することである。Baynham(2015)の指摘するように、アイデンティティは日々の相互行為で構築されるものとそれらが蓄積されたもの両方の性質を持ち、この二つを関連させた研究が必要となってくる。三つ目は、二つのアイデンティティだけではなく、遂行的アイデンティティが構築される際に、どのような規則や規範が働いているのかを分析することである。すでに述べたように、近年のアイデンティティ研究においてはアイデンティティを、相互行為を通してやりとりされるものと見なしている。一方で、言語を通じてディスコース上でアイデンティティを示しているとすれば、場面に参加する際の言語に対する態度や意識の表れである「向かう管理」が関わってくる。自然会話でのディスコース上のアイデンティティを分析する際にもこのような二つのアイデンティティを結びつける規則や規範を同時に分析していく必要があるだろう。最後に四つ目として、ここまで述べてきた遂行的アイデンティティ、蓄積アイデンティティ、そして遂行的アイデンティティ構築の規則や規範の三つを包括的に捉えるための枠組みを提供することが必要となる。

1.4 本研究の立場と目的

1.4.1 本研究の立場

本章では、これまでのアイデンティティ研究を概観し、また接触場面研究と言語管理理論の概要を見てきた。本節では以上の先行研究と、本研究での問題意識を踏まえた上で本研究の立場と目的を示す。

まず、本稿では Baynham(2015)の定義に従い、アイデンティティを遂行的アイデンティティと蓄積アイデンティティの 2 つに区別する。遂行的アイデンティティとは、相互行為を通して構築されるアイデンティティである。一方 Baynham が、遂行的アイデンティティが繰り返し構築されまた蓄積された結果である蓄積アイデンティティの説明として提示するハビトゥスとは、ディスコースにおける「位置や場の相互行為を一定の方向に方向付ける規則や規範を内面化し習得することで」(岸 2009: 45)形成されるものである。すなわち、明言されていないものの、蓄積アイデンティティとは比較的固定的なアイデンティティのみを指しているものではなく、それを一定の方向に方向付ける規則をも含んでいるものと考えられる。よって、本研究あつかうアイデンティティとは以下の三つを含む。

- ①遂行的アイデンティティ
- ②蓄積アイデンティティ
- ③遂行的アイデンティティ構築に関わる規則や規範

また、詳細は後述することにするが、それぞれの関係性は以下のように表すことができるだろう。

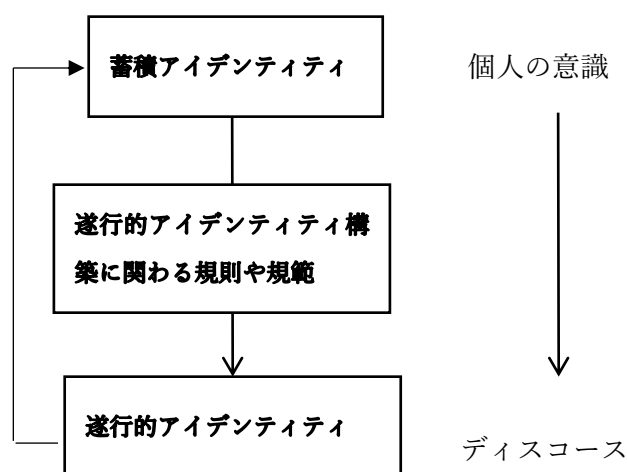


図 1 : アイデンティティに関わる要素の関係性

本研究における遂行的アイデンティティは、ディスコースにおいて、構築されるアイデンティティとする。これは、先行研究にもあるように流動的、複合的であり相互構築的なものである。また、本研究では主に言語行動を扱うが、これは時には非言語行動によって構築されることもあるだろう。蓄積アイデンティティは、遂行的アイデンティティが様々な場面で構築され個人の中に蓄積されたアイデンティティである。蓄積アイデンティティは過去に遂行的アイデンティティが繰り返されて構築されたものである一方で、現在や未

来にどのような遂行的アイデンティティを構築するのかという指標にもなっていると考えられる。さらにこの二つの間には、他者にどのように見られたいか、言い換えるならば、どのような遂行的アイデンティティを表示する/しないのか、また構築する/しないのか、あるいは他の参加者から自身の遂行的アイデンティティが提示されたときに、交渉するのか/しないのか、またどのようにこれらを達成するのかに関わる規則が含まれていると考えられる。

1.4.2 本研究の目的

以上のことを踏まえ、本研究では以下の3点を研究の目的とする。

- ①：日本に居住する外国にルーツをもつ人々が、どのような遂行的アイデンティティを構築させているかを明らかにする
- ②：日本に居住する外国にルーツをもつ人々が、どのような遂行的アイデンティティ構築の規則、および蓄積アイデンティティを持っているかを明らかにする
- ③：①と②を踏まえ上記の枠組みの有効性を検証し、ディスコース上でやりとりされるアイデンティティ、および蓄積アイデンティティの変化を捉えるための枠組みを提示する

この研究目的を達成するためには、一つのデータだけでは無く、多角的なデータが必要になる。次章では本研究で用いられた方法論を詳述する。

第2章 方法論

本章では、本調査で採用した調査方法について詳述する。まず、本調査の概要を述べ、インタビューで語られた調査協力者のプロフィールを述べる。

2.1 本調査の目的

本研究では、日本に居住する、外国にルーツのある者を対象に、彼/彼女らが日本で生活する中でどのような蓄積アイデンティティを持ち、どのような意識のもとで、どのような遂行的アイデンティティを構築しているか明らかにすることを目的とする。彼/彼女らは様々なバックグラウンドをもち、異なる場面に参加してきており、それらを明らかにするためには、過去の経験を明らかにする必要がある。そして一方で、実際の相互行為を通して、どのように自分の遂行的アイデンティティを管理しているかも知る必要がある。本研究では、これらのことを踏まえて調査方法を設定した。以下本調査の概要を説明していきたい。

2.2 本調査の概要

2.2.1 調査方法

1章で述べたように、これまでのアイデンティティ研究においてはインタビューのデータを使用した研究が大半を占めており、その有効性は実証されているものの、複合的なデータを用いた研究の数は限られている。また、アイデンティティ蓄積アイデンティティと遂行的アイデンティティに区分して分析するためには、複数種類のデータが必要になると考えられる。

まず、過去の遂行的アイデンティティ構築の蓄積である蓄積アイデンティティをとらえるためのデータとして、インタビューを行い、そこでの語りから蓄積アイデンティティや遂行的アイデンティティ構築の意識を分析することとした。インタビューはライフストーリー研究(桜井 2002)等を参考にし、半構造化インタビューの形式で行われた。ライフストーリーの分析では、インタビューおける個人の経験の語りからその人が歩んできたこれまでの人生や、その人を取り巻く社会の変動などを全体的に読みとることが可能となる。特に、近年のライフストーリー研究では、語り手である対象者と調査者の相互行為によってライフストーリーが構成されるという対話的構築主義アプローチが広まり、何を語ったのかだけでなく、いかに語ったのか、あるいは何のために語るのかといった問いが重視されるようになってきている(桜井、2002)。

さらに、日々の生活の中で、どのような遂行的アイデンティティが構築されているのかをとらえるために、日本で生活し言語を使用する実際の場面のデータが必要であると考えた。そこで、調査協力者が日常的に参加する場面を録音した、自然会話のデータを分析することにした。本研究における自然会話とは操作されていない会話であり、何を話すか、またどう話すかが統制されていない会話のことを指している。統制されている会話データと比較すると、研究者の研究目的に関わる会話や言語使用が見られない可能性が高まるものの、普段から使用している言語使用を分析、考察することができると言えるだろう。

2.2.2 調査協力者

前述の通り、本研究では日本に居住する外国にルーツのある者を対象とした。また日本に長期滞在している、もしくは長期滞在の意思がある者を条件として設定した。これは長期滞在の意思があるものであれば、何かしらのネットワークを構築しやすく、必然的に他者との交流をする可能性が高くなる。そして他者との交流が増えるほど、相互行為を通して遂行的アイデンティティを構築する機会も増えると考えたことによる。調査協力者は調査者の知人に紹介してもらい、場合によってはさらにその知人を紹介してもらおうという雪だるま式(片桐 1997)の方法で集めた。本稿では以下の5人の調査協力者のデータを分析に使用する。なお名前は全て仮名であり、年齢や滞日歴は全て調査時のものである。

名前	性別	年齢	出身国・出身地	滞日歴	身分
パク	女性	20代	韓国	7年	社会人
ロング	男性	20代	アメリカ	27年	社会人
スミス	男性	30代	アメリカ・ハワイ	30年	社会人
チャド	男性	20代	ブラジル	3年	社会人
ワン	女性	30代	中国	5年	大学院生

表1：調査協力者

調査協力者のうち、女性はパクとワンでありロング、スミス、チャドは男性である。年齢は全て20代から30代であり比較的若い世代が多かった。滞日歴は一番短いチャドが3年で、ワンが5年、パクが7年である。ロングとスミスは、出身はアメリカであるものの、生後すぐに日本に来ているため、来日歴が突出して長くなっている。協力者のうち、ワンは大学院生であるが、それ以外の協力者は社会人であり、日本にある企業に勤めている。

2.2.3 調査手順

調査は 2015 年から 2016 年末にかけて行われた。調査時、調査者は各協力者と初対面であったため、調査を始めるにあたり、調査者と協力者が顔を合わせ、自己紹介と調査の説明を行った。調査の説明の際には、調査者自身が日本で育ったアメリカ人であることを明かし、できる限り協力者との人間関係を構築できるように努めた。なお、顔合わせの際には紹介者が同席する場合もあった。調査はその後以下の順番で行われた。

- ①調査協力者による自然会話データの録音
- ②調査協力者へのインタビュー調査

①調査協力者による自然会話データの録音

調査協力者には顔合わせの際に、IC レコーダーを渡し、日常的に参加する場面のインタビューアクションを録音するように依頼をした。その際、普段通りの会話を録音して欲しいと伝え、会話の内容は特に指定や制限をせず、自由に話してもらった。会話録音時間はおよそ 25 分～35 分であった。

②調査協力者へのインタビュー調査

自然会話の録音が終了した後、会話録音日とは日を改め、調査協力者のみにインタビュー調査を行った。インタビューは半構造化インタビューの形式で行い、「来日前後から今までの生活や人生について教えてください」と話し、日本への移住から現在までを軸に語ってもらった。基本的には協力者に自由に語ってもらい、調査者は必要に応じて質問を加えていった。その後、調査協力者の日本語使用や、日本人との接触、文化的アイデンティティや外国人として扱われることなどの質問を行った。インタビューの質問は基本的に統一するようにしたが、協力者には自由に話し手もらっていたため、回答の内容や量は、協力者によって異なっている部分もある。インタビュー時間は 80～120 分程度であった。

2.2.4 データの文字化

調査で収集した録音は一度粗おこしを行い、特に①のデータは音声を聞きながら必要箇所を再度詳細に文字化した。文字化の際には、西阪他(2008)に記載されている記号を参考にした。実際に使用されている記号は巻末に示している。なお、本調査では IC レコーダーの録音のみを行っているため、非言語行動は基本的に分析対象とはしていない。

2.3 調査データの概要

本調査では、調査協力者が録音した自然会話のデータと、調査者による調査協力者へのインタビュー・データを収集した。以下でその特徴について述べる。

2.3.1 自然会話データ

調査では、各協力者によって、25分から35分ほどの会話が録音された。以下にそれぞれの会話の詳細を示す。

協力者	会話の相手				会話場所	収録時間
	名前	性別	年齢	協力者との関係		
パク	アキ	女性	20代	同僚	社内の休憩スペース	28:17
ロング	ノボル、シンヤ、エミ、ダイゴ	男性、男性、女性、男性	20-30代?	友人、および初対面	ビアフェスティバル	34:46
スミス	フルタ、ツルノ	男性、男性	30代	職場の先輩	カフェ、およびそこまでの道	32:50
チャド	タカ	男性	20代	友人	居酒屋	37:25
ワン	アイ	女性	30代	ゼミの先輩	移動中の車内	26:25

表2：自然会話データの詳細

5人の協力者は、職場の同僚や友人など、いずれも普段から交流している人たちとのか会話を録音していることが分かる。パクは社内の休憩スペースで同僚との昼休憩時の会話を録音しており一対一の会話である。ロングは、友人たちとビアフェスティバルに参加したときの会話を録音しているが、そこで知り合った夫婦(エミ、ダイゴ)も会話に参加しており、二人とは初対面ということになる。スミスは、職場の先輩二人との会話を録音しているが、普段から食事をしたり遊んだりするなどして職場以外でも会う頻度が高いという。また、スミスは待ち合わせの前からICレコーダーのスイッチを入れて持ち歩いており、実際の録音時間は4時間程度になった。しかし、一人でいる時間が長かったり、食事が主な活動と

なり会話がそれほど無い場面もあった。そのため、比較的会話量が多い、待ち合わせからカフェに入った後までの 30 分程度をデータとして使用した。チャドは友人との一対一の会話である。ワンは同じゼミに所属する先輩と、移動中の車内の会話を録音している。このときはアイが運転をしており、ワンは助手席に座っていたと思われる。

本調査の自然会話のデータでは、協力者たちが日常的にコミュニケーションを行っている、自然な会話の様子が録音されたと言えるだろう。すなわち、本人たちが日本で生活するうえで主に活動する、もしくは重要だと考えているネットワークでの会話である。またそこでの会話は、比較的居心地が良いと考えられている可能性が高い。そこでは日常的に構築される遂行的アイデンティティが現れていると予想することができる。それゆえ、会話のデータでは、協力者たちの様々な遂行的アイデンティティ構築の特徴をとらえることができるだろう。一方でこれは、自身の居心地の悪いと感じる他の参加者がいない、またそのような場面ではない、ということでもある。言い換えるならば、自らのアイデンティティが、差別の対象となるなど(森 2002: 黒坂ら 2008 など)、攻撃、あるいは抑圧されるような場面ではないことが考えられる。

2.3.2 インタビュー・データ

インタビューは、自然会話を録音してもらってから、相手の都合に合わせて1-2週間の時間をあけて行われた。ただし、チャドは仕事が忙しい期間となってしまったため、1か月ほどの時間があいている。インタビュアーとインタビューーは調査の説明をする際に1度顔を合わせているため、インタビュー時にはすべて2回目の顔合わせである。またインタビューが行われた場所は基本的に相手の都合に合わせて、相手に指定してもらった。おおよその収録時間や収録場所など、各協力者のインタビュー概要は下記のとおりである。

協力者	場所	収録時間
パク	レストラン	118:50
ロング	カフェ	93:20
スミス	ファストフード店	102:10
チャド	カフェ	121:30
ワン	大学内レストラン	80:30

表 3: インタビュー・データの概要

パクは平日の退勤後に、パクが勤務する職場の近くにあるレストランでインタビューが行われた。またチャドのインタビューも平日の退勤後にチャドの職場近くにあるカフェで行われている。スミスは週末であったが、同様に退勤後にファストフード店でインタビュ

ーが行われた。ワンは平日であったが授業やアルバイトがない日に、ワンが学んでいる大学内にあるレストランで行われた。ロングのインタビューは週末の休日に、カフェで行われた。いずれも場所や時間帯は様々であったが、比較的他の人が少ない時間帯に行われており、また食事や飲み物を飲みながら、落ち着いた雰囲気で行われた。

インタビューでは、協力者たちの来日前後の話から、現在の状況までを広く語ってもらっている。これは、過去を語ることによって、過去に何が起きていたかと同時に、現在それがどのような文脈で話されているかによって、現在の状況を知るための手がかりとなりうるためである。一方で、自身の遂行的アイデンティティ構築の意識や、蓄積アイデンティティに関わるようなストーリーも語られることがあった。このような語りは、特定の場面のみに向けられている場合もあるが、日本で生活する上で、日常的に行っている行動や意識が語られている場合もある。

2.4 調査協力者の概要

これらの語りの分析にうつる前に、インタビューで語られた各調査協力者の生い立ちやこれまでの生活など、概要を記す。

2.4.1 パクの概要

パクは韓国生まれの韓国人であり、調査時は20代の前半であった。元々アニメやドラマなど、日本の文化が好きで日本に来ることを目標としていたという。留学して日本の大学に入学し、4年間関西の大学に通っていた。大学では特に留学生の友人が多く、友人間で言語を教えあったりしていたという。2、3年生のころは日本で就職するか韓国に帰国するか悩んでいたが、就職活動が始まるころに日本で就職することを決め、就職活動を行う。関東の海外資本企業、いわゆる外資系の企業に就職が決まり、一人で上京することになった。外資系の企業でありながらも会社には日本人しかいないと述べているが、同期はみな仲がよいと語っている。なお、調査時は就職して3年目であり、対日歴は約7年である。大学時代の友人はみな関西に住んでおり、現在は年に数回会う程度だという。上京したてのころは関東に知り合いもいなかったため、ネットワークを広げるために韓国語教師のボランティアを始めている。韓国語を習いに来るのは年配の人が大半だと言うが、このボランティアは現在も継続して行っており、パクにとっては主要なネットワークの一つと思われる。パクのインタビューのなかでは外国人として扱われることに対する自身の否定的な評価が頻りに語られているが、大学生時代や現在の会社においても、外国人として扱われることがあったという経験も多く語られており、パクにとっては大学生から現在まで常にこの葛藤があり、その葛藤と向き合いながら生活をしていると思われる。

2.4.2 ロングの概要

ロングは母親が日系アメリカ人、父親がヨーロッパ系アメリカ人であり、ロング自身も日系アメリカ人にあたる。ロングはアメリカで生まれたものの、生後 1 年ほどで両親とともに来日し、以降日本で生活している。調査時は 20 代の後半であった。教育を全て日本で受けてきており、日本語のレベルはネイティブレベルと言って差し支えない。小学校ころまでは、家庭内ではほぼ英語を、家庭外では日本語を使用するという生活を送っていた。中学ごろからは家庭内でも次第に日本語を使用するようになり、英語を使用する機会は限られていったという。高校を卒業し関東の大学に入学して一人暮らしを始めたころは、両親と話すことも少なくなり、ほぼ英語を使用しない状況となり、自身の英語の能力が落ちていることに気づいたというが、当時は特に気にしていなかったことを語っている。また、大学まではまわりから外国人として扱われることがあり、それに不満を持っていたというエピソードをいくつか語っている。大学を卒業後、新潟にある企業に入社したが、数年後に転職をし、それを機に関東に戻って日本人の妻と結婚をする。現在は子供も生まれているが、子供には英語をきちんと学んで欲しいと考えていることを語っている。ロングはインタビューを通して、自身の英語の能力や英語の使用について語る事が多く、本人にとって一つの重要なキーワードとなっているようである。

2.4.3 スミスの概要

スミスは 30 代前半の男性であり、対日歴はおよそ 30 年である。スミスもロングと同様、母親が日系アメリカ人、父親がヨーロッパ系アメリカ人であり、スミス自身も日系アメリカ人である。スミスは日本で生まれているが生後すぐに母親の出身地であるハワイにわたり、生後 1 年ほどで再び日本に来たのだという。そのため、ロングと同様、教育はすべて日本で受けており、ネイティブレベルの日本語能力を持っている。一方で、スミスは両親が日本語能力をそれほど持っていないため、家庭内では一貫して英語を使用していたことを語っている。これによりスミスは、少なくとも家庭領域で使用される英語に関しては高い能力を保持しており、中学や高校、大学までは英語のテストや入学試験を容易と感じるなどの利益を感じていた。一方で、まわりから「すごい」などと褒められることは否定的に評価していたという。大学卒業後、関東にある企業に就職し、現在もそこで働いている。高校時代から、特に大学に入学してからは自身のアイデンティティに悩んでいたが、職場の先輩の助言によってこれを解消したということ語っている。特に大学から就職にかけてスミスは様々な経験をしており、インタビューでもその時期のことが多く語られていた。また、スミスは大学時代ごろからオンラインゲームを趣味としており、特に就職してからはゲーム自体の発展もあり、文字でのチャットや音声でのボイスチャットと呼ばれる機能

を利用して、世界中の人々とコミュニケーションをしながらゲームをしているという。その際は英語が共通言語として使用されることが多くそのため現在でも英語を使うことは多い。またそれ以外にも、現在は職場などの領域で同僚などに英語を教えるなど、英語を積極的に使用しており、まわりからの褒めに対する抵抗感も薄れてきていると語っている。

2.4.4 チャドの概要

チャドはドイツ系のブラジル人である。両親はドイツ人であるが、父の仕事の関係でブラジルに渡り、そこでチャドが生まれて、大学院を卒業するまでブラジルで生活してきた。大学では機械工学を学びながら、ドイツ語なども学んでいたという。また、大学時代にはポルトガルに留学しており、そこで現在の妻である日本人女性と出会っている。妻は日本で就職していたため、チャドは大学院を卒業後、就職をするタイミングで結婚を決意し来日したという。妻とはポルトガル語、もしくは英語で会話をしており来日するまで日本語は勉強していなかったため、来日当初はほとんど日本語を話すことができなかった。来日後は1年間仕事をしながら、仕事が終わると日本語学校に通うという生活を送り、また妻とも日本語での会話を試みるなど、毎日日本語の勉強をしていたという。現在では日本語でコミュニケーションはできるものの、自分の意見をストレートに言うことができないことに歯がゆさを感じることもある。職場では、自身の行動を肯定的に評価された経験を語る一方で、日本の企業文化に対する不満を語る場面もあり、自身の納得できないことに関してはきちんと意見を表明するというようなストーリーも語られていた。また、議論をすることが好きで、ブラジルでは友人などとよく議論をしていたと言うが、日本語ではそれがうまくできないために歯がゆさを感じることもあり、それが以前ほどではないにせよ、現在でも日本語を学ぶ動機となっているようである。

2.4.5 ワンの概要

ワンは、調査時30代前半の女性であり、中国で生まれた中国人である。もともと日本の文化や歴史的な建造物などに興味があったといい、大学では日本語を学んでいた。大学を卒業後、日本の大学院に入学するために来日し、関東にある大学院の修士となる。その後進学し調査時は博士課程の学生であった。来日して数ヶ月の時点で、知り合いから、語学学校の中国語教師に興味が無いか持ちかけられ、そこで中国語講師としてアルバイトをするようになる。語学学校では、他の中国人講師もおり、また日本人からも中国人として行動することを期待されていたため、比較的早く慣れることができたという。一方で、ゼミにおいては、ゼミ生が中心となって開催していた勉強会に参加するなど、ゼミの参加者と早くから人間関係を構築していた。ゼミには様々な国の出身者が参加しており、ワンにと

っては居心地よく感じられたという。今でも勉強会には参加しており、勉強会後には参加者でご飯を食べに行くなど、親しい関係を築いていることが報告されている。一方で、ゼミと語学学校について多く語られていたものの、それ以外のネットワークが語られることはほとんどなく、その二つがワンにとっては重要なネットワークとなっていることがうかがえる。これはまた、来日してから初期のネットワークが、大きな問題なく現在まで継続していることを表していると言えよう。

2.5 本章のまとめ

ここまで、本調査の概要と、各データの概要、調査協力者の概要を記述してきた。本研究における分析の概要は以下の図のようにあらわすことができる。本研究では、相互行為を通してやりとりされる遂行的アイデンティティを分析するために自然会話データを、蓄積アイデンティティと遂行的アイデンティティ構築に関わる規則を分析するためにインタビュー・データを使用する。

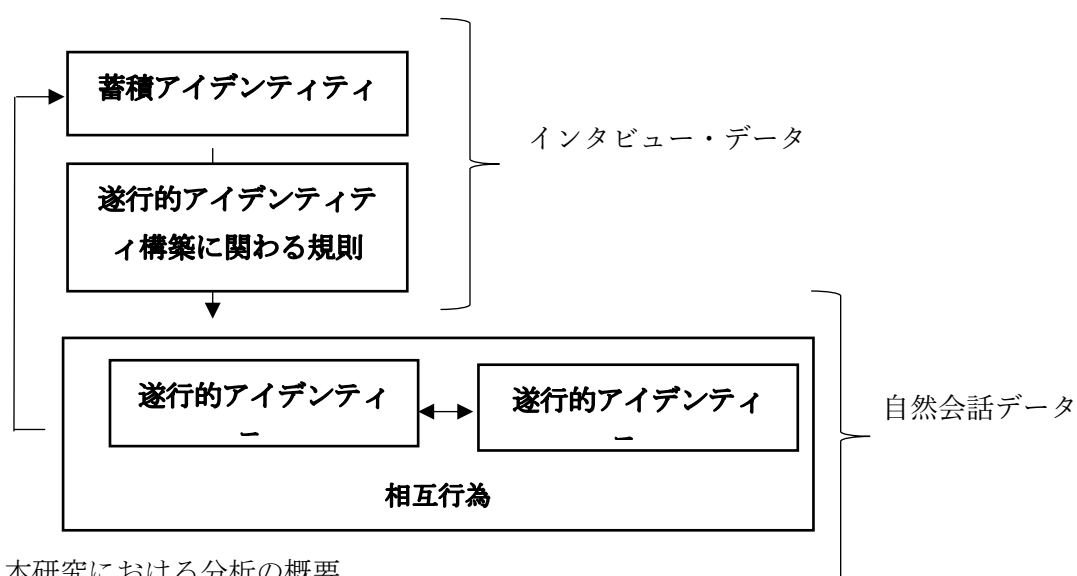


図 2: 本研究における分析の概要

本研究では、先行研究ではあまり使用されることの無かった自然会話のデータを取り入れることにより、相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティと、それが繰り返されることによって形成、変化する蓄積アイデンティティ、及びそれらをつなぐ規則の全体像をとらえることを試みる。そのために、自然会話のデータと、インタビューのデータの二つを収集した。

2.6 本論文の構成

本論文は以下のように構成されている。まず第3章において、自然会話データおよびインタビュー・データを分析する枠組みを提示する。本研究では、自然会話データで示される遂行的アイデンティティのうち、カテゴリーに焦点を当て、成員カテゴリー化装置(Sacks1972 a, b)の概念を使用することによって分析する、またインタビュー・データに対しては、協力者によって語られた語りに焦点を当て、Bamberg(1997、2004)によるポジショニング理論を援用して分析を行っていく。

4章では成員カテゴリー化装置の概念を使って、各協力者の自然会話データの分析を行っていく。特に文化的なカテゴリーや「外国人」カテゴリー、およびそれらのカテゴリーと結びつく活動が示されたときにどのようなやりとりを行っているのかに注目して分析を行う。4章での分析は探索的アプローチ(石井2018)によって進められ、事例ごとに分類して分析を示していく。

5章ではインタビュー・データを使用し、語られた語りのうち、特にスモール・ストーリー(Georgakopoulou、2007)に焦点を当てて分析していく。分析にはポジショニング理論を援用して分析を行うが、語りを分析するための三つのレベルのうち、レベル1ではストーリーのポジショニングを、レベル2では相互行為におけるポジショニングを、そしてレベル3では遂行的アイデンティティ構築の原則を分析する。レベル3で分析された遂行的アイデンティティ構築の原則は階層的に分類できるものであるため、類型論的アプローチ(ネウストプニー1989; 村岡2010)を用いて分類を行っていく。

6章では、4章での自然会話データの分析と、5章でのインタビュー・データの分析をまとめて考察していく。特に、相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティがアイデンティティ構築の原則にもとづいて表示、交渉されていること、またアイデンティティの変化の要因について考察していく。そして最後に4章5章での分析と6章での考察をまとめ、遂行的アイデンティティを捉えるための新しい枠組みを提示する。

最後に、7章ではそこまでの分析および考察をまとめ、本論の結論を述べ、今後の課題を提示する。

第3章 分析の枠組み

本章では第2章で述べた二つのデータをどのように分析していくか、その枠組みを詳述していく。詳細は本章で記述していくが、ひとまず本章における分析の枠組みを以下に提示する。

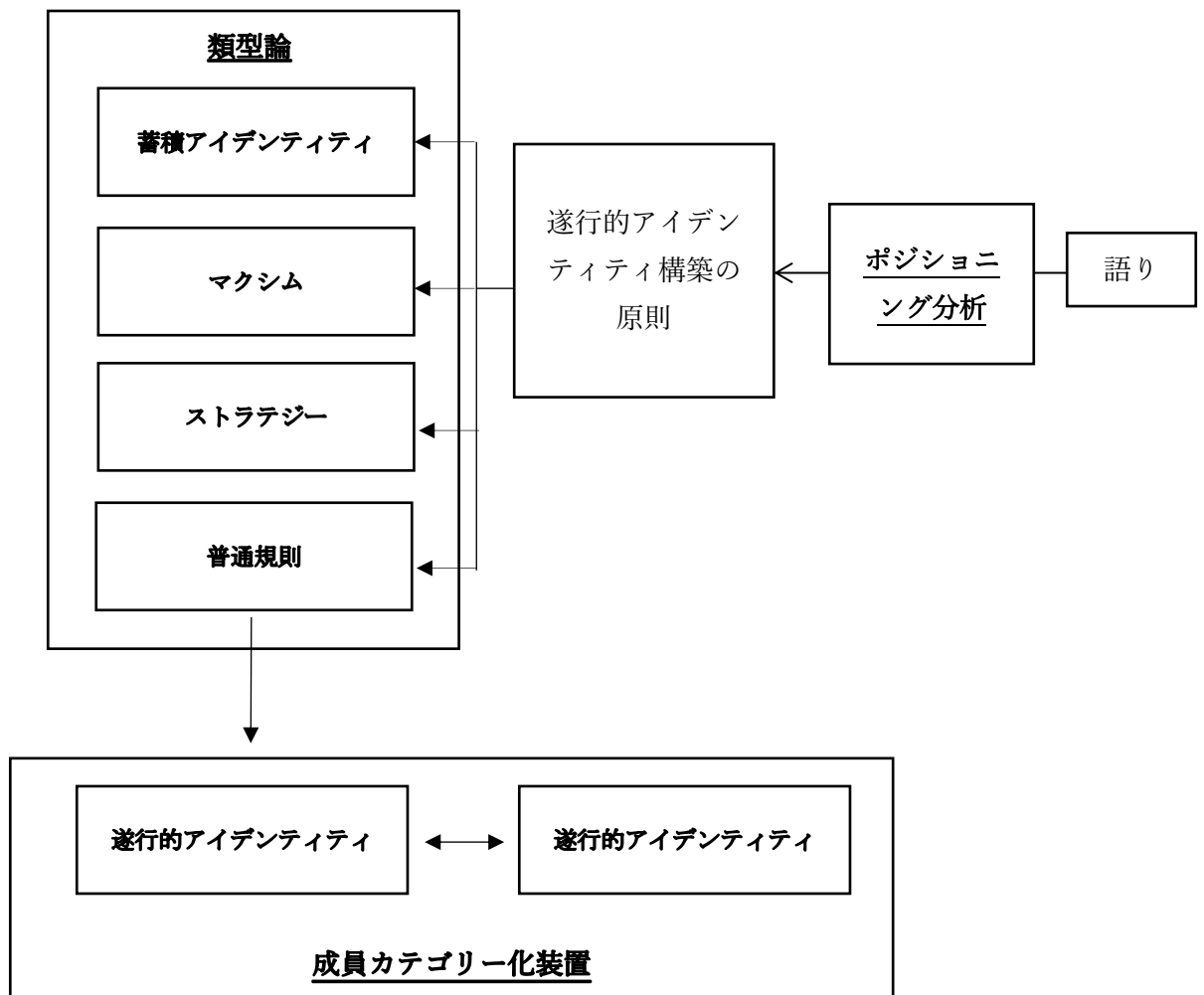


図3：本研究における分析の枠組み

自然会話のデータは、相互行為を通して表示、構築されるカテゴリーに注目し、成員カテゴリー化装置の概念を用いて、その構築過程を会話分析的な手法で記述していく。これは相互行為を通して構築されるものをすべて含むため、協力者自ら表示する者だけでなく、他の参加者によって表示されるものも含めて分析を行う。

またインタビュー・データは、インタビューで語られた語りから、ポジショニング分析

を援用することによって、蓄積アイデンティティと、遂行的アイデンティティ構築の意識や原則を分析する。さらにこれらは、類型論的なアプローチによって、4つのレベルへと分類していく。以下ではそれぞれの詳細な方法について記述していく。

3.1 自然会話データの分析枠組み

すでに述べたように、遂行的アイデンティティ構築の原則が指針となって、相互行為を通して遂行的アイデンティティは提示、構築されているものと考えられる。当然ではあるが、相互行為は他の参加者がいることによって成り立つ。すなわち、必ずしもこの原則通りに遂行的アイデンティティが構築されるわけではなく、他の参加者からも様々な遂行的アイデンティティが提示され(e.g. ラベリング: Becker, 1963=2011)、交渉される。本研究ではこのような遂行的アイデンティティの提示、交渉、構築の過程を自然会話のデータにおける分析対象として分析していく。遂行的アイデンティティは、相互行為を通して構築されるアイデンティティであり、その中身は非常に多様である。そのため、本研究では遂行的アイデンティティのうち、特に会話で構築されるカテゴリーに焦点をあてる。なお本稿では、ある位置づけが参加者双方からされたことをカテゴリー、あるいはアイデンティティが「構築」されたと呼ぶこととする。

3.1.1 成員カテゴリー化装置

会話におけるカテゴリーを分析するにあたり、本稿では成員カテゴリー化装置(Sacks 1972 a, b)の概念を用いる。成員カテゴリー化装置とは、カテゴリーの集合と二つの適用規則によって表されるものである。カテゴリーの集合とは、例えば「日本人」や「アメリカ人」というカテゴリーは、「国籍」という集合の中のひとつのカテゴリーであり、その集合の中のカテゴリーを用いてある成員をカテゴリー化する、ということである。適用規則には経済規則と一貫性規則があるとされ、それによると、ある成員をカテゴリー化する時には一つの集合の中に存在するカテゴリーでカテゴリー化することで十分であり(経済規則)、かつ、複数の人間をカテゴリー化する場合には、最初の一人をある集合の中のカテゴリーでカテゴリー化した場合、他の成員も同じカテゴリー、もしくは同じカテゴリー集合の中の別のカテゴリーでカテゴリー化される可能性がある(一貫性規則)。

Sacks(1995)はまた、MIR(membership inference-rich representative)カテゴリーについても議論している。それによると、ある成員がカテゴリー化される場合、その成員カテゴリーと関連した知識によってさまざまな推論がその成員に対してなされ、またその成員はその成員カテゴリーの代表としてカテゴリー化されるという(Sacks, 1995)。例えば、アメリカの文化に非常に精通している者であれば、「アメリカ人」とであると推察され、その成員が「アメ

リカ人」とカテゴリー化されたとすれば、その成員は「アメリカ人」の代表として見られるわけである。これはのちに、それぞれの集合内のカテゴリーには、カテゴリー化された者によって行われることが社会的に予測もしくは期待される活動(category-bound activity)とされた。例えば「発達段階」という集合における「赤ん坊」には「泣く」という活動が結びついており、子供が泣くことは社会的に予測されているわけである。

他方、このような成員カテゴリー化装置の概念を使った成員カテゴリー化分析

(membership categorization analysis: Lepper 2000, Stokoe 2012など)は、ときに連鎖組織の分析を元にならず、当事者の行為ではなく、研究者自身の推測や信念に基づいて行われていると批判されてきた(Schegloff, 2007)。例えば、Raynolds(2017)ではウエイトリフティングのトレーニング場面を録画したデータを使用し、リフティングを見るという行動がいかにしてウエイトリフティングの「チーム」としてカテゴリー化されているのかを分析している。それによると、「ウエイトリフティングを見るという行為」によって「チーム」というカテゴリー化が行われるときには、それがメンバー同士によって行為されているものであることを分析している。一方、「チーム」のカテゴリー化の要素である「ウエイトリフティングを見る」という行為は見知らぬ誰かによっても行われうるが、それは「チーム」の一員では無く、単なる「不審者」として扱われていることを示している。すなわち、カテゴリーに期待される活動が行われているために、そのカテゴリーが構築されているとするのは不十分だと指摘しているのである。Bushnell(2014, 2015)が指摘するように、成員カテゴリー化装置を用いて分析を行う際には、相互行為を徹視的に観察し、発話の連鎖とカテゴリー化の関係を記述していく必要があると考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では成員カテゴリー化装置の概念を用い、カテゴリーへの志向が直接的に表明されている場面(Schegloff, 1992)だけではなく、カテゴリーと結びついた活動が行われる、またはカテゴリーに関連した推論がされることによってカテゴリーが現れている場面を分析していく。例として以下の自然会話データ例を見てみたい。

自然会話データ例 1

1	アイ		玉川上水は:(1.5)あの人自殺したところ
2	ワン		誰:↑
3	アイ		走れメロンの(1.0)走れ、メロンじゃないぞ、太宰治
4	ワン		あ:::
5	アイ	->	太宰治知らない↑
6	ワン	=>	あ:知ってますね、日本で有名な小説家でしょ↑
7	アイ		うん:, が、にゅ-入水自殺した、でも今は水はないけど
8	ワン		hh
9	アイ		あんまり hh

この例はワンとアイが車で、玉川上水の近くを走っているときに録音された会話である。アイは玉川上水について、誰かが自殺した場所であることを示すが(L1)、ワンは誰の事なのかアイに質問をしている(L2)。するとアイは自身が話していた人物が太宰治であったことを明らかにする(L3)。ワンは理解したことを主張するが(L4)、アイはワンが太宰治を知っているかどうか確認を求めている(L5)。ここでアイは、太宰治を知らないという返答が優先的な応答(Sheglof, 2007)となるように質問を組み立てており、当初より太宰治を知らないことを想定している。すなわち直接は示されていないものの、「外国人」であるワンは太宰治を知らないだろうという推論がされている場面であると考えることができる。また、ワンも L6 において「日本」を有標化させることによって自身をその「日本」に属さない者、すなわち「非日本人」、あるいは「外国人」として自らを位置づけていると言えよう。このように、お互いがワンを「外国人」として位置づけることによってこの場面では「外国人」というカテゴリーが構築されていると考えることができる。本稿でも、自然会話のデータを詳細に見ていくことによって、参加者の相互行為を分析していく。そして、それぞれの場面においてカテゴリーがどのように構築されているのかを記述していくこととする。

3.1.2 探索的アプローチ

本研究では自然会話データに対して、どのようなカテゴリーが構築されているのかを分析していく。日本に住む外国人の相互行為を通して構築されるカテゴリーを分析した研究には、後述するように杉原(2003)や赤羽(2017)などがあるが、これらの研究はどのようなカテゴリーが構築されているかに焦点が当てられており、それらがどのように表示され、交渉され、構築されているかについてはあまり言及されていない。そのため、本研究において分析された自然会話のデータは、探索的アプローチによって分類していく。探索的アプローチは理論をデータによって確認する確認的なアプローチとは異なり、限られたデータを整理することによって仮説的な情報を探り出すことを目的としており、「データによってデータそのものを説明する(データ自体に語らせる)」ものである(石井 2018: 82)。

すでに述べたように、相互行為で構築される遂行的なアイデンティティは、繰り返し構築されることによって蓄積され、蓄積アイデンティティとしてある程度固定的となると考えられる。本研究で収集された自然会話データは縦断的なものではないが、分析されたデータを整理することによって、遂行的アイデンティティの構築、交渉、そして蓄積の過程を示すことを試みる。

3.2 インタビュー・データの分析枠組み

インタビュー・データの分析には、インタビューで語られた語りを分析するためにポジショニング分析を援用する。ナラティブ、特にスモール・ストーリーが語られている場面に焦点を当て、ポジショニング理論によって語りから遂行的アイデンティティ構築の原則を分析する。そして分析された遂行的アイデンティティ構築の原則を類型論的アプローチで分類していくこととする。以下、ポジショニング理論と類型論的アプローチについて詳述していく。

3.2.1 ポジショニング分析

本研究ではインタビューで語られた語りのうち、特にスモール・ストーリー (Georgakopoulou, 2007)が語られている場面に注目する。言語学における語りは、ナラティブとも呼ばれ、実際に起こった出来事と相応する一連の節によって話し手の自叙伝となるような一連の出来事を伝えることであるとされてきた (Labov 1997)。すなわち、ナラティブとは過去に実際に起こった出来事を伝えるものとして捉えられてきた。一方で従来のナラティブの定義に当てはまらない語りもナラティブとして分析する流れが現れた。このようなナラティブをスモール・ストーリーと呼び、スモール・ストーリーには、過去だけではなく、現在や未来、また仮定の出来事を語ることや、ほのめかし、語りの拒否などが含まれる (Bamberg, 2004; Bamberg and Georgakopoulou, 2008)。例えば秦 (2014: 124, 125) は、2011年に起こった東日本大震災を国外で見聞きした在留邦人に対してインタビューを行っているが、彼女らの「震災体験談」の中に、震災が起きるのが「もし前日だったら」「翌日だったら」という「仮説の話」としてスモール・ストーリーの例として挙げている。このようなスモール・ストーリーが、実際の相互行為においてどのように語られているかを分析することで語り手がその場でどのようなアイデンティティを示そうとしているのかが分析できるのだという (Bamberg, 2004; Georgakopoulou, 2007)。このスモール・ストーリーを分析する枠組みとして、本研究ではポジショニング分析を援用する。ここで述べるポジショニングはもともと、Davies & Harré (1990)によって、固定的な役割概念に代わるものとして提唱されたものである。Davies & Harréの定めたポジショニングとは、社会的な文脈の影響を受けながら、話の展開と共に生起する流動的なものであり (Langenhove & Harré, 1999)、Actions/Acts, Storyline, Positionの関係性によって分析される、相互行為上の位置づけである (Harré & Langenhove, 2010)。本研究におけるポジショニング分析は、Bamberg (1997, 2004)によってナラティブを語る行為の分析に合うように再定義された分析方法である。Bambergによるポジショニング分析はナラティブを、「今・ここ」における社会的相互行為によって、語りの内容からそれをどのように表すのかに至るまで強い影響力を受けたものとし

て捉えて分析する手法であり、以下の三つのレベルが分析される(秦2013)。

- ① レベル1：語りの世界におけるポジショニング
- ② レベル2：相互行為のプロセスにおけるポジショニング
- ③ レベル3：「私は何者か？」という質問に対する答え

Bamberg(2004)では、5人の15才の男子と、一人の大人のモデレーターが参加するグループディスカッションにおける語りを、このポジショニングによって分析している。この例では参加者が全員知っている「ある女子」が妊娠した可能性があることが明らかとなり、そのことについて話されている。①レベル1の分析においては、「ある女子」が主要な登場人物であるストーリーの中で、妊娠した子供をいかに墮胎させるかという方法を考えることが語られている。すなわち、その女子を無責任な悪い人物として位置づけられているのである。同時にそれは「悪い(at Fault)」女子にとっては普通のことであり、「普通(normal)」の女子すなわち良い女子と対照化されて語られていたことが分析されている。②レベル2では一連の語りを、参加者が共同で語ることや「us」という代名詞を使用することによってグループ化し、参加者を「男子」として位置づけ、「男子」と「女子」が違うと言う彼らの解釈が分析されている。一方で物語の登場人物である「ある女子」が大人としての合理性やモラルを持っていない点において他の「女子」とも異なっていることが、ふしだらな女に対する批判(Slut Bashing)という形で行われていることが示されている。これゆえ、③レベル3においてはこの場面の参加者である「男子」がいかに大人としての理性やモラルがあり成熟しているかが示されている。言い換えると、いかに彼らが「男性(male)」としてのアイデンティティを持っているかが示されていると分析されている。レベル3で分析される、彼らがここで示そうとしているアイデンティティは、レベル1とレベル2での分析をもとにしなければ明らかにすることは難しいだろう。

一方で、本研究ではレベル3で分析されるものにはアイデンティティのみではなく、そのアイデンティティ構築に関わる規則ないし規範も含まれると想定している。この三つのレベルについて、以下のインタビュー・データから抜粋した例を見ながらもう少し考えてみたい。

インタビュー例1

1	ロング	いや::、やっぱりほとんど無いですね、まあ、友達とネタ的にはありますけど hh
2	IR	ネタですか h
3	ロング	例えば、あの::友達とかと飲んで、最後にラーメン食べに行くかみたいな、よくあるじゃないですか

4	IR	そうですね h
5	ロング	そういう時とかに、こう箸を渡してくれたりするんですけど、ロング、大丈夫か、スプーンとフォークもらおうかっていう感じで hhh
6	IR	hhh
7	ロング	それでまわりもそれにのってきたり、ごめんやっぱステーキの方が良かったねみたいな、いや::大丈夫です hh、みたいな感じ::、でいじられることは、結構ありますね hh
8	IR	hhh そうなんですね h

この例はロングとのインタビューから抜粋した例であり、「ネタ」(L1)として外国人として扱われることがあると語っている場面である。詳細は 5 章で分析することにし、ここでは簡単に例を見ていきたい。

レベル 1 の分析においては、語りの世界におけるポジショニングが分析される。ここでは、語られるストーリーの登場人物としての自分が、他の登場人物とどのように関わっているかを見ることによって、語り手が何について語り、またその世界をどう捉えているかを導き出すものである。ロングの例ではライン番号(以下 L)3、5、7 におけるラーメン屋での出来事がこれに当たる。ここではロングとロングの友人たちがストーリーの登場人物となっており、お酒を飲んだ帰りにラーメン屋に入った場面について語られている。そこでは友人たちがロング箸を渡す際に、代わりにスプーンとフォークを店員に頼むことを提案したり(L5)、ロングの気持ちを代弁するようにステーキの方がよかったと言いながら、ラーメン屋に入ったことを謝罪している(L7)。ここでの友人たちは明らかにロングを箸の使えない、もしくはラーメンよりステーキを好む者、すなわち「外国人」として位置づけていることが分かるだろう。

レベル 2 の分析では、語られたスモール・ストーリーを相互行為のプロセスの一部としてと捉え、「今ここ」の語り手としての語り手が、なぜそこでその語りを行ったのかという行為の意味を分析する。ロングの例でいえば、L1 でロングが語っているように、これは「ネタ」として外国人として扱われることがあると述べられている点に注目したい。レベル 1 で述べたストーリーだけを見ると、ロングは友人たちから「外国人」として扱われている例に見える。また、これはロングと IR の発話に見られる笑いを見ても、両者の間でこれが「ネタ」であることが共有されていることが分かるだろう。すなわち、初めに「ネタ」という言葉を使用することによって、その後続く語りに対する本人の解釈を伝えているのである。言い換えるならば、「ネタ」であることを明示することによって、友人たちがロングに対して本気でフォークやスプーンを勧めているわけでも、ステーキの方がよかったと謝罪しているわけでもないことを、インタビュアー(以下 IR)に対して明らかにしているわけである。このようにレベル 1 とレベル 2 の分析を合わせることによって、イン

タビュアーが「今ここ」においてなぜそのスモール・ストーリーを語っているかを正しく理解することが可能となる。

レベル3では、レベル1とレベル2での分析を踏まえて、「自分をどのように見てほしいのか」、「私は何者なのか」という包括的なアイデンティティを分析する。レベル3において分析されるものは、進行中であるストーリーテリングの、常用を超えて保っているほぼ安定した実態としての語り手の自己であるという(イェルガコポロ 2013)。このような、「私は何者か?」という質問に対する答えとは、Baynham(2015)が定義する、蓄積アイデンティティとほぼ同義であるように思われる。しかし、ロングの例から分析される「私は何者か」という問いに対する答えは「私は、友人間では「ネタ」として「外国人」である」ということ以上は言えないだろう。

一方、1章で述べたように、Baynham(2015)が定める蓄積アイデンティティには、比較的固定的なアイデンティティのみではなく、それを一定の方向に方向付ける規則や規範をも含んでいる。すなわち、詳細は後述するが、レベル3で分析されるべきアイデンティティには蓄積アイデンティティから遂行的アイデンティティを構築させるまでのいくつかのレベルの規則や規範を分析できると考えられる。例えばロングは、インタビューの別の箇所において基本的に自分がアメリカ人であることは言わないようにしている。すなわち多くの場面において、ロングは自身のアメリカ人性、あるいは外国人性を潜在化させるようにする規則ないし規範を持っているのである。そうだとすると、上記のインタビュー例1から分析されたような「私は、友人間では「ネタ」として「外国人」である」という意識は、友人間という限定された場面に関する意識であり、蓄積アイデンティティあるいは多くの場面で適用される規則よりも下位のレベルに属するものであると考えられる。またこれは、多くの場面に適用される、アメリカ人性、外国人性を潜在化させるという上位レベルの規則とは矛盾するものであるが、次節で詳細を見ていくように異なる規則から影響を受け、友人間では「外国人」として位置づけられることを許容するという下位レベルの規則が働いているためであると言える。

以上の事から、本研究ではレベル3で分析されるものを、蓄積アイデンティティとそれを一定の方向に方向付ける規則や規範を含んだ「遂行的アイデンティティ構築の原則」としてとらえる。なお「原則」という言葉によって、意識的なものから無意識的なものまでを包括したものとして考えたい。すなわち、本研究ではインタビューにおける語りから分析されるものを以下のように定める。

- ① レベル1：語りの世界におけるポジショニング
- ② レベル2：相互行為のプロセスにおけるポジショニング
- ③ レベル3：遂行的アイデンティティ構築の原則

本研究ではまず、インタビューにおけるスモール・ストーリーが語られた場面に注目し、そのストーリー世界の登場人物がどのような場面で、何を行っているのか(レベル 1)、そしてインタビュアーとのディスコース上では、どのようなプロセスでそれが話されているのかを分析する(レベル 2)。この手順でいくつかの断片を分析し、最後に各断片における分析を踏まえて、協力者の遂行的アイデンティティ構築の原則を分析することとする(レベル 3)。

3.2.2 類型論的アプローチ

先ほど 3.1.3 で触れたように、語りのレベル 3 の分析において導き出される遂行的アイデンティティ構築の原則には、いくつかのレベルがあると考えられる。本研究では、この遂行的アイデンティティ構築の原則を分類していくために類型論的アプローチを用いる。

類型論は、特に言語類型論として発達したもので、世界中の諸言語の特徴を分析し、その類似関係から分類をしていく学問である(Whaley, 1996=2006)。言語類型では、言語の構造に焦点をあてて分析をするが、その対象となるのは音声、形態、統語、意味など多岐にわたるが(児玉 2012)、対称となるのはあくまでも言語である。

Neustupný(1978)は言語の社会的な側面に注目して典型的に考察を行っており、そこからより広い文化や社会的側面への、類型学的アプローチの適用について論じている(ネウストプニー1989)。また、村岡(2010a)ではネウストプニーの類型論的アプローチを用いながら、習慣化された言語管理がどのように記述されるべきかが述べられている。以下その内容を簡単に記述しながら、本研究における類型論的アプローチと遂行的アイデンティティ構築の原則について述べる。

類型学的アプローチを言語からより文化や社会的な側面へ適用するにあたり、ネウストプニー(1989)はタイプを「相互依存の関係にある現象のセット」(p. 283)、もしくは「同一または類似の一般原理のセットにより生成されたために、相互に関連している社会的特徴の一セット」(p. 288)、あるいは「さまざまな程度の一般性をもつ原理により生成された相互に関連のある特徴のセット」(p.301)と規定し、全体論(Mouer and Sugimoto, 1986)との違いを以下のように強調する。「第一に、タイポロジーは、同一の一般原理で支配されている数多くの特徴のセットがあることを前提にしているものの、一つの文化や社会のあらゆる特徴が単一の原理で支配されるとは措定していない」、「第二に、あるタイプを支配する一般原理は、確かに下位の新しい原理や規則を生成し、社会的特徴を生成する。しかし、ある原理が具体的な条件の下でどのように作動するかは多くの要因に影響される」、「第三に、社会の中の行動上のバリエーションを逸脱行動とみなす立場をとらない」(p. 286)。すなわち、社会や文化における特徴は、複数の原理によって成り立っており、具体的な条件下で作動する一つの原理がその体系全体を指すことにはならない。そして単一の体系内には複数のタイプが共存しているため、ここでその原理にあてはまらない者は逸脱ではなく、その体

系を構成するバリエーションやコンフリクトとしてみなされる。

そして、言語的、非言語的を問わずさまざまなレベルのタイプについて記述し、タイプを構成する原理をいくつかの段階にわけ、以下の尺度を提示する。なお、ネウストプニー自身が述べるように、これは「二つ以上の原則の一般性レベルを比較する」(p.301)ための尺度の出発点であり、すべての原則をここに当てはめることができるものとして提示しているわけではない。

- ①決定要因：最も一般的な原理、特定の生産様式や決定的に重要な経済的ないし地理的な要素
- ②マクシム(大原則)：広範囲に影響を与えるが、決定要因ほど一般的ではない
- ③ストラテジー(戦略)：ある特定の領域の行動に固有のもの
- ④普通規則：行動の区切れ(segment)のいくつかの特徴を支配しているもの
- ⑤併記規則：普通規則の例外であり、普通規則と同じレベルに属す

村岡(2010)では、中国吉林省延吉市で行われた朝鮮族の大学生に行ったインタビューに現れたマクシムとストラテジーを分析、考察している。その一つを取り上げてみたい(p.55, 56)。なお、マクシムに関して、村岡では表記はマキシムとなっているが、表記を統一するため、直接引用部以外はマクシムとする。

マクシム：朝鮮族の行く場所、漢族の行く場所を分けたりしない

ストラテジー：漢族の美容師はだいたい北京で勉強してくるが、朝鮮族の美容師は韓国の流行を勉強しているので、朝鮮族のほうを選ぶ

村岡の分析では、ここでのマクシムは、少なくとも延吉市におけるネットワークのあり方に対する社会一般の態度を示している。そして、ストラテジーの方では美容院の選択が技術力を基準にしており、技術力が高い、あるいは望ましいと思う技術をもっている美容師であることから朝鮮族の美容師が選択されており、必ずしもマクシムと矛盾しないことが述べられている。これはネウストプニー(1989)が述べるような、「より高い次元の複数の原理がより低い次元の一つの原理の形成を促している」(p.304)、もしくは「体系内で同時に作用しているいくつかの他の原理によって決定」(p.305)されている事例として考えられるだろう。すなわち、インタビューで直接的に語られていないマクシムとして、「韓国の流行に従う」というような原理をもっており、それに則ったストラテジーが語られている、と考えることができる。当然ながら、経済的な理由をマクシムとして持っていれば、「安いところに行く」というストラテジーが語られることが予想される。このような複数の原理が複雑に絡み合うことによって、ネウストプニーが述べるようなバリエーションやコンフリク

トが発生するわけである。

村岡(2010)はさらに、決定要因から規則までの各レベルの特徴と階層性の性格について以下のように説明を加えている(p. 53)。

(i)ネウストプニーが指摘しているように、これらの関係はゆるやかな相互依存関係としてあり、必ずしも構造主義的な意味での階層性が含意されているわけではない。相互依存関係は顕在化されていない言語意識にも開かれた系をつくっていると考えることも可能である。

(ii)これらの相互依存関係について、通常の(unmarked)言語使用であればルールとストラテジーとマクシムの中に自然な相互依存関係が見られるが、ときにはマクシムがルールとの間に強い関係を作っている場合(e.g. 社会的・政治的なマクシムがルールを縛っている)や、マクシムとストラテジーが対立しているように見える場合(e.g. 経験してきた場面や状況によってマクシムとは異なるストラテジーを構築せざるをえなかった)、などの矛盾をはらんだ相互依存関係がありうる。

(iii)相互依存関係を開かれた系としても構築していくとすれば、そこに含まれるルール、ストラテジー、マクシム、決定要因にはある程度、雑多な言語意識が含まれざるを得ない。重要なことは、あくまでも階層的な関係性であり、階層内のメンバーシップではないと考えられる。

3.2.3 遂行的アイデンティティ構築の原則

村岡(2010)ではさらに、ディスコースにおける言語使用や言語管理(Neustupný, 1985; 1994)には、「当該場面に限られた、ミクロな現象だけではなく、接触場面に参加する際の言語に対する態度や意識」(p. 49)が観察可能であることが指摘されており、このような習慣化された言語に対する行動を接触場面向かう管理として、類型論的アプローチによる考察が行われている。それによると、上述の類型論的アプローチにおけるルール、ストラテジー、マクシムないし原則、決定要因という四つの階層のうち、マクシムとストラテジーは「顕在的ないし潜在的に知識として個人に所有され」(p.53)ているものであり、接触場面向かう管理にあたるものとして考えることができるという。

ここでの考察は、相互行為を通して示される遂行的アイデンティティについても同様のことが言えるだろう。例えば Goffman(1963=1980)がパッシングと呼ぶような、ステイグマだと判断されうると本人が感じているような蓄積アイデンティティを他者に隠そうとする行為がそれにあたる。このような行為は、日本語の使用や学習の原則(村岡 2017)と同様、相互行為が繰り返されることによって形成され、ある程度当人の中で習慣化されていくものであると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究においては、インタビューにおいて語られる遂行的アイデンティティ構築に関わる当人の意識もまた、顕在的ないし潜在的に知識として個人に所有されるようになった、いわば遂行的アイデンティティに対する態度や意識として捉えていく。本稿ではこのような遂行的アイデンティティ構築に関する態度や意識を遂行的アイデンティティ構築の原則として考えていくこととする。そして、遂行的アイデンティティ構築の原則を類型論的アプローチによって分類していくために、次の4つのレベルを定める。

- ①決定要因：遂行的アイデンティティが繰り返し構築されることによって形成された蓄積アイデンティティ
- ②マクシム：場面や参加者に関わらず、広く一般的に適用可能な自己呈示に関わる態度や意識
- ③ストラテジー：特定の参加者や、特定の場面などマクシムよりも限定的な自己呈示に関わる態度や意識
- ④普通規則：マクシムやストラテジーを、相互行為を通して達成するための実際の行動や言語使用

まず最上位にはマクシムやストラテジーなどを決定する要因となる蓄積アイデンティティが存在する。マクシムは場面や参加者によって限定されない、広く一般的に適用可能な態度や意識が、ストラテジーには特定の参加者や、特定の場面などマクシムよりも限定的に適用される意識や態度を指している。ここまで概観してきた村岡とネウストプニーによる類型論的アプローチについての主張をまとめると、遂行的アイデンティティの構築の原則は、以下のように示すことができるだろう。ただし、これはあくまでも概念的なものである。

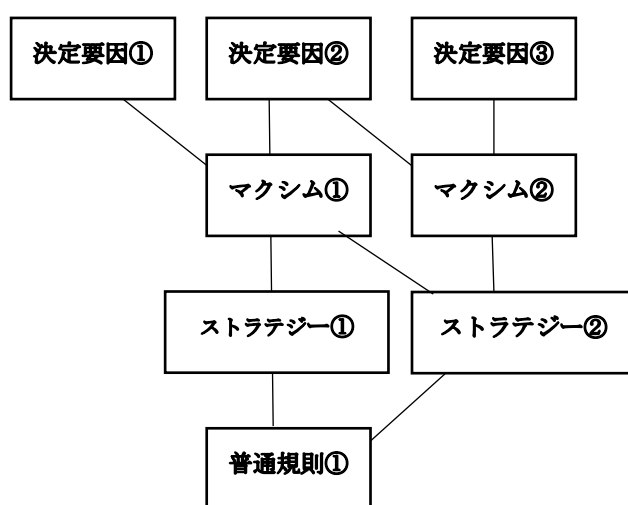


図4：遂行的アイデンティティ構築の概念図

また、マクシムやストラテジーには、インタビューによって語られる、一般的な原則や社会通念、個人的な態度や方針などが含まれる。次の二つの例を見てみたい。

インタビュー例 1 :

1	IR	職場で、日本語、その日本人の人が多くなって言っていましたけど、どうですか、大変だったんじゃないですか
2	チャド	大変でした、大変でした
3	IR	ん::
4	チャド	そのほんとに汗かいたです
5	IR	ん::
6	チャド	その、いろいろ聞くんじゃないですか、日本って::、その先輩後輩上司、あの部下ってすごい、強いじゃないですか、それを聞くじゃ
7	IR	ん:
8	チャド	で::表現のできない、私をあの:、 structure がすごい強いところ、にいれると: すごい汗かくんですよ
9	IR	Hhh
10	チャド	失礼なこ k-こと言いたくないわけね

この例はブラジル人であるチャドへの調査者(以下 IR)によるインタビューの断片であり、チャドの言語使用に対する原則が示されている場面である。IR が L1 で IR がチャドの職場で日本人が多いので、日本語の学習歴が短い時は日本語でコミュニケーションをとるのは大変ではないのかと確認を求めると、チャドは、それを大変だったと確認を与える(L2)。さらに続けて日本語でコミュニケーションをとることは、とても汗をかくことであることを述べ(L4)、さらに日本の社会通念について語り始める。L6 で日本では先輩や上司と部下の関係がとても強いことを聞くということを述べ、さらにそれを **structure** が強いと言い換え(L8)、続けて失礼なことは言いたくない、と語っている(L10)。すなわちチャドにとっては、日本の上司(先輩)-部下というのは非常に強い結びつきがあり、きちんとした日本語を使用しないと、相手に対する失礼に当たる場合があると述べているわけである。これはチャドが様々な場面で聞いてきた話であり、少なくともチャドはその結びつきを日本の社会通念として理解している。そして、その結びつきにおいて汗をかきながら苦心した経験が語られており、職場という限定的な場面においては上司や先輩に対しては失礼な言葉遣いをしはいけないというチャドのストラテジーが語られていると言えよう。

また当然、マクシムやストラテジーはより個人的な態度や意識でもありうる。

インタビュー例 2 :

1	ロング	今はそんなにないですかね
2	IR	そんなになってことはたまにはある感じですか
3	ロング	たまには::、まあたまにはあるっていうか名前を言ったらほぼ聞かれるので、ハーフですか::↑みたいな hh
4	IR	あ::
5	ロング	いや、一応アメリカ人ですって hh
6	IR	なるほど h 一応 hh
7	ロング	そう、でもずっと日本なんで英語できないんですけど、ってね hh
8	IR	あ::もう言っちゃうんですね
9	ロング	そうですね、だいたいじゃあ英語::できるんですね:とか、ん:, これ英語でなんていうのみたいなことを言われるので、うん、事前にもう英語できないです、って言っちゃいますね
10	IR	なるほど

この例はロングに対する IR のインタビューからの断片である。この例は、IR の日本で外国人、あるいはアメリカ人として扱われると感じることはあるか、という質問に対する答えから始まる。それに対してロングは「今はそんなにない」、という返答をしている(L1)。さらに IR は「たまにはあるのか」とさらに質問を行うと(L2)、「名前を言うと大体聞かれる」と返答し、さらに例を語りだす(L3、5、7)。まず L3 では「ハーフですか」という他者の声を引用して提示し、さらに L5 においてそれに対する自身の返答を、「一応アメリカ人です」と語っている。さらに、IR による繰り返し(L6)に促される形で、一応アメリカ人という意味を「ずっと日本なんで英語できない」と、ずっと日本に住んでいるため英語ができないが、国籍はアメリカ人であるということを語っている。さらに、L9 でそこまでの自身の語りをまとめて、「事前に英語ができない」と述べることを語っている。

この断片では自身の外国人性が相手に伝えられた場合の方針についても語られている。すなわち、自身の外国人性が相手に露見した場合には、自分が「一応」アメリカ人であるが、英語ができないと述べることである。これはアメリカ人であることが明らかになった場面において、「アメリカ人」にかかる英語ができるという期待を否定する、ということであり、そのアメリカ人性を最小化するというロングの個人的なストラテジーが語られているということができよう。

他方、前述のとおりマクシムやストラテジーが、複数のより高い次元の原理によって決定することには注意が必要である。すなわち、高い次元の原理と矛盾するようなマクシムやストラテジーが語られていた場合、そこには必ずインタビューで語られていない別のマクシムやストラテジーが存在することが考えられるのである。

普通規則に関して、ネウストプニー(1989)では個々の料理の作り方についての普通規則について言及がされているが、すなわち実際の場面においてどのようにふるまうか、あるいはどのような言語使用をすべきか、という知識が含まれていると考えられる。村岡(2010)では、上記 4 レベルのうち、マクシムとストラテジーが接触場面に向かう管理として考察されているが、本研究ではこの 4 つのレベルすべてが遂行的アイデンティティ構築の原則として捉える。注意すべきなのは、インタビューにおいても普通規則のレベルの語りが見られることがある点であろう。例えば言語使用に関して言えば、今(2012: 59)では、日本居住の韓国人である KR2 が、仲良くなった友達に対して、韓国語のコミュニケーション規範を適用して「お姉さん」と呼ぶ例が挙げられており、これは KR2 が望む、人との付き合い方を実現するために行われているものだと分析されている。すなわち、「人とは、個人的に自由に付き合いたい」というより高い次元の原理を、実際のインターアクションにおいて「お姉さん」という呼称を使用することによって実現しているわけである。例 3 のロングの事例で置き換えるならば、ロングが事前に「英語ができない」と述べるのがこれにあたる可言えよう。注意しなければならないのは、普通規則として語られているものは、様々な場面で繰り返され、それが固定的な方法として蓄積されていなければならない点であろう。ロングは様々な初対面場面、KR2 は友人との会話と、繰り返し行っている言語使用であると考えられるが、一度きりの経験を話した際の言語使用が語られていたら、それをそのまま普通規則として考えることはできないだろう。いずれにせよ、このようにインターアクションにおいてみられる普通規則の一部はインタビューで語られる場合もある。

3.3 本章のまとめ

以上のことをまとめると、本研究における分析の枠組みは、以下のようになる。

まず自然会話のデータは、相互行為を通して表示、構築されるカテゴリーに注目し、成員カテゴリー化装置の概念を用いて、その構築過程を会話分析的な手法で記述していく。これは相互行為を通して構築されるものをすべて含むため、協力者自ら表示する者だけではなく、他の参加者によって表示されるものも含めて分析を行う。

またインタビュー・データは、インタビューで語られた語りから、ポジショニング分析を援用することによって、レベル 3 の分析において遂行的アイデンティティ構築の原則を導き出す。さらにレベル 3 で分析された遂行的アイデンティティ構築の原則は、類型論的なアプローチによって、4 つのレベルへと分類していくこととする。

第4章 自然会話データにおける遂行的アイデンティティの分析

本章では調査協力者の自然会話データ、特に遂行的アイデンティティの一部として文化的カテゴリーに注目して分析を行っていく。まず、4.1節では本研究が焦点を当てる文化的カテゴリー、および外国人カテゴリーについて先行研究を概観し、外来性が見られる場面に注目し分析を進めていくことを論じる。また、本章でのデータは、探索的アプローチにもとづき、個人では無くデータの種類ごとに分類して節が構成されている。以下にそれぞれの節の概要を記す。

Neustupný(1985)は、何らかの外来性によって逸脱が生じることが接触場面の特徴であると述べている。そのため4.2節ではまず、逸脱が生じている場面に注目し、その調整の過程で文化的、あるいは外国人カテゴリーが構築されている場面について分析を行う。一方で、文化的あるいは外国人カテゴリーは逸脱が生じていない場面においても、そのカテゴリーに結びついた期待を利用するために構築されうる。一方で、その期待が利用されることが望ましい場面であっても必ずしも表示されず、潜在化されることも考えられる。4.3節ではこのような逸脱の生じていない場面について分析していく。すでに議論したように相互行為を通して構築された遂行的アイデンティティは、個々人の中に蓄積されていく。4.4節では、このように蓄積されたカテゴリーが表示、構築されている場面について分析する。一方それが相互行為であり他の参加者がいる以上、ディスコース上に示されたカテゴリーはそのまま構築されるわけではなく、相手によって否定されることもある。4.5節ではこのような、示されたカテゴリーが交渉されている場面を分析していく。4.6節では、それまでの分析から、蓄積された相手のアイデンティティが、彼らの中で異なる意味合いをもつことを分析していく。すなわち、カテゴリーの構築や交渉を繰り返すことによって、参加者感で独自に作り上げたカテゴリーの意味、すなわち個人化されたカテゴリーが構築されている場面を分析していく。最後に4.7節で本章で分析されたことをまとめ、協力者ごとにどのようなやりとりがされていたのかを述べる。

4.1 文化的カテゴリーと外国人カテゴリー

文化的・言語的な背景が異なる者同士が参加する接触場面において生じる問題は、主に言語管理理論(Neustupný, 1994; ネウストプニー1995)の視点から様々な研究がされてきた。初期の接触場面研究では、「母語話者」「非母語話者」という枠組みが使用されていたが、後に「言語ホスト」「言語ゲスト」(ファン 1998; 春口 2004)という枠組みに置き換えられ、主に彼らが接触場面においてどのような言語使用をしてきたのかに注目してきた。近年の研究では footing の概念を用いて、会話の参加者がどのように相手、また自らを位置づけで

いるのかを分析する試みがされているものの(e.g. 今 2011; 村岡 2016b)、接触場面においてどのようなカテゴリーが適用されているのか、どのようなやりとりを通してそのカテゴリーに属する者として位置づけられているのかについてはまだ十分に研究されていない。

特に会話分析など、エスノメソドロジーの視点での研究においては、アイデンティティはインタラクティブにおいて参加者が管理する様々なカテゴリーとして見られ(Bushnell, 2014)、会話におけるどのようなやりとりによってカテゴリーが構築されているかが注目されてきた(i.e. Watson, 1997; Housely & Fitzgerald, 2009)。日本においても、西阪(1997)以降、カテゴリーについて様々な研究が行われており、特に、日本語教育や第二言語習得の観点から、対称的-非対称的な関係性に着目した研究(岩田 2005)や、「〇〇人」のような国籍カテゴリーについて扱った研究(河野 1999; 杉原 2003)が多い。

杉原(2003)は地域住民を対象とした多文化間対話活動を対象とし、「〇〇人」という国籍カテゴリーのみではなく、参加者の多様なカテゴリーが現れていたことを明らかにしている。一方で、「〇〇人」というカテゴリーが「日本人/外国人」という二項対立的なカテゴリー対の枠組みで現れており、国籍カテゴリーが「外国人」カテゴリーにつながっていることが示唆されている。赤羽(2017)は第三者言語接触場面(ファン 1999)における参加者のカテゴリーを分析しており、当該場面においても「〇〇人」のような国籍カテゴリーが現れること、およびそのようなカテゴリーによって「〇〇人/××人」というカテゴリー対が形成されたり、「外国人」というカテゴリー集合が形成されることによってそれと対立する「日本人」というカテゴリーについて言及されることを指摘している。一方で、Bushnell(2015)では、「外国人」カテゴリーに着目し、外国人の入場を禁止している浴場における、日本に帰化した白人客と日本人従業員とのやりとりを分析している。その中では「日本人/外国人」というカテゴリー対を形成するまでに、カテゴリーと結びつけられた様々な属性(法的な身分や、見た目など)を提示しながら交渉が行われる過程を微細に分析している。

これらの研究は、異文化間コミュニケーションは「相互行為における具体的展開におけるさまざまな偶然的条件に依存している」、という西阪(1997: 91)の指摘を裏付けるという意味においても有益な研究であると言える。一方で、これらの研究では国籍カテゴリーと「外国人」カテゴリーについて言及しているものの、両者の関係が十分に考察されていない。また、これらのカテゴリーが現れる言語行動として、杉原は国籍カテゴリー有標質問、赤羽は国名が含まれる質問や情報提示を挙げているが、Bushnell(2015)が指摘するようにカテゴリーに対する直接的な言及だけではなく、カテゴリーと結びついている属性や権利などにも注目していく必要があるだろう。

接触場面の特徴は何らかの外来性(Neustupný, 1985)の存在であるとされている。すなわち外来性の存在によって接触場面においては規範からの逸脱が生じるのである。逆に考えるとこれらの逸脱が留意され、調整されている場面においては、「外国人」や文化的なカテゴリーが適用されている可能性がある、ということでもある。フェアブラザー(2003)では、外

来性には外見的、言語的、社会言語的、社会文化的の四つがあるとしているが、ひとまずはインターアクション上にこれらの調整が行われている場面、もしくはこれらに関連した発話がされているところに注目し、どのような「属性」が構築されているのかを分析していく。

4.2 逸脱が生じている場面で構築されるカテゴリー

4.2.1 日本語の「学習者」としての「外国人」

会話例 1:

1	チャド		いやなんか子供から[(0.4)自分自分が:、人間として覚えてる:時の、友達
2	タカ		[あ:
3	タカ	->	あれね、幼馴染ってやつね
4	チャド		おさ[な-
5	タカ	=>	[幼馴染、だから:フレンド、フロム、チャイルドフッド[みたいな=
6	チャド		[そそそそ
7	タカ		=ずっと幼稚園ぐらいからの友達[幼馴染っていうの、幼いっていう
8	チャド		[そそそそ
9			(0.5)
10	チャド		おさ[ない
11	タカ		[幼いって小さいってこと[、 幼馴染っていうのは小さい=
12	チャド		[あ:なるほど
13	タカ		=ころからずっと:なじみ[、 ずっと一緒にいたってこと
14	チャド		[ん: ずっと、 そそそそそ

この例はブラジル人であるチャドと、その友人であるタカの会話である。この例の直前ではチャドが広島で結婚式を挙げたことを語っており、その式にブラジルから幼馴染がやってきたことを語っている。しかし、幼馴染という単語が思いつかず、それを「自分が人間として覚えてる時の友達」と表現している(L1)。するとタカはその、表現を幼馴染という言葉に置き換え(L2)、L4でチャドからの不理解が示されると(あるいは不理解を予想していた可能性もあるが)、今度は、幼馴染を英語風の表現へと言い換えて発話している(L5)。この時点でチャドからは理解が示されているものの(L6)、さらにタカはそれを別の日本語表現へと言い換えている(L7)。加えて幼馴染という語を構成する幼いという語をチャドに提示するが(L7)、少しの間が開き(L8)、チャドからの理解が示されなかったことを受け、幼いをやさしい語彙へと言い換え(L11)、さらに馴染みという語を提示し、それをやさしい表現へ

と言い換える(L13)ことによって幼馴染という語をチャドに説明している。

タカは一度幼馴染という言葉で提示するが、チャドからは理解が示されなかったため、あるいはその不理解を予想していたために、チャドは幼馴染をカタカナ英語¹へと言い換え、「フレンドフロムチャイルドフード」と表現しているわけである。仮にこの場面が内的場面であったと仮定すると、幼馴染という語が提示された時点で相手からは理解が示されるはずであるし、理解が示されなかったとしてカタカナ英語への言い換えがされるとは考えにくい。すなわちここで行われているやり取りは、明らかに内的場面とは異なる行為が行われていると言えるだろう。この例はチャドの幼馴染という語の産出に問題が生じたものであり、伝統的な接触場面研究においては言語能力に関わる逸脱が生じている場面として捉えられる。

一方、この場面でタカがカタカナ英語に置き換え、チャドによって理解が示されたにも関わらず、タカが幼馴染という語の説明を継続している点が興味深い。すなわち、内的場面でもありうるような単純な語の忘失という可能性が、L4におけるチャドの不理解の表明、あるいは理解の不表明によってなくなると、タカはその語の説明をチャドに対して行っているのである。

ここでは日本語の「言語ホスト」対「言語ゲスト」というカテゴリーが構築されているとも考えられるが、この事例では、タカはチャドの発話を言い直すだけにはとどまらず、その語の説明までも行っていることから、単なる「言語ゲスト」ではなく「学習者」としてチャドを捉えているという方が適切であろう。そのため、タカはチャドに幼馴染という語について説明を行っているのだと考えられる。

4.2.2 中国語の「言語ホスト」の構築

日本に生活をしており、日本語を使用している場面であったとしても、必ずしも日本語の「言語ゲスト」や「外国人」、あるいは日本語の「学習者」といったカテゴリーが構築されるわけではない。次の会話例では中国語の「言語ゲスト」「言語ホスト」というカテゴリーが構築されている。

会話例 2:

1	アイ		国立は:、市民運動がすごく強いところで:
2	ワン		あ:::
3	アイ	->	あの:::(0.8)なに、歩道橋↑、[なんちゅうんだっけ中国語で
4	ワン		[はい

¹ 細田(2008)では外来語と日本語的に発話された英語をカタカナ英語と呼んでいる。本稿でも日本語的に発話された英語をカタカナ英語と呼ぶこととする。

5	ワン		あ[の:]、
6	アイ	=>	[プウチャオじゃなくて[なに
7	ワン		[ホンシンプウダオこれ
8	アイ		ホンシンプウダオっていうの↑、[こういうふうに、まあ、あの
9	ワン		[はい
10	ワン		あテンチャオ↑
11	アイ		テンチャオだ、テンチャオ作らせない運動()
12	ワン		あ:::(1.2)それいいですね

この例では日本人であるアイが国立について、中国人であるワンに説明を行っている。アイは、国立では市民運動が強いという説明を行い(L1)、L11でも述べているように、その例として歩道橋を作らせない運動を行っていることを提示し始める。アイは、「あの」語尾をのびして発話し、少しの間後、歩道橋という単語を提示する(L3)。その後ワンに対して歩道橋が中国語で何というかという質問を行っている。これは、「あの」の語尾が極端に長音化されていることや、その後の間から歩道橋という単語を中国語に言い換えることを試みていたと判断できる。歩道橋という単語が思い出せずに生じた間であるとも考えられるが、その後に発話された中国語でなんと言うのかという質問とのあいだには間や言いよどみがないことから、初めから歩道橋を中国語で発話しようとしていたと考える方が自然であろう。どちらの場合でも、アイは中国語での単語が思いつかず、逆にワンに対して歩道橋を中国語でなんというのかを質問している(L3)。ワンは「あの」と発話してその質問に対する返答を始めるが(L5)、アイはそれと重なって発話することによって、歩道橋がプウチャオのようなものであることを提示し、ワンの推測を促すとともに、自身がその単語の知識を有していることを主張する。また後述するように、これは L11 における発話からも読み取ることができるだろう。ワンは L3 で発話された質問に対してその答えだと思われるものを提示する(L7)。アイはその語を繰り返して確認を求め、さらに、おそらく是非言語行動を交えながら、説明を継続する(L8)。するとワンは改めて中国語の語を提示し、アイに確認を求める(L10)。するとアイはその単語に確認を与え、それを作らせない運動と、L1 で述べられた市民運動という元の文脈に戻っている。L6 から L11 までの一連のやり取りを見ると、アイは自身が思い出せない単語をワンに提示してもらおうとしているように見える。すなわち、L6 における中国語の知識を有しているという主張から始まり、L7 で単語提示されても L8 で上昇イントネーションによって確認を求めさらに説明を継続し、最終的に L10 で自身の探していた単語が提示されると、L11 でその単語であると断定し、元の文脈に戻っているわけである。

この例では、L3 でアイによって歩道橋という単語が提示されるとすぐに中国語への言い

換えが試みられている。この言い換えに関しては二つの可能性が考えられる。一つ目はワンが非言語的な手段を用いて不理解を表明していた、もしくは歩道橋という言葉がワンの不理解につながるとアイが考えていたために中国語に言い換えようとした可能性である。もう一つは、アイが中国語の学習者であることを示すために、歩道橋に言い換えようとした可能性である。この場面だけではどちらと判断することは難しいが、いずれの場合にせよそれを中国語への言い換えが試みられ、さらに中国語で何というのかをワンに質問しているという点が興味深い。すなわち、ここでは中国語をワン自身が教えることができるという推論が用いられ、中国語母語話者、あるいは中国語の「言語ホスト」として位置づけようとしていることが考えられる。ワン自身はその位置づけに対して、ワンは抵抗や交渉をせずにカテゴリーの構築がなされていると言えよう。他方、アイは「プウチャオじゃなくて」発話をしたり、またワンからテンチャオという単語が発話されると、「テンチャオだ」と、同意する形で返答をしており、元々中国語に関する知識を有していることを主張していると言える。すなわち、ここでは中国語の「学習者」であるアイが中国語母語話者でもある中国語の「言語ホスト」であるワンに対して質問を行っていると言っていることができるだろう。

4.2.3 社会文化的知識をもたない「外国人」

一方で、このような「教える者」対「学ぶ者」という対関係は、言語能力に関わる場合にのみ構築されるわけではなく、文化的な事柄についてやりとりを行う場面においても構築されうる。次の会話例を見てみたい。

会話例 3:

1	タカ		それ知ってるなにか
2	チャド		ん
3	タカ	->	あんきも(0.4)あんきもって知ってる↑,ま h ず h い h
4	チャド		あんきも
5	タカ	->	あんこうって分かる↑
6	チャド		うんうんうん
7	タカ		あんこう,あんこうってあれじゃないよ
8			(1.8)
9	チャド		豆のやつ↑
10	タカ		豆じゃないよ h
11			(5.0)((おそらく携帯で英語訳を見せる))

12	チャド		angler
13	タカ		知らない↑
14			(5.5)((おそらく携帯で写真を見せる))
15	タカ		知らないこの魚
16	チャド		あ::なるほどなんかすごく深いところに[住んでるやつ
17	タカ		[あ::そうそうそう
18	タカ		これの:(0.3)レバーね
19	チャド		ん
20			(1.4)
21	タカ		が[すごい
22	チャド		[食べれるの
23	タカ		え↑
24	チャド		食べれる[の
25	タカ	=>	[いや,それ超有名だから,高級,[高級:食材だから
26	チャド		[うん
27	タカ		そ↑う
28			((中略))
36	タカ	=>	冬の日本のポピュラーな食べ物は:,あんきもと:,あと,牡蠣,オイスター

チャドの例はタカとチャドが居酒屋で会話している時のものである。この例の直前では、タカが注文したあん肝が運ばれてきている。チャドはチャドがその食べ物を知っているかの確認を求め(L1)、さらにあん肝という単語を提示してあん肝を知っているかという確認へと言い換える(L3)。チャドはあん肝というタカの発話を繰り返すだけであり、あん肝に対しての理解は表明されていない(L4)。するとタカは、今度はあん肝が何なのかについて説明を開始する。まず、あんこうという魚の名前を提示し、あん肝を理解するための前提の知識、すなわちあんこうという魚を知っているかの確認を求める(L5)。チャドはそれに確認を与え、あんこうを知っていることを主張するが(L6)、その主張はタカによって否定される(L7)。タカに否定されたことを受け、今度はチャドがあんこうのことを「豆のやつ」と上昇のイントネーションをともなって発話することによってタカに確認を求めるが(L9)、タカはそれを再度否定する(L10)。少しの間あつとチャドが angler と発話しており(L12)、この間でタカがチャドに英語訳を見せていると推察される。タカはチャドに angler という魚を知っているか確認を求めるが(L13)、チャドからの返答はない。再度少しの間が開き、タカが再度魚を知っているか確認を求めているが(L15)、この際タカは「この魚」と発話しており、携帯を

使って写真を見せていると推察される。するとチャドは、今度はその魚についての知識を述べることによって確認を求め(L16)、今度はタカによって確認が与えられる(L17)。タカによって確認が与えられることによって、二人の間にあんこうという魚に関する知識が共有されていることが確認されていると言えよう。続けてタカはその確認された魚のレバーであると述べ、あんきもの説明に戻っている。少しの間の後、タカはなにかを発話しようとするが、(L21)これはチャドの発話と重なり(L22)、チャドが発話のターンを得る。チャドがあんきもを食べることができるのか、と確認を求めると(L22,24)、タカはそれが「超有名」で、「高級食材」であることを述べて確認を与えると(L25)、チャドはそれをやや驚いたように受け入れている(L27)。さらにこのあと日本酒と合う食べものについてやり取りがなされ、最終的にタカはあんきもと牡蠣を日本のポピュラーな食べ物として位置づけている。

この例でのやり取りの中で、タカはあんきもという食べ物についてチャドに確認を求めながら説明しており、それは「あんきも」という言葉ではなく、あんきもという言葉がさす食べ物についての説明であるように思われる。例えば「このレバー」という説明や、重なりが生じて中止されたものの、「がすごい」というあんきもに対するタカ説明の継続などにも現れているようにも思える。そして事実として、あんきもがあんこうのレバーであると確認されたあと、チャドも「あんきも」という言葉の確認ではなくそれが食べられるものであるかを知っているかどうかという質問を行っていることから分かるだろう。さらに言うとなかはこのやり取りにおいて、チャドを外国人として位置づけているということが出来るだろう。なぜならば、タカによるとあんきもは「超有名」な「日本」の食べ物であるからである。すなわちこの例はあんきもという社会文化的な知識を持たない「非日本人」、すなわち「外国人」に対して、「日本人」であるタカがそれを教えている場面と行うことができるだろう。

4.2.4 逸脱を理解するための「ハワイ人」カテゴリー

一方、会話例 1 に対する会話例 2 のように、社会文化的な知識に関しても必ずしも「日本人」対「非日本人」というカテゴリー対が構築されるわけではない。次の会話例では逸脱が「ハワイ」という場所と結びつけられ、「ハワイ人」というカテゴリーが構築されている。

会話例 4:

1	フルタ		でもなんかいま、とどめをさすために、、なんか海外から、、来てるらしいんすよね、
2			なんか、あの、ちょっと、よさげなハンバーガー屋が[(1.0)有名な
3	ツルノ		[へ::
4	スミス	→	アービーズとかこないかな
5			(2.5)

6	スミス	→	超アービーズ食いて:すもん
7	フルタ		[それ
8	ツルノ		[いいんじゃん、いいんじゃん、いいんじゃんもうじゃあ、
9			あのドネルケバブとかのお店でさ
10	スミス		h ケバブで全然いいすけど
11			(0.5)
12	フルタ		():さん
13	スミス		h
14	フルタ	=>	それあれ、あそこにあんの、ハワイにあんの
15	スミス		ハワイは:昔ありました、今は、あんのかな:ハワイ島には無くなってました

この例の直前では、3人は日本のハンバーガーチェーンについて話をしており、その経営が悪化していることが話されていた。フルタが海外のハンバーガー屋が日本に進出してきているという話題を提示すると(L1,2)、スミスは「アービーズ」というチェーンの名をあげ、そのチェーンの日本進出を希望していることを述べる(L4)。しかし、これに対してフルタとツルノからは反応がなく間が開き(L5)、スミスは再度その進出を希望する理由を述べる形で、再度そのチェーンを提示する(L6)。「それ」というフルタの発話は(L7)、ツルノの発話との重なりが生じて中断され、発話の順番を得たツルノはハンバーガー屋に代わる店としてドネルケバブのお店を挙げ(L9)、スミスもそれに部分的に同意をする(L10)。そして少しの間のあとにフルタが、おそらくスミスの名前を述べることによって呼びかけを行い(L12)、さらに「それあれ、ハワイにあんの」と L4、6 で発話された「アービーズ」に対するフルタの理解候補が提示されている(L14)。それに対してスミスは、過去にはあったというスミスが知っている知識を述べることによって、フルタの理解に確認を与えている(L15)。

フルタは L14 において「それ」という「アービーズ」を指示する語を用いて理解候補の提示を行っている。この「それ」は「アービーズ」が発せられた L6 の直後でも発せられているが、ツルノの発話と重なりが生じたために中断されおり、L7 で中断された発話を 14 行目で再度発話しているとも考えられる。そう考えると、L14 でフルタが発している「それ」は L4 あるいは L6 で発話された「アービーズ」に向けられていると言えよう。

L14 でフルタは、「どこの？」というような開かれた形式ではなく「ハワイにあんの？」という具体的な場所を含む、閉ざされた形式で確認を求めている。それまでは海外という漠然とした情報しか発せられていなかったにも関わらず、このような閉ざされた形式の質問をすることができるということは、少なくともフルタがこの瞬間、スミスがハワイにルーツがある者とし位置づけている言うことができるだろう。言い換えるならばフルタは、「アービーズ」という未知のハンバーガー屋を、スミスと関係があるハワイという具体的

な場所と結びつけることによって理解しようとしたわけである。さらに言えばこれは L14 におけるスミスの指示語の使用からも見て取れる。まずフルタは未知のハンバーガーチェーンであるアービーズを「それ」という指示語で示したあと、「あれ」という指示詞を使用することによって共通に知っているものへと結びつけようとする。さらに両者が知っている「あれ」は「あそこ」と場所であることが示され、最終的に「ハワイ」という場所が示されていることが分かる。すなわち、スミスがハワイ出身であることはすでに両者には共有されており、そこに未知のものである「アービーズ」を結びつけようとしたわけである。

一方、「アービーズ」はアメリカのフランチャイズではあるものの、ハワイ発祥のチェーンでは無い。またすでに撤退はしているものの、かつては日本にも進出していた。それに関わらず、「アービーズ」というフルタにとっては未知のチェーンは、ハワイと結びつけられてスミスに確認を求めることにつながっている。このこともフルタがスミスを「ハワイ」と関係が深い者として事前に知っていたことの現れであるだろう。そしてこの位置づけは L15 でスミスが質問に適切に答えることによってスミス本人にも受け入れられおり、いわば「ハワイ人」のようなカテゴリーが構築されていると言えるだろう。

ここまで、外来性が起因となって調整が行われている場面に焦点を当てて分析してきた。このような場面においては、時には「外国人」として位置づけられ、それを「教える者」と「学ぶ者」という関係性が生まれ、相手に言語的、あるいは社会文化的な知識を伝えるやりとりが見られた。日本語を使用している場面であったとしても必ずしも日本人が「教える者」となるわけでは無く、この関係性は文脈依存的で、非常に流動的であると言える。また、本調査では分析されなかったものの、社会言語的な逸脱、あるいは外見的な逸脱が留意された場面において行われることも当然考えられる。

4.3 逸脱が生じていない場面で構築されるカテゴリー

一方で、「外国人」と関係するカテゴリー、あるいは文化的なカテゴリーとして位置づけられる、あるいはそのようなカテゴリーが構築されるのは、ディスコース上で逸脱が生じた場合だけではない。何かしらの目的をもって、意図的に位置づけ、また構築される場合も存在する。以下会話例を見ながら、逸脱が生じていない場面についても分析していきたい。

4.3.1 「新潟人」カテゴリーの表示による勧め

会話例 5:

1	ロング		あ,どうぞどうぞ
2	ダイゴ		いやいやいやいや::

3	ロング	->	新潟は、モツはちょっとした自慢なんすよ
4	ダイゴ		ん↑
5	ロング	->	モツ焼きがちょっとした自慢なん()
6	ダイゴ		ほんと↑,新潟の↑
7	ロング	->	新潟のモツ焼きはちょっとした自慢ですよ,うまいですよ
8	ダイゴ		そうなん(だね)

この例の直前ではロング自身が購入したビールを他の参加者にすすめており、ビールを全員で味見していた。そして参加者がひとしきり味見を終えると、ビールと同時に購入していたもつ焼きを皆にすすめていた。ロングが改めてモツ焼きをすすめると(L1)、ダイゴは「いやいやいやいや」述べるが、音声だけでは勧めを受け入れて食べようとしているのか、あるいは遠慮を示しているのかは判断しにくい。ロングはモツが新潟の自慢であることを述べるが(L3)、ダイゴは無限定的な質問(Shegloff et al., 1977)を用いて聞き返しを行っている(L4)。ロングは3行目を部分的に繰り返し、今度はモツ焼きが新潟の自慢であることを述べる。ダイゴが「新潟の」自身の理解の確認を求めると(L6)、ロングは「新潟のモツ焼き」とL5での自身の発話に付け加える形で確認を与えている(L7)。さらに「うまいですよ」と述べることで、再度ダイゴにモツ焼きをすすめている。そしてダイゴもロングの主張に理解を示し(L8)、そのすすめに従ってモツ焼きを食べている。

この事例においてロングは3行目、7行目においてモツ焼きを新潟の自慢であると述べている。自慢という行為を行うためには、自分がそのグループに所属しているか、他者がそのグループに所属していない必要がある。すなわち、ここではロングは自ら「新潟人」のような文化グループの一員としてのカテゴリーを提示すると同時に、ダイゴに対しては「新潟人」ではない、すなわち「非新潟人」としてのカテゴリーを提示することによって、モツ焼きを自慢しているわけである。最終的にはダイゴもその主張を受け入れており、これにより二人の対照的遂行的アイデンティティが構築され、より効果的にもつ焼きを相手にすすめることが可能となっている。

4.3.2 「外国人」カテゴリーの自発的表示による説得

会話例 6:

1	タカ		広島っていかないよね
2	チャド		まあ,ただ,宮島だったら
3	タカ		え,でも,いかないよ普通:
4	チャド		え:行くよ,あそこは行く

5	タカ		外国人↑
6	チャド		うん
7	タカ		でも時間ないよ,だって,その,() まず東京あって京都あって大阪あって,
8			そ:と:() だよ,日本に何回も来たりさ,すごい長いこといないと宮島行かないよ:
9			(0.4)
10	チャド	->	なんか宮島って:,海外,海外でめちゃくちゃ:, 有名ですよ
11	タカ		[えそ↑:なの
12	タカ		えそ:なの
13	チャド		有名
14	タカ		そ↑:なの
15	チャド	=>	はい,なんか,神社として:,たぶんみんな:こう,あ:日本のじんー神社,
16		=>	まずじー神社ってなにかよく分かんない[けどね↑
17	タカ		[あ:,そうだね
18	チャド	=>	こう思ったら,[イメージは:,宮島
19	タカ		[宮島
20	タカ		そ↑:なんだ,そんな有名なんだ

この例の直前では、チャドが広島県の宮島で結婚式を挙げたことが語られていた。それに対してタカは、外国人は広島に行かないという自身の意見表明している(L1)。それに対してチャドは、広島県のなかでも宮島であれば外国人は行くであろうという自身の考えを述べて反論を行う(L2)。さらに普通は行かないと自身の主張を弱め(すなわち行く人はいるかもしれないが、普通は行かない)再度述べるが(L3)、チャドはそれに対しても再度反論を行う(L4)。するとタカはここで、二人が本当に両方外国人について話しているかの確認を求め(L5)、チャドはそれに確認を与えている(L6)。2人が両方外国人について話していることが確認されると、タカはより論理的に宮島に行かない理由を述べ始める。すなわち、東京、大阪、京都など有名な(あるいはそうだと本人が考えている)都市を挙げ(L7)、外国人が日本に来た時にはそれらの都市に先に行くはずなので、何回も日本に来ている人や、長い期間日本に住んでいる人でないと宮島にはいかないと主張を行っている(L8)。するとチャドは、少しの間のおき、宮島が海外で非常に有名な場所であると述べており(L10)、これはタカがL8 挙げたような都市と比べても遜色ないほどに有名であると述べているようにも見える。タカが驚きを表明して確認を求めると(L11,12)、チャドは有名と、再度述べることによって確

認を与えている(L13)。タカが再び確認を求めると(L14)、チャドは海外での神社のイメージを述べ始める。そしてまず「みんな」神社がどういうものなのか分からない、としながらも(L15,16)日本の神社という、宮島がイメージに浮かぶということが述べられる(L18)。すると最終的にはタカがチャドの主張に納得したことが表明される(L20)。

この例は、前半部と後半部の二つの部分に分けられるだろう。まず前半では、外国人が広島、あるいは宮島に行くか行かないかで意見が分かれ、お互いに自分の意見を述べ合っている。ここではどちらも決定的な理由を述べるのがなく、お互いが、外国人が広島あるいは宮島に行くかどうかのイメージを語っているように見える。しかし L10 以降ではそれに変化が見られる。すなわち、タカに対する反論としてチャドが、宮島が海外で有名であることを述べると、タカは反論をするのではなく、そうなの、と驚きを表明すると同時に、確認を求め、ということである。これは前半部とは明らかに異なっている。ここではチャドが海外という言葉を使用し、自身を「海外」の代表者として自信を位置づけることによって、可能となっているように思われる。すなわちチャドは自身を「海外」のカテゴリーに属する者としてカテゴリー化を行い、その代表として語っているわけである。

一方でタカは、このカテゴリー化に抵抗するかのように、L13 で有名と確認が与えられた後にも、「そうなの」と再度驚きの表明と確認の求めを行っている。するとチャドは、「あー日本の神社」と、あたかも海外の「みんな」の声を直接引用しているかのように語り、さらに海外の人は神社というものが何か分からない、という知識をも代弁することによって、「海外」の「みんな」の代表として自らを位置づけて語りを行っている。そして最終的に日本の神社のイメージは宮島ということを書くと、タカもそうなんだ、とそこに至るまでとは対照的に、自身が納得したことを示している。ここに至って、チャドが「海外」のみんなの代表者として、すなわち「外国人」としてのカテゴリーが構築されたことが見える。そして、先の言語問題の二つの例とは対照的に、「外国人」に関する知識について「外国人」であるチャドが優先的に話をするのが可能となり、結果としてタカはその主張に納得せざるを得なかったと言えよう。すなわち、ここではチャド自身によって「外国人」対「非外国人(日本人)」というカテゴリー対が示され構築されており、それはチャドが、自身の意見をタカに納得させるために利用していたと言えよう。

このように、自らをカテゴリーの代表者として意図的に位置づけることによって相手に効果的に物を勧めることが可能となったり、相手に自分の意見を納得させたりすることが見られた。

4.3.3 カテゴリーの潜在化

一方で、そのカテゴリーに属する者であるからと言って、常にそれを顕在化させるわけではない。利用した方がうまく説得させられるような場面であったとしても、そのカテゴ

リーを表示せず、潜在化させる場面も存在する。

会話例 7:

1	ダイゴ		ん↑これパンプキン,かどうかつと分からない
2	ロング		あ, こっちですねパンプキン
3	ダイゴ		これ↑,シナモン入ってるやつ↑
4	シンヤ		ん, (オール)-パンプキンエールですねこれ
5	エミ		え::どうなんだろう
6	ロング	=>	いや, うまいですよ.; 海外でも結構人気で,いろんなのあるらしいですし
7	エミ		う::ん
8	シンヤ		ほんとにうまいですよ h
9	エミ		まあ, せっかくだしね::hh

この例の直前では、参加者がみんなで様々な種類のビールを飲み比べており、ダイゴがエミにパンプキン味のビールをすすめようとしていた。まず、ダイゴはパンプキン味のビールがどれなのかを探しており(L1)、ロングによってそれがどこにあるのかが示される(L2)。ダイゴがそれが本当に自身の探しているビールなのか確認を求めると(L3)、シンヤによって確認が与えられる(L4)。しかしエミは「どうなんだろう」と述べておりそのビールを飲むことにためらいを示している。ロングは「うまいですよ」とその味の主観的な評価を述べ、さらに「海外でも人気があり、種類も多い」という情報を加えることによって、そのビールが飲むに値するものであることをダイゴと共同する形で、エミにすすめを行っている。しかしエミはそのビールを飲むことに対して再度ためらいを見せる(L7)。今度はシンヤがそのすすめに加わり、「ほんとに」と味の良さを強調して述べると(L8)、最終的にエミはすすめに応じている(L9)。

この例で焦点が当てられているパンプキン味のビール、もしくはパンプキンエールは、アメリカでは比較的一般的な物として普及しており、特にハロウィンの時期になるとよく目にするものである。そのため、ロングが「海外」という言葉でさしている場所は、特定できないもののアメリカであると考えられる。一方、ロングは「らしい」と伝聞・推定の表現を用いて発話を行っている。すなわち、ロングにとってこれはあくまでも聞いた話であり、不確定な情報を述べていることを主張しているのである。アメリカ人が、アメリカの言語や文化に対しての知識を持っている、あるいは持っていることが期待されるとすれば、仮にここで「アメリカ人」として自身を位置づけて勸めていれば、その文化に関する知識からアメリカ人であると判断される可能性があると言える。他方、相手になにかをすすめるためには、不確定な情報よりも確定的な情報を与えたほうが、確実性が高いことは明らかだろう。それにも関わらず、ロングが伝聞・推定の表現を用いることによって

自身をアメリカ人としてではなく、知識所有者、あるいはその伝達者として位置づけているということができるだろう。言い換えるならば、ロングはアメリカで一般的なビールの情報をより確定的な形で提供することで、またそこから「アメリカ人」というカテゴリーが構築されることを回避しているということが考えられる。

4.4 蓄積されたカテゴリーの表示

一方、ディスコース上に逸脱が生じていない場面での文化的な、あるいは「外国人」というカテゴリーへの位置づけは、他の参加者からもされる場合がある。このような位置づけは相手はそのカテゴリーに属する人物であると、すでに理解されているために可能となると考えられる。すなわち他の参加者に関して、その場面以前から蓄積しているカテゴリーがディスコース上に示されているのである。以下でいくつかの会話例を分析していきたい。

4.4.1 蓄積された「韓国人」カテゴリーの表示

会話例 8:

1	アキ		七年くらいやったのにね、もう忘れてるっていう hh
2	パク		hh
3			(1.5)
4	アキ		もう、ペラペラ↑
5	パク		ぜんぜん h[hh
6	アキ	->	[hhh、あれ、英語は↑、[中学から↑
7	パク		[え-
8	パク		英語はね、小学校から
9	アキ		まじか h[hh
10	パク	=>	[hh そうそう、韓国だと英語は結構早い
11	アキ		へ::
12	パク		それで、高校からはもう一つ[、外国語やるんだよ
13	アキ		[え:::
14	アキ		すごいね:、いやそれは、厳しい
15	パク		それが普通 hhh
16	アキ		え:、なにやってたの↑
17	パク		日本語 hh
18	アキ		あ::なるほどね、そっかそっか

この例の前では、アキが会社の制度を利用して英語の勉強をし直していることが話されていた。アキはその勉強をしていく中で、過去に勉強したことを忘れていて、ということを楽しみながら明かし(L1)、パクもそれを追って笑っている(L2)。少しの間の後、アキはパクに対して英語をうまく話せるのかと聞くと(L4)、パクはその質問に対して、まったく話せないことを明かしている(L5)。アキは今度は英語をいつから学んでいるのかを訪ね(L6)、パクは英語は小学校から学んでいたことを明かしている(L8)。続けてパクは、高校からは第二外国語を学ぶことを明かしており(L14)、アキはそれに対して驚きを示し、自分にとっては難しいということをする。パクはそれに対して、それが通常の事であると述べ、笑いを示している(L15)。アキが第二外国語として何を学んでいたかを尋ねると(L17)、パクは日本語を学んでいたことを明かし(L17)、アキは理解を示している(L18)。

この例では、アキがパクの英語学習歴について尋ねており、そこから韓国での学校制度について話題が展開している。パクは、小学校から英語教育を受けてきており、さらに日本と対象化させる形で「韓国」では英語教育が早く行われることを示している(L8、9)。そしてその教育制度を知る者、あるいは受けた者として「韓国人」というカテゴリーが構築されていると言える。これは次のパクの発話にも現れている。パクは L12 では高校で第二外国語を「やるんだよ」と発話しており、自分の経験としてではなく、一般的な制度であるとして発話を産出していると言えるだろう。さらにそれが「普通」(L15)であるとも述べており、韓国人としての立ち位置からこれらを発話していたということができよう。また、パクは「韓国だと」(L10)、あるいは「やるんだよ」(L12)と、アキをその制度を知らない者、言い換えるならば「韓国人」カテゴリーに属さない者として位置づけている。アキもそれに対して、「まじか」(L9)、「へ::」(L11)、「え::」(L13)と、驚きを表明しており、パクが述べる「韓国」の一般的な制度についての知識を有していない者として自らを位置づけており、「非韓国人」として自らを位置づけていると言いうことができるだろう。

日本では 2008 年から小学校での英語教育が始まり 2011 年度に必修化されており、アキの正確な年齢は分からないものの社会人 3 年目であるパクと同年代だとすると、アキが学生だった頃は小学校では無く中学校から英語を学んでいたと推察することができる。この一連のやりとりは、アキがパクに対して英語を中学から学んだのかどうかの確認の求めをきっかけとして行われているが、パクが日本以外で英語教育を受けてきたという情報は、ディスコース上には全く示されていない。すなわち、アキはパクが異なる教育制度を受けてきた可能性がある人物であることをすでに知っている、すなわちパクを日本以外で英語教育を受けた者としてみなしていると言えよう。アキの発話からはパクが「韓国人」カテゴリーに属する者であるかどうかは明確には示されていない。しかし、この会話例で分析されたその後のやりとりから考えると、アキはパクを「韓国人」カテゴリーに属する者だと捉えていることが考えられるだろう。

4.4.2 蓄積されたブラジル人としての認識

次の例も同様に、逸脱が生じていない場面にチャドのことを「ブラジル人」カテゴリーに属する者だと位置づけられている。

会話例 9:

1	タカ		広島はだから,身内だけ,家族だけってこと
2	チャド		家族だけ
3	タカ	->	え,ブラジルからも来たの
4	チャド		来た,
5	タカ		すげ:な,[えおにいさんは
6	チャド		[おと-, おとうさん,おにいさんは来てなかった
7	タカ		来れなかったんだ
8	チャド		残念ながら
9	タカ		残念だ
10	チャド		友達が二人来た
11	タカ	->	どっから,ブラジルから↑
12	チャド		ブラジルから
13	タカ		す:ごいね
14	チャド		でしょ↑

この例ではチャドが自身の結婚式の時の様子を話している。タカが結婚式には身内だけ来たのか、というのを家族だけ来たと言い換えて確認を求めると(L1)、チャドはそれに対して確認を与えている(L2)。するとタカは家族がブラジルから来たのかという確認を求め(L3)、チャドはそれに対しても確認を与えている(L4)。家族のうちだれが来たのかということが話され、兄は来れなかったということが明らかにされた後(L5-L9)、チャドが今度は友人も結婚式に参加したことを明かす(L10)。すると、タカは再びブラジルから来たのかどうかの確認を求め(L11)、チャドはそれに確認を与えている(L12)。そして「すごい」というタカの感嘆が表明され(L13)、チャドはそれを受け入れている(L14)。

ここではチャドの家族、および友人に焦点が当てられているが、タカは閉じられた形で確認を求めている(L3、11)。特に L3 においてタカは、そこまでに家族が結婚式に参加したという事実しか話されていないにも関わらず、「ブラジルから」と具体的な国名を提示して確認を求めているのである。すなわち会話例 8 と同様、この会話例でも、タカがチャドの

ことをブラジル人だと理解しているからこそ家族や友人がブラジルから来たということが述べられるわけである。

一方、会話例 4 では、提示された情報に不理解が生じ、それに対する理解候補を提示する際にカテゴリーが用いられていたが、この例では不理解が生じているわけではない。また、何かしらの逸脱が起きているようにも見えない。それにも関わらず、この場面でチャドが「ブラジル人」として位置づけられたのは、ブラジルと日本の地理に関する一般的な理解が関係しているだろう。すなわち、結婚式に両親や友人が出席することは普通であったとしても、日本から遠く離れたブラジルからわざわざ来るのかどうかということをタカは疑問視しているわけである。ゆえに、結婚式であっても家族がブラジルからわざわざ来るのは「すごい」ことであり、友人が来るのはそれよりもやや強調して言い方で、さらにすごいこととして受け止めているのだと考えられる。

ここまで分析してきたように、ディスコース上で留意される逸脱が生じていない場合にも、他者から文化的カテゴリーに属する者として位置づけられる場合がある。このような場合他の参加者、すなわち会話例 9 ではアイ、会話例 10 ではタカによって事前に蓄積されていたカテゴリーが適用されていると考えられる。他方、このような蓄積されたカテゴリーは、時として相手によって拒否され交渉されうる。次節では、カテゴリーの交渉が行われている場面を取り上げ分析していく。

4.5 表示されたカテゴリーに対する交渉

4.5.1 代替カテゴリーの構築

会話例 10:

1	パク		でも多分、マレー語の方が簡単 h h
2	アキ	->	韓国:人的[に,その韓国語と似てたりす[る
3	パク	=>	[いや [似てるとかじゃなくて,あの:::(0.5)
4			言葉の変化が,ない
5	アキ		あそうなんだ
6	パク		そうそう,英語は[,あるじゃん,あの過去形,ed つけて勉強する,勉強したみたいな
7	アキ		[ん:
8	アキ		うんうんうん
9	パク		マレー語はそういうのがなくて,あの:言葉を入れるみたいな
11	パク		この言葉を入れたら過去形になる,みたいなのがあって[,それを入れれば過去形になる
12	アキ		[え:::
13	パク		だからまあ,英語よりは,簡単かな hh
14	アキ		なるほどね:::

パクは大学時代にマレー語を友人から学んでいたことを語っており、この例では英語とマレー語を比較しながら話をしている。まずパクは、両言語を比較してマレー語の方が簡単であることを述べる(L1)。するとアキは、その理由として最初に韓国人はと提示ししかけたものを言いなおし、韓国語と似ているのかという形で確認を求める。パクはその確認を否定し(L3)、マレー語には変化がないという理由を提示する(L4)。アキがそれに対して理解を示してから(L5)、パクはその理由の説明を継続する。まず、英語には時制を表すための言葉の変化があることを例示し(L6)、マレー語にはその変化がなく、代わりに言葉を入れることを述べる(L9)。そしてその言葉を入れることによって時制を表すことを説明する(L10)。最終的に、それらが英語よりマレー語の方が簡単だと主張する理由となっていることをのべ(L11)、アキもそれに対して理解を示している。

この例では、パクがアキに対してマレー語が英語であることの説明を試みているが、アキによって「韓国人」というカテゴリーと結びつけられる。それは、「韓国人」であるから、あるいは韓国語とマレー語が似ているからという確認の求めによって示されている。これによって、韓国語に焦点が当てられているものの、アキがパクを韓国人として位置づけようとしていることが明らかになると、パクはその位置づけを否定する。すなわち、似ているか似ていないかには焦点を当てず、言語の変化がないことを説明することによって説明を開始するということである。これによってパクは別のカテゴリーの提示を試みているように見える。パクは続けて英語の時制の変化について例を提示し、英語に言葉の変化があることを示し、対照的にマレー語にはそれがなく、時制を表す単語を挿入することを説明している。これによって、複数言語の知識を持つ言語の「専門家」(西阪 1997)、としてのカテゴリーを示していると言えよう。また、アキも「そうなんだ」(L5)という驚きを示したり、「なるほどね」と納得したことを主張していることから「専門家」と対応する「素人」のカテゴリーとして自らを位置づけていると言えよう。

4.5.2 「外国人」カテゴリーからの距離

会話例 11:

1	アイ		玉川上水は:::(1.5)あの人自殺したところ
2	ワン		誰:↑
3	アイ		走れメロンの(1.0)走れ、メロンじゃないぞ、太宰治
4	ワン		あ:::
5	アイ	->	太宰治知らない↑
6	ワン	=>	あ:知ってますね、日本で有名な小説家でしょ↑

7	アイ		うん:, が、にゅ-入水自殺した、でも今は水はないけど
8	ワン		hh
9	アイ		あんまり hh

この例では、車で玉川上水の近くを走っているときの会話であり、この例の直前では付近にある大学について会話がされていた。アイは玉川上水について、誰かが自殺した場所であることを示すが(L1)、ワンは候補が思いつかず、誰の事なのかアイに質問をしている(L2)。アイはその人物と関係があると思われる物を提示するが、すぐにそれを否定し、自身が話していた人物が太宰治であったことを明らかにする(L3)。ワンは理解したことを主張するが(L4)、アイはワンが太宰治を知っているかどうか確認を求めている(L5)。ワンは太宰治についての知識があることを主張し(L6)、それはアイにも認めら、L1 の話題に戻っている。

ここで、アイはワンのことを日本文化に属さない者、すなわち「外国人」として位置づけているように見える。アイは太宰治を知っているかどうかワンに確認を求めるときに、知らないという返答が優先的な応答(Shegloff, 2007)となるように質問を組み立てており、当初より太宰治を知らないことを想定している。すなわち、ワンが太宰治を知らない「外国人」として位置づけていると言えよう。そしてこの位置づけはワンによっても受け入れられている。ワンは太宰治を「日本の有名な小説家」と表現しており、「日本」を有標化させることによって自身をその「日本」に属さない者、すなわち「非日本人」、あるいは「外国人」として自らを位置づけている。

一方、ここでアイは太宰治を知らない「外国人」としてカテゴリーを提示しているが、ワンはアイが提示する「外国人」とは異なる意味で自らを「外国人」として位置づけているように見える。すなわち、太宰治に関する知識を持たない「外国人」としてではなく、日本で有名な小説家である太宰治に関する知識を持つ外国人として自らを位置づけているのである。このようなワンの位置づけは同じ外国人であったとしても、アイが期待する「外国人」のカテゴリーに所属しているとは言いがたい。すなわち、ワンのこのような自らの位置づけは、「外国人」というカテゴリーでは無く、アイが期待する「外国人」というカテゴリーに結びついた活動を否定している。言い換えるならば、アイが期待する「外国人」というカテゴリーの役割からの距離(役割距離、Goffman)を示しており、ワンがどのような外国人であるのかを示していると言えるだろう。

このようにカテゴリーでは無く、カテゴリーと結びついた活動の否定はスミスのデータにおいても観察された。次の例を見てみたい。

会話例 12:

1	フルタ		スミス君もノリで:(0.5)抱きついたらどう,ためしに
2	スミス		いや:無理だと思うよ,ため h し h

3	フルタ	->	d-れ外国人だから:,だいじょぶじゃない↑
4	スミス	=>	知り合いだったら大丈夫でしょうけど知り合いじゃないすからね
5	フルタ	->	あでも結構さ:みてると:,外国人って:,なんかたまたま合ったら:,なんか握手とか:,
6			なんかどっから来たんだ的な話とか,しない↑
7	スミス	=>	まあ,それぐらいだったらすると思うけどいきなりハグは[ないと思う
8	フルタ		[ノリで(1. 5)
9			だいじょぶじゃない,hhh
10	スミス		けしかけたら普通に行きそうだからやめ h て h

この例はスミスとフルタが合流し、駅でツルノを待っているときに録音された会話である。この例の直前では二人の会話の奥で、英語での会話がされており、おそらく外国人同士が待ち合わせをし、挨拶を交わしていたものと推察される。この例は、その外国人たちによる挨拶を見たフルタの発話から始まっている。フルタはスミスに対して、おそらくその外国人たちに抱きついてきたらという提案をする(L1)。ここでは「スミス君も」と発話していることから、その外国人たちが抱き合っ挨拶を交わしていたと考えられる。フルタはそこに参加するようにスミスに提案している。スミスはその提案を遂行不可能なものとしてその提案を拒否する(L2)。するとフルタは、その提案を遂行可能なものである根拠を提示し、再度その提案をスミスに遂行させようとしている(L3)。しかしスミスは、知り合いではないと述べて L3 で示された根拠の誤りを提示し、再度拒否をする(L4)。するとフルタは、「けっこう見ると」と自身の経験を語る形で、たまたまあった、すなわち知り合いではない外国人同士でも、握手をしたり、いわゆるスモールトークを交わすことを例示し、L3 でスミスが述べた「知り合いではない」というスミスが拒否する理由に対して自身の意見を提示する挑戦的な発話を行う(L5,6)。スミスはこのフルタの意見を認めるが、それでも「ハグはしない」と述べてフルタの提示する根拠を否定し、またフルタの提案を再度拒否する(L7)。フルタは L7 のスミスの発話の末尾に重なる形で再び「ノリで」と発話し、それに加える形で再度「だいじょうぶじゃない」と述べ、L1,3 での提案と根拠の提示を再度行っている(L8,9)。スミスは、今度はその提案をやめるように述べ、フルタもそれ以上は提案や説得を行っていない。

この例ではフルタがスミスに対して、知らない外国人にハグするように提案がされているが、通常知らない人に対して抱きつく、あるいはハグをするという行為はしないだろう。スミスもそれを知っているからこそ、フルタの提案を「無理」なことだと述べている。しかしフルタはスミスと見知らぬ人物を同じカテゴリーに属する者としてカテゴリー化することによって、その行為をすることが可能であるという根拠の提示を試みている。言い換えると、「外国人」だから大丈夫と、スミスを見知らぬ人物と同じ「外国人」として位置づけることによってハグをしても問題ない間柄であることを示している。そしてここには「知

らない人にも挨拶としてハグをする」という期待、あるいはカテゴリーに結びついた活動を前提としている。スミスはその直後に知り合いなら大丈夫であることを述べており、明言はしていないが、知らない人では問題になる、とフルタの「外国人」に対する期待を否定していることから分かるだろう。

当初の期待が否定されたフルタは、今度は外国人同士の初対面場面へと話を展開し、スミスの説得を試みる。L5でフルタは、「外国人」は、知らない者同士であっても握手をして挨拶を交わし、簡単な世間話をするということを自身の見た経験を述べる形で確認を求めており、スミスに否定されにくいように発話を構成している。この発話によってフルタは、自身の経験から見た「外国人」、すなわち初対面場面でハグをする「外国人」にスミスを位置づけようとしているようにも見える。このフルタの位置づけが成功すれば、スミスは知らない外国人にもハグをしても問題ないという理由が与えられ、そもそもの提案が遂行されることにつながるからである。これに対して、スミスは握手や世間話はすると「思う」と述べ、フルタの経験と距離を取りながらその主張を認める。しかし、やはりハグはしないと「思う」と述べ、ハグを同列に扱うことはできないという自身の意見を主張し、フルタの主張を否定する。すなわち、スミスはフルタが主張する「外国人」のカテゴリーには属さない者としてフルタの主張を肯定し、また否定しているわけである。注意すべきは、スミスが実際に外国人であることはここでは問題になっていない。あくまでもここでフルタが述べる知らない人にもハグをする「外国人」ではないということが示されているわけである。

他方、このやりとりにおいてフルタが本当にスミスにハグをさせようとしていたかは疑わしい。フルタはL1でスミスに提案を行うところすでに「ノリで」、あるいは「ために」と述べている。なぜならば、「ノリ」も「ために」失敗に結びつくことが多い、あるいは失敗を前提にした言葉であるためである。すなわちフルタはこの提案をはじめから実現できないもの、あるいは本気ではなく冗談として行っている可能性がある。スミスはL2でその提案を実現不可能なこととして捉え、また末尾で笑いを伴いながら発話をしており冗談として捉えていた可能性がある。一方フルタは笑いなどを発しておらず平坦な口調であり、明示的には冗談として構成をしているわけではない。そのためスミスもそれ以降は平坦な口調でやり取りを行っている。しかし、フルタが最終的に再度提案を行う発話では笑いが伴っており(L9)、それはスミスがフルタの提示する「外国人」カテゴリーと距離をとって行った発話の末尾と重なって産出されている。問題となるのは、なぜここで冗談であったかを示す必要があったのかである。これは、スミスが「カテゴリー」との距離をとったことで生まれうるであろう心理的な距離をできるだけ早く埋める必要があったためとも考えることができるのではないだろうか。あるいは再度提案をしようとしたところで重なりが生じ、少しの間のあと冗談へと方向を転換した可能性もある。

いずれにせよ、ここで冗談のフレーム(Goffman, 1974)が示されると、それはスミスにも理

解され、スミスは再度笑いを伴いながら発話している。ここまでのやり取りを見ると、フルタは冗談を構成するために、スミスの外国人性をリソースとして利用していたと言えるだろう。

ここまで、カテゴリーが提示された際の交渉について分析してきた。交渉では異なるカテゴリーが提示される場合もあれば、カテゴリーと結びつく活動、あるいは期待が否定されることも分析された。特にカテゴリーと結びつく活動や期待が否定される際には、そのカテゴリーに属する者では無く、個人がどういう人物であるのかが示されていることが分析された。5. 3 でカテゴリーが他者によって蓄積されていたことが分析されたように、このような個人がどういう人物であるのかが蓄積されるとも考えることが可能であるだろう。次節では、個人がどのような人物であるかが蓄積された結果として現れるやりとりについて分析してみたい。

4.6 個人化されたカテゴリー

会話例 1 ではチャドが日本語の「学習者」として位置づけられていることを分析した。このような位置づけが蓄積されると、習慣化された言語管理(村岡 2010)とも関連づけられる場合がある。すなわち、逸脱となり得る発話がされた場合に、相手に語彙の確認を求め、確認が与えられなかった場合に日本語の「学習者」として位置づけてその語彙の説明をするということである。これは言い換えると、チャドによる言い回しがされ、確認を求めるまではその言い回しが逸脱として留意されていないということである。次の会話例をみてみたい。

4.6.1 習慣化された逸脱の確認

会話例 13:

1	チャド		彼女はね,その彼,2人ともすっごくいい関係だったし,いろいろ一緒にやってて
2	タカ		なるほどね(0.5)超いいね[, すごいね
3	チャド		[超:よかった超よかった
4	タカ		よかった[ね
5	チャド	->	[で彼女に,こうマホの着物を:[,マホの独身の着物こないだよつ:
6	タカ		[ん:
7	タカ	=>	あ:振袖ね,[ん:
8	チャド	=>	[そそそそ(0.8)を着て:着てて:
9	タカ		あ:いいね:

この例は、会話例 1 の直後の会話である。チャドの友人は幼馴染であるため、ブラジルから結婚式に来ることは自然であることが再度表明されると(L1)、タカはそれに対して理解を表明する(L2)。さらにタカは続けて、それはチャドにとって非常に喜ばしいことであったことを表明し、チャドはそれを受け入れて同意している(L3)。L5 ではそれ以前に話されていた事、すなわちチャドの結婚式についての語りが再開され、L8 にかけて、チャドは彼女、すなわち幼馴染の一人がチャドの妻であるマホの着物を結婚式で着ていた事を語っている。チャドはまず、「マホの着物」と一度述べた後に「マホの独身の着物」と言い換え、自身の発話を調整する。さらに「こないだよつ」と述べることによって、タカも共有している知識であることを示し、「着物」の特定化を行っている(L5)。それに対してタカは「あ:振袖ね」と述べている(L7)が、ここでは、「あの」などの特定化を示す用語を用いていないことから分かるように、チャドの「こないだよつ」に対して自分もその知識、つまりチャドがどの「着物」について話しているのかに理解を示しているわけではないように思われる。むしろ、チャドが「着物」を言い換えて発した「独身の着物」に対して述べられているように見える。すなわち、特定の「着物」を指しているわけではなく、「独身の着物」に対して「振袖」という名詞を示しているわけである。

ここまでは、「自分が人間として覚えてる時の友達」を「幼馴染」と言い換えた会話例 1 と類似しているように見える。しかし、この例では、直後にチャドが「そそそそ」と述べて自身が述べたことが「振袖」であることに確認を与えており、さらにすぐに「を着て」と発話している(L8)。これは「を」から開始されていることから、L5 での自身の発話である「着物を」と接続されており、話がすぐに元の流れに戻っていることが分かる。これは先の例と異なり、明らかにチャドが「振袖」に対して理解を示していることに要因があるだろう。

彼らの会話では同様の例がいくつか散見される。すなわちこの二人の関係性において、チャドが述べた事柄をタカが言い換える行為自体は、習慣化されて逸脱とみなされていない可能性がある。なお、チャドがその語を知っているかどうかについて、タカはある程度予想を立てており、言い換えを行うときにタカが発話している「ってやつね」(会話例 1、L3)や「ね」(会話例 13、L7)に現れていると考えられる。二つの会話例では、どちらも命題内容が聞き手、すなわちチャドの領域にあり、高(2011)の機能分類に従えば確認要求のための終助詞として「ね」が使用されていると言えよう。すなわち、タカによる確認要求に対してチャドが確認を与えられなかった時に、タカは語彙の説明をするわけである。そうだとすると、チャドが語彙を知っているかについてタカが予想をしているのであれば「ってやつ」という発話に現れていると考えられるが、この点については、今後経験的に分析していく必要があるだろう。いずれにせよ、タカが言い換えを行った後にチャドが理解を示さなければ、それが逸脱と判断され、タカはそれをチャドに教えるという行為が行われる

のであろう。なお、このタカがチャドに教えるという場面では、会話例 1 で分析したように、チャドを日本語の「学習者」として位置づけている。この例だけでは判断することができないが、タカがチャドのことを日本語「学習者」として蓄積していたとすれば、この会話例での言い換えは、「学習者」としてチャドを位置づけ日本語を教える前段階として考えることもできるだろう。仮にチャドが振り袖という言葉に理解を示していなければ、タカによって説明が加えられていた可能性は十分考えられる。

4.6.2 冗談のためのリソースとしての言語能力

他方、蓄積された結果として全く異なる目的のためにカテゴリーの適用をする場合も考えられる。例えば、会話例 12 で示したように冗談のためのリソースとして利用するという行為である。フルタは、別の場面においても、スミスの高い言語能力を冗談のためのリソースとして用いていることがあった。次の会話例を見てみたい。

会話例 14:

1	フルタ		英語表記でやってんの
2	スミス		はい,ずっと英語っす
3			(0.8)
4	フルタ	->	俺とツルノさんハワイ行くからさ,スミスくんついてきてよ,旅行,旅行行く
5	スミス		え,()さんも行くの
6	フルタ	=>	ついてきてよ,通訳で, 必要なんだよ
7	スミス	=>	金が無いんだけど
8	フルタ		スミスくんの力が必要なんだよ
9	スミス		金が無いんだけど, [りよ-
10	フルタ		[だいじょぶだよ:
11	スミス		旅費出してくれるならツルノさんにお問い合わせするけど

本調査における会話のデータは IC レコーダーのみで録音されているため、L1 と L2 のやり取りが何を指しているのかは定かではない。しかし、この例の少し前では携帯で Facebook を見ながらやりとりを行っており、スミスの Facebook 上の名前の表記について話をしていると考えられる。その Facebook 上の名前の表記が英語であることがスミスによって認められると(L2)、少しの間のあとに、フルタがハワイへの旅行にスミスもついてくるように依頼をしている(L4)。L5 でのスミスの発話にはフルタは反応をせず、もう一度「ついてきてよ」と依頼をした後に、さらに「通訳で」と発話し通訳として旅行に同行してほしいと、依頼の内容が詳細になり、さらに「必要なんだよ」と発話することによって、その必要度を高

めながら依頼を行っている(L6)。それに対して、スミスは金銭的な問題を述べることによって、その依頼を断ろうとしている(L7)。フルタは L6 での自身の発話を強める形で再度依頼を行うが(L8)、これに対してもスミスは再び金銭的な問題を挙げ、L10 のフルタの発話と重なって一度中断してはいるものの、さらに「旅費を出してくれるなら」と金銭的な問題が解消されれば依頼を受けること述べている(L11)。

この例ではフルタがスミスに対して、通訳としてハワイに同行するように依頼をしている。通訳というのは、2 言語以上に関して高い言語能力を持っている者でないと適切にその役割を担うことができないものである。すなわちこの場面でフルタは、スミスのことを日本語と英語の両言語が、高いレベルにある者として見ていることになる。一方で、通常通訳に求められるのは高い言語能力であり、国籍などは考慮されないだろう。このことから、スミスを「アメリカ人」ではないが、「高い言語能力を持つ者」として位置づけているように思われる。またスミス自身、依頼を断る理由として金銭的な問題を挙げているのみで、むしろ 11 行目では金銭的な問題が解決されれば通訳として同行してもよいという態度を見せている。すなわちスミスも自らを通訳としてハワイに行くことができるほどの言語能力を持つものとしてのカテゴリーを認めていると言えるだろう。

他方、ここで行われている依頼には二つの可能性が考えられる。一つは言うまでもなく本当に依頼をしている可能性であり、もう一つは、冗談として依頼を行っている可能性がある。この会話例の後には、少しの間、金銭面についてフルタがスミスを説得するやりとりが続くが、解決しないままフルタはトイレにたってしまう。そしてフルタが戻ってきてからはその話題について一切触れることがなかった。また、音声的にもフルタは本気で依頼をするような口調ではなく、音声の抑揚や強弱がほとんどない、冗談めいた口調で依頼や説得をしているようにも聞こえる。すなわち会話例 12 と同様に、このやりとりはフルタによってある種の冗談として発話されており、スミスの高い言語能力がリソースとして用いられているのである。先の例と異なるのは、この例では高い言語能力を持つものとしての位置づけがスミスも受け入れられて構築されている点であろう。しかしどちらの場合にせよ、このような蓄積された位置づけが、冗談を言うためのリソースとして利用されると言えるだろう。この冗談によってフルタとスミスがどのような関係性を築こうしているのかは、ここでは分析することはできない。しかし、冗談を言える間柄としては、友人関係であることが考えられる。そうだとすれば、蓄積されたカテゴリーを異なる意味合いで用いることによって、友人関係を築いているということが言える。この点については今後も実証的に分析していく必要があるだろう。

4.7 本章のまとめ

本章では調査協力者の録音した自然会話データを、特に参加者の外来性に注目し、イン

ターアクション上にこれらの調整が行われている場面、もしくは外来性に関連した発話がされているところに注目し、どのような「属性」が構築されているのかを分析してきた。従来の接触場面研究においては「言語ホスト」や「言語ゲスト」などとして見られてきた参加者の属性が、異なる属性として構築されている場合があることが分析された。4.2 では時には言語の「学習者」として相手を位置づけることによって、言語や文化を教える者と学ぶ者という位置づけを取っていることが見られた。また、本研究で得られたデータは全て日本語が主たる言語として使用されていたが、時にはその関係が逆転することもあった。

一方4.3 では、ディスコース上において留意された逸脱が見られない場合においてもまた、文化的なあるいは「外国人」というカテゴリーに自らを位置づけることによって、他の参加者にたいして何かを勧めたり、自身の考えを相手に納得させることも見られた。このような例からは、これらのカテゴリーが相手から一方的に位置づけられるものではなく、積極的に、また戦略的に利用されうることを示している。他方4.4 では、留意された逸脱が見られない場合においても、これらのカテゴリーは相手から示されうることも分析された。これらの事例は、相互行為を通して構築されたカテゴリーは他の参加者によって蓄積され、別の場面のディスコース上で示されうることを示唆している。

4.5 では、ディスコース上で示された位置づけに対しての交渉を分析した。参加者は、他の参加者から示されたカテゴリーを否定し、別のカテゴリーとして自らを位置づけていることを示した。また、他の参加者から位置づけられたカテゴリーと結びつく活動や期待を否定することによって、そのカテゴリーからの距離を示し、自分がどのような人物であることを示していることを分析した。そして、このようなカテゴリーの交渉によって示された個人としての位置づけをも参加者は蓄積させていることを示した。

4.6 ではこのような蓄積された位置づけが、その参加者間で習慣化した言語管理として行使されうること、また参加者に特別な意味を持たせる可能性について述べた。すなわち、カテゴリーを、冗談を言うためのリソースとして利用し、友人関係を築いていることを分析した。蓄積されたカテゴリーが、その参加者間でどのように利用されているのかについては今後、より詳細な研究が必要とされる。

また、自然会話データで分析されたことを各協力者別にまとめると以下ようになる。

ワンはゼミの先輩であるアイとの会話において、「外国人」として位置づけられることも、「中国人」として位置づけられることも見られた。「中国人」として位置づけられた例では言語的な知識を「学習者」であるアイに教える者として位置づけられ、ワン自身もそのように自らを位置づけていた。一方、「外国人」として位置づけられた例では太宰治という日本の社会文化的な知識を知らないものと期待されていたが、外国人という位置づけは取りつつも、アイによる期待は否定し太宰治を知っている外国人として自らを位置づけていた。

ロングの会話では、「アメリカ人」や「外国人」というカテゴリーが提示されることが見られず、このようなカテゴリーの構築は見られなかった。一方で、分析では逆にアメリ

カ人としての位置づけを回避し、潜在化させていた可能性を指摘した。また、新潟の文化グループに所属する者として、言い換えれば「新潟人」として新潟の食べ物を自慢することによって相手に勧めることを行っていた。すなわちロングは、「外国人」や「アメリカ人」以外の遂行的アイデンティティに関しては、顕在化させている。本人の意識によるものかどうかを断定することはできないが、これは、結果的に Goffman(1963=2001)の述べるパッシングとしての機能を果たしているということが考えられる。すなわち、「新潟人」など、他のカテゴリーの顕在化によって、相対的に自身のアメリカ人性や外国人性は潜在化している。

スミスは、ハワイにルーツがある者として、あるいは高い英語能力を持つ者としての位置づけは構築されていたが、「外国人」というカテゴリーからは距離をとって、自分がどのような外国人であるのかを他の参加者に示していた。一方で、スミスの外国人性や英語能力は、フルタからは冗談のリソースとして利用されている。このような冗談は、フルタとスミスの間では友人関係を行為するための一つの方法である可能性を指摘した。

パクはアキによって「韓国人」として位置づけられることが見られた。時にはそのカテゴリーは構築され、韓国の一般的な教育制度について述べるが見られた。しかし、常にそれが構築されるわけではなく、時にはその位置づけを拒否、「専門家」というカテゴリーに代替として自らを位置づけることが見られた。パクがその場において自らを位置づけようとするカテゴリーとの不一致が生じた場合には、交渉を行い代替のカテゴリーを提示していると考えられる。

チャドはタカからブラジル人として認識されており、相互行為を通してそれが構築されることが見られた。また、チャドは自らの主張をタカに納得させるために、自ら「外国人」のカテゴリーを表示することも見られた。一方で、チャドは日本語学習者としての位置づけをとることが多く、それはタカにも認識されていた。日本語学習者として、あるいは日本文化を学ぶ者として、「日本人」であるタカに日本語や日本文化を学ぶという行為は、両者の中で習慣化されており、チャドの日本語学習の場面となっていることが考えられる。

第5章 インタビュー・データにおける遂行的アイデンティティ構築

築の原則の分析

本章では、インタビューのデータに対してナラティブ、特にスモール・ストーリーが語られている場面に焦点をあて、ポジショニング分析を援用して分析を行う。3.2節で論じたように、本章におけるポジショニング分析では以下の三つのレベルが分析される。

- ①レベル1：語りの世界におけるポジショニング
- ②レベル2：相互行為のプロセスにおけるポジショニング
- ③レベル3：遂行的アイデンティティ構築の原則

まず、インタビューにおいて、文化的アイデンティティに関わるアイデンティティ構築の原則が語られている場面を分析していく。レベル1、レベル2の分析では、蓄積アイデンティティのみならず、アイデンティティ構築の規則や規範も分析されるが、その全体像を捉えやすくするために、まず複数の断片に対してレベル1、レベル2の分析を行っていく。レベル1では、語られたストーリーの世界の中で、登場人物が何をしており、どのように位置づけられているかを分析する。本章で分析されるストーリーは、過去の体験などを語っている断片が多いが、その過去の経験を語る中で登場人物たちがどのようなやりとりを行っているかが分析の対象となる。レベル2においては、そのストーリーがインタビュアーであるIRに対してどのように語られているかを分析する。ここでは、どのようなやりとりの流れで、どのようにそのストーリーが語られているのかが分析される。本章で扱うデータはインタビューによって得られたものであるが、ストーリーを語る際にはインタビュアー対インタビュイーという関係性が変化することも見られた。このような協力者とIRの関係性も分析の対象となる。このようなレベル1とレベル2の分析では、補足的にインタビューの別の箇所でも語られた断片を示しながら分析を行う場合もある。各断片におけるレベル1とレベル2の分析の後、レベル3において、各断片で分析された遂行的アイデンティティ構築の原則を典型的アプローチによって分析し、その全体像を考察していくこととする。

5.1 ワンの語りにおけるポジショニングの分析

ワンは大きく分けて二つの場面に参加しているという報告がされた。一つはワンが所属するゼミであり、もう一つはワンがアルバイトとして中国語を教えている語学学校である。

ワンは自身、そして他の参加者がみなゼミに「専門家」として参加していると考えており、異文化が原因となった対立は多くないという。語学学校のアルバイトは、ワンが来日してすぐに始め、それ以降継続しているもので、そこでは「中国人」として行動することが期待されていると感じている。どちらの場面においても、比較的異文化接触の度合いが少なく、ワンは大きな問題を感じることも無く自らの望む遂行的アイデンティティ構築の原則通りに行動することが可能となっている。以下それぞれの場面について語られている断片を分析していく。

5.1.1 語りの分析

(1) ゼミ場面についての語り

インタビュー断片 1:

1	ワン	やっぱりゼミが多いね
2	IR	ん::
3	ワン	昔からそう、でもみんな優しいから
4	IR	あ:そうですね
5	ワン	はい、やっぱりいろんな人がいるので中国::、韓国、ベトナム、あと:モンゴルとかいろいろな国の人がいるので、みんなで助けてる
6	IR	あ:, 日本人もいるんですか
7	ワン	はい、もちろん hh
8	IR	hh
9	ワン	やっぱり、その本とか、難しい日本語が多かったり、なので、分からないところはみんなで教えあって、頑張ってます h
10	IR	なるほど、やっぱり、その日本人が、教えてくれたりするんですか
11	ワン	ん::日本人もそうだけど、みんなで、お互いに:という感じが、多い
12	IR	あ::
13	ワン	一回、私が分からない、あの理解できない本があった時に、これ読んでみたら:って、関係ある本とか:, 論文とか:, 教えてくれたりその、みんなでこう、論文とか読んで勉強する、会があるんですけど、そこで、みんなで読もうよ、って言うてくれてみんなで読んだりして
14	IR	は::なるほど
15	ワン	はい、とても助かりました

この断片は、ワンがどのような場面に参加することが多いのかという質問に対する回答を行っている場面である。ワンはゼミに参加する頻度が高いと述べており、続けてその理

由としてゼミに参加する人がみんな優しいということが語られる(L3)。続けて、ゼミには様々な国の人が所属していることが語られ、皆がお互いを助け合っていることが語られる(L5)。IRはこのゼミに参加する人の中に日本人がいなかったことを留意し、日本人も参加しているのかという確認を求める(L6)と、それに当然いるという確認が与えられ(L7)、続けて難しい本を皆で教えあっているという例が提示される(L9)。L10で再度IRが難しい日本語は日本人が教えてくれるのか、という質問をすると、ワンは「日本人もそうだけど」と部分的には肯定しながら、再びみんなでお互いに教えあうことを語る。さらに自身が本を読んでいて、理解できなかった際の経験を語り始める。

レベル1

この断片で語られるスモール・ストーリーでは、ワンとゼミの「みんな」が登場人物となっている。「みんな」とは中国、韓国、ベトナム、モンゴルと様々な国から来ているゼミのメンバーであり、本や論文などで使用されている難解な日本語など分からない箇所をお互いに助け合っている、という様子が語られている(L5,9)。そしてそれはL13でより具体的な場面が語られている。ストーリーの登場人物であるワンが理解が難しい本についてゼミのメンバーに相談を持ちかけており、他のゼミの参加者はそんなワンに対して、難解な本の理解に役立つ本や論文を紹介している。さらに、ゼミのメンバーで行っている勉強会でその本や論文を読むという提案を行っている。実際にこれは勉強会で読まれ、ワンはその理解をゼミ、あるいは勉強会のメンバーに助けられた様子が語られている。

レベル2

このような自身がゼミの人間に助けてもらった経験というスモール・ストーリーは、インタビューの文脈では、自分を助けてくれるのは日本人だけではなく、ゼミに所属する「みんな」であることを強調する役割があるように思われる。IRはインタビューで、ゼミには日本人もいるのか(L6)、また難解な日本語を教えたのが日本人なのか(L10)と質問を行い、日本人と対比させることによって、ゼミの「外国人」あるいは「中国人」のワンとして位置づけようとしているように見える。しかし、ワンは断片を通して、ゼミの「みんな」という言葉を頻繁に発し(L3、9、11、13)、ゼミのみんながお互いにお互いを助け合っていることを強調する。そして難しい日本語が多く分からなかった本を、みんなが助けてくれたというストーリーにつながっているのである。ワンは、IRに対してゼミの場面では「日本人」が「外国人」に日本語を教えるのではなく、ゼミの「みんな」がお互いにお互いを助け合うことを語っていると言えよう。このことはインタビューのほかの語りでも強調されている。補足的に次の断片も見てみたい。

インタビュー断片 2 :

1	ワン	勉強会は、あんまり、そういうのはない
2	IR	ん::
3	ワン	その、本とか、論文を選んで、みんなで読んで分からないところを、こう議論、したりするので、あの::(1.0)もちろん、分からない言葉とかあると、みんなで教えあったり、するけど、やっぱり難しい言葉、生活の言葉と違う、その::、専門の言葉が出てきたりするので
4	IR	うんうんうん、そうですね

この断片の前では IR がワンに対して、ゼミや勉強会で中国人や外国人として扱われると感じる可能性があるかという質問がされている。ワンは、それに対して、勉強会でそういう扱いをされることはないと述べ(L1)、続けて、勉強会でどのようなことをしているか説明を行う。勉強会では本や論文などを読みその内容を議論する場であって、そこで問題となるような難しい言葉は「生活の言葉」とは違う「専門の言葉」であることが述べられている。すなわちワンにとって、ゼミや勉強会で直面する「難しい言葉」は彼女が専攻する学問の、いわば専門用語である。専門用語を扱うのは通常「専門家」であり(西阪 1997)、日本人や中国人といった文化的なアイデンティティは顕在化しにくいものと考えられる。すなわち、ワンにとってゼミに参加するみんなは基本的に「専門家」として参加して議論を行い、時には教える「専門家」対「素人」という役割の中でお互いを助け合っているわけである。

一方で、ワンは中国人として行動することが期待されている場面では、中国人としてふるまっていることも語っている。次の断片を見てみたい。

(2) 中国語学校についての語り

インタビュー断片 3:

1	ワン	その、中国語を教えているので
2	IR	あそうなんですか
3	ワン	はい、その::、語学学校みたいな、ところで
4	IR	あ::
5	ワン	そこでは、まあ、中国人の方がいい、その、みんなそれを期待していると思うし、あんまり日本語も使わないようにしてる
6	IR	あそうなんですか
7	ワン	そう、だってみんな中国人に中国語を教わりに来ているので、よく中国の文化について聞かれたりもするし、先生中国ではどうなのとか、

		教科書のことほんとなのって聞かれたりするの
8	IR	ん::そうですよね
9	ワン	そう、だからそこでは、中国人
10	IR	なるほど::、その語学学校はいつから、やってるんですか

この断片の直前では、中国語を使うことはあるのかという IR の質問に対して、あるという返答がされ、IR はさらにどういうときに中国語を使用しているのかという質問を行っている。それに対してワンは、語学学校で中国語を教えていることを述べ(L1、3)、さらに続けて語学学校での様子を語り始める。ワンが語学学校では、中国人らしく振る舞うことが期待されているとのべ、日本語もあまり使わないようにしていることを述べると(L5)、IR はそれに驚きを表明し、それに応える形でワンは具体的な語学学校の様子を語る。

レベル 1

この断片におけるストーリーでは、中国語学校という場面でのやりとりが語られている。ここではワンと、具体的には語られていないがおそらくは日本人である生徒が参加をしている。生徒はワンに対して、中国語の質問のみならず、「先生、中国ではどうなの」や、「教科書のことってほんとなの」と中国の文化について質問を行っている。ワンはそれに対して「中国人」として受け答えを行っている様子が語られている。

このような生徒の声の引用は、語学学校という場面において「先生」であるワンに向けられている。特に、教科書に書いてあることが本当なのかどうかというのは、中国文化について教科書以上に知識を有していると期待されている「中国人」としてワンを位置づけているためにされている質問であると言えることができるだろう。ワン自身もそのような期待を感じており、相手からの「中国人」という位置づけに従っていると言えよう。さらに言えば、ワンは語学学校においてはあまり日本語を使用しないようにしてしており、生徒から「中国人」と位置づけられた場合のみならず、自らもできる限り「中国人」として自分を位置づけて行動していると考えられる。

レベル 2

すでに述べたように、この断片でワンは語学学校では中国人らしく振る舞うことが他の参加者に期待されており、日本語を頻繁に使わないようにしていると語っており、IR はそれに対して驚きを示している。すなわち、ワンの発言に対して同意をしておらず、非優先的な発話(Pomerantz, 1984)を行っているわけである。これに対してワンは IR からの同意を得るために具体的な例を提示し始め、その例として生徒の声が引用されているわけである。その例に関して共感を得ることに成功すると(L8)、ワンはさらに「だから中国人」と L5 に

おける主張を言い直す形で再度主張する。すると IR は L6 とは対照的に、「なるほど」と述べて、ワンの主張に納得したことを示している。インタビューでは、インタビューイーがインタビュアーからの共感を得るために他人の声を代用して語りを行うことがあると指摘されているが(今 2010)、ここでもワンが自身の意見を納得させる、あるいは共感を得るためにスモール・ストーリーを語っていると考えられる。そしてこれは同時に、IR からの中国語を使用する機会についての質問、すなわち「中国人」としての位置づけに対しても向けられている。すなわち、ワンはワン自身と他の参加者双方から「中国人」として位置づけられる、あるいは「中国人」としての行動が期待されるような場面においては、その期待や位置づけに従って行動するということが考えられる。

5.1.2 ワンの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル3)

インタビューの中でワンは、異文化接触による問題を語るものがほとんど無かった。それは、ワンが日本で主に参加する二つの場面が、共にワン自身の自分の位置づけとほぼ一致していたことが要因として考えられる。ゼミや勉強会という場においてはお互いに専門的で難解な日本語を扱う、「専門家」として参加しており、そこではエスニック・アイデンティティなどによる位置づけはお互いにあまりしない。すなわち、ゼミという特定の場面においては「中国人」という位置づけは潜在化され、「専門家」としての位置づけを顕在化させるようなストラテジーを持っていると言える。そのような場面では、難しい専門的な用語が理解できないような状況があったとしても、「専門家」対「素人」という対関係で教え、また教わっていると考えられる。一方でワンは分からない言葉があったときにはお互いに助け合うことについても言及している。ワンが語るような、別の本や論文を紹介するなどして行われる「助け合い」がされている場面では、教える/教わるという「専門家」対「素人」という関係対が構築されているわけではないだろう。このような場合、「素人」どうし、あるいは「専門家」につながるような「学生」どうしでお互いを助け合っているものと考えられる。いずれにせよ、そこでの関係は、「専門家」対「素人」のような対関係ではなく、並列的な関係性であるだろう。

一方で、語学学校など「中国人」として行動することが期待されるような場面では、その期待に添って行動していることが語れている。また、インタビューを通して、中国人としての自分を潜在化させることは見られなかった。すなわち「中国人」としての位置づけをされる場面や、「中国人」としての行動が期待される場面においては「中国人」としてふるまうというストラテジーを持っていると言えよう。

一方でインタビューを通して、ワンによる文化的アイデンティティに関わる遂行的アイデンティティの原則はあまり報告がされなかった。久野(2015)では、中国人編入留学生であるタンのライフストーリーを分析しているが、彼女はゼミでの専門的で難しい内容につい

て他のゼミの参加者から教えてもらえず、また自分からも質問することができなかったのだという。また、ゼミの飲み会などにおいても中国の社会文化的な行動に対して否定的な評価をされたことなどが語られており、これらの語りからタンが結果的にゼミをやめることになった過程を分析している。このような久野の事例と比較すると、ワンが比較的自身の望む場面に、自身の望む位置づけで参加することが可能となっており、来日してからも大きな問題を抱えていないためであると考えられる。異文化接触の程度が強い場合、自身のアイデンティティにも変化が起きやすいとされているが(丸井 2012)、ワンはその異文化接触の度合いが低かったことが要因として挙げられる。例えばゼミでは様々な国から学生が参加しており、また文化的なアイデンティティよりも専門家としてのアイデンティティが重視されている点や、中国語学校では「中国人」としてふるまうことが期待されていた点などが挙げられる。西阪(1997)が、一般的に日本人の日本語能力を外国人が評価することは奇妙であると指摘しているように、ワンが教えるような中国の言語や文化をおそらく日本人である生徒が評価、あるいは調整するのは奇妙であるだろう。それゆえ、たとえワンの行動や知識が「中国人」というカテゴリーに期待されるものとは異なっていたとしても、実際に中国人であるワンに対して生徒からはそれを否定的に評価、あるいは調整することは難しいと考えられる。以上のことから、これらの場面においてワンの原則を阻害するような要因(例えば、日本人からの否定な評価)がなかったために、ワンは自らの原則通りに行動することが可能となっているために、文化的アイデンティティに関わる遂行的アイデンティティの原則がそれほど語られなかったと考えられる。

ここまで分析してきたワンの遂行的アイデンティティ構築の原則をまとめると、以下のよう可以说うことができるだろう。ワンが日本で生活する上で主に参加している集団は、ゼミと中国語学校であった。ワンは蓄積アイデンティティの変化については語っておらず、「中国人」としての意識を持っていると考えられる。そして中国語学校のような、「中国人」としての位置づけや行動が期待される場合には、「中国人」として自らを位置づける戦略を持っている。一方、ゼミにおいては「専門家」として参加する戦略を持っており、エスニック・アイデンティティは潜在化させている。これらは異文化接触の程度が低いために可能となっていることが考えられ、異文化に生活していたとしても、必ずしもアイデンティティやアイデンティティ構築の原則に変化が生じるわけではないことを意味している。

5.2 ロングの語りにおけるポジショニングの分析

ロングはインタビューで、現在は「一応」自分がアメリカ人であると考えていると報告していた。またロングは自身がアメリカ人に期待される行動をすることができないと考え

ており、自分がアメリカ人であることは潜在化させるようにしており、顕在化した際にはそれを最小化するように努めている。他方、友人間では自身がアメリカ人であることはコミュニケーションのリソースとして活用され、友人関係を構築するための要因となっている。以下ではインタビューの断片を見ながら、これらロングの遂行的アイデンティティ構築の原則を分析していきたい。

5.2.1 語りの分析

(1) 初対面場面についての語り

インタビュー断片 4:

1	ロング	今はそんなにないですかね
2	IR	そんなにってことはたまにはある感じですか
3	ロング	たまには::、まあたまにはあるっていうか名前を言ったらほぼ聞かれるので、ハーフですか::↑みたいな hh
4	IR	あ::
5	ロング	いや、一応アメリカ人ですって hh
6	IR	なるほど h 一応 hh
7	ロング	そう、でもずっと日本なんで英語できないんですけど、ってね hh
8	IR	あ::もう言っちゃうんですね
9	ロング	そうですね、だいたいじゃあ英語::できるんですね:とか、ん:, これ英語でなんていうのみたいなことを言われるので、うん、事前にもう英語できないです、って言っちゃいますね
10	IR	なるほど

この例は、インタビュアー(IR)の今日本で外国人、あるいはアメリカ人として扱われると感じることはあるか、という質問に対する答えから始まる。それに対してロングは「今はそんなにない」、という返答をしており、さらに IR が「たまにはあるのか」と質問を行うと、「名前を言うと大体聞かれる」と返答し、その例を語りだす(L3、5、7)。まず L3 では「ハーフですか」という他の参加者からの質問を「みたいな」ということによって引用であることを示しながら提示し、さらに L5 においてそれに対する自身の返答を、「一応アメリカ人です」と語っている。さらに、「一応」という IR による繰り返しに促される形で、一応アメリカ人という意味を「ずっと日本なんで英語できない」と、ずっと日本に住んでいるため英語ができないが、国籍はアメリカ人であるということを語っている。さらに、L9 でそこまでの自身の語りをまとめて、「事前に英語ができない」と述べることを語っている。

レベル 1

ロングの語るこの例は、これまでの経験から語られている体験談であると考えられる。この場面はロングが他の参加者に対して名前を名乗っており、初対面場面だと解釈できる。ロングが自身の名前を名乗ると、他の参加者から「ハーフですか」と質問をされ(L3)、それに対して「一応アメリカ人」であると返答している(L5)。ロングはさらに続けて、「でもずっと日本なんで英語できないんですけど」と述べ、他の参加者に対して、アメリカ人であるが英語ができないことを明かしている。

この場面ではロングの英米語圏の名前がきっかけとなり、他の参加者から外国人性のある人物として位置づけられている。そして、それに対してロングは、それを部分的には肯定しながらも、英語ができないことを明かしている。これはすなわち、アメリカ人であることを認めるものの、「アメリカ人」に期待される英語能力を持っていないことを相手に伝えていることになる。ロングが語るように、英語ができないことを伝えない場合、他の参加者から英語ができる者として位置づけられ、そして「英語でなんていうの」というような質問をされることを回避するために「事前に」行っていることであり(L9)、初対面場面におけるロングの一般的な対応が語られていると考えることができるだろう。そしてこれを行わない場合、「だいたい」英語ができる者としての位置づけられると語っており、その位置づけを繰り返し経験することによって変化した意識が語られていると考えられる。

一方、この場面における「ハーフですか」という相手からの質問は、明らかにロングの英米語圏の名前が逸脱として留意されていることからされているが²、一方で「外国人」として位置づけられていないのは、ロングが高い日本語能力を持っているためであると考えられる。それに対してロングは「アメリカ人」という自身の国籍にもとづいて返答をしているが、すぐに「ずっと日本」で生活していることを明かすようにしている。ロング自身はこのことを、英語ができる者として位置づけられないようにするためと語っているが、結果的に、なぜロングが高い日本語能力を持っているのかを相手に伝達する役割をも担っていると言えよう。

レベル2

すでに述べたように、この例は、IRの今日本で外国人、あるいはアメリカ人として扱われると感じることはあるか、という質問に対する答えから始まる。これに対する「今はそんなにない」というロングの返答には二つの含意がある。それは、後述するように、昔は今とは異なってよくあったということであり、もう一つは、直後のIRの質問にも現れているように、少しはあるということである。事実、IRはL3において「たまにはある感じですか」とそれを確認する質問を行っている。IRの確認に対してロングは、「たまにあるっていうか」と否定気味に返答し、レベル1で分析したような初対面場面の体験談を語っていっ

² あるいは、フェアブラザー(2003)が指摘するような、外見的な外来性が、逸脱として留意されている可能性もある。

ている。

この例でロングは、インタビューにおける IR からの質問に答えようとする一方で、自身の外国人性、あるいはアメリカ人性に関する質問に対しての返答に消極的であるように見える。それは例えば L1「そんなにない」という弱める表現形式の使用や、L3 からの体験談が L2 における IR の確認に対する返答として語られる、あるいは L7 が L6 における繰り返しの促されているという部分に現れていると言えるだろう。一方でこれらの IR からの働きかけに対してロングは、この例だけでなくインタビューを通して相互行為が成り立たなくなるような行動(例えば返答の拒否)をすることは見られなかった。すなわち、ロングは自身の外国人性、あるいはアメリカ人性に関する消極的であるものの、IR の質問に対しては適切に答えられるように返答をデザインしている。言い換えると、自身が「アメリカ人」であることを否定することがないように IR の質問に返答をしていると言えよう。

(2) 中学時代の英語授業についての語り

ロングが自身のアメリカ人性、あるいは外国人性の潜在化をしていたという経験は、他の場面についての語りにも現れている。次の断片を見てみたい。

インタビュー断片 5 :

1	ロング	中学校の時は結構ありましたね
2	IR	ん::
3	ロング	簡単な漢字を読んだだけで驚かれたり h
4	IR	なるほど h
5	ロング	っていうのは嫌でしたけどね
6	IR	ん::
7	ロング	あ:と、これは明確に覚えてるんですけど、最初の授業で教科書を読む 番がまわってきたんですよ、 で、後ろの席に座ってたんですけど、教室 のみんなが急に振り向いて自分の事じっとみてきたのにびびって、可 能な限り下手な英語で読んだんですよ
8	IR	は::

この断片は、IR がロングに今までアメリカ人、あるいは外国人として扱われたと感じたことはあったかという質問に対して語られた返答の一つである。自身の中学時代の話をしていくなかでロングは、英語の授業での経験を語っている。

レベル 1

ここでのロングの語りは、先ほどと同様、中学校時代の経験から語られている体験談で

あり、スモール・ストーリーの一つであると考えることができる。ロングは中学の英語の授業に参加しており、授業活動の中で教科書を朗読する順番になっている。すると朗読を開始する前に、クラスの他の生徒が振り向き後ろに座っていたロングに視線を向ける。ロングはそれに驚き、「可能な限り下手な英語」を使用して教科書を読んだのである。

中学校の最初の英語の授業であるとはいえ、ロングの名前が同じクラスの人に知られていたことは想像に難くない。すなわち、ロングは「アメリカ人」あるいは「外国人」、もしくは「ハーフ」だと判断され、そこから英語ができるという期待をされていると考えたのであろう。そのような期待を感じたロングは可能な限り下手な英語で教科書を読むことによって、その期待に沿わない行動をとった。すなわち、英語を流暢に読むことで生じる自身の外国人性、あるいはアメリカ人性が再び顕在化されないように、言い換えれば「外国人」あるいは「アメリカ人」としての位置づけの一部を否定することによって、弱めるように行動したと言えるだろう。

レベル2

この例は、L1 において中学時代はアメリカ人として扱われていたというロングの語りから始まっている。そして L3 ではその例として、「簡単な漢字を読んだだけで驚かれた」という経験が語られている。続けて、L5 ではそれが「嫌だった」ということが語られ、さらに L7 での体験談へとつながっていく。すなわち、L7 における語りは、中学時代にアメリカ人として扱われていたことが「嫌だった」というロングの語り全体の一部として表れているわけである。一方で、先ほどの例とは異なり、IR は L2、6 における「ん::」や L4 における「なるほど」など、あいづち的な発話をするのみで、相手の発話を引き出すような質問などはしていない。すなわち、先ほどの例とは異なり、アメリカ人として扱われることが嫌だったという事実は、ロングにとっては消極的になるべきことではないむしろ積極的に共有したい事柄であった。それは、L の7冒頭で「これは明確に覚えている」と述べているように、ロングにとっては非常に衝撃的な出来事であったことを強調する語りにも表れていると考えられる。

(3) 婚姻届と出生証明書についての語り

一方でアメリカ人であることを積極的に IR に語ることは、別の可能性も示唆している。すなわち、ロングが IR を同じアイデンティティを持つ者として位置づけて語りを行っている可能性である。次の断片では、ロングが IR を同じアイデンティティを持つ者として、アドバイスを送るという行為が見られる。

インタビュー断片 6 :

1	IR	いつ頃から変わった、ってのはあるんですか
---	----	----------------------

2	ロング	ん:::(1.5)まあこう、ドラマチックな、出来事があったわけではなくて、小さな出来事の積み重ねって感じなんですよね
3	IR	あ::、例えば、どんな
4	ロング	そうですね、よく覚えているのは、結婚するとき、あの婚姻届を出すときに、あの::出生証明、みたいなものがあるって、それが必要だったんですよ
5	IR	はいはい
6	ロング	それで、それは日本じゃ手に入らなくて、取り寄せなきゃいけなかったんですよ
7	IR	あ::そうなんですか
8	ロング	そう、それでそれを知ったのが結構、その出しに行くこの3日前とかでhh、やばいやばいみたいな感じになったのは覚えてますね、すごい、怒られそうになって、もうすごい、焦りましたね:hh
9	IR	hhh
10	ロング	まあ結局、何とか送ってもらえて、間に合ったんですけど
11	IR	お::それはよかったですね hh
12	ロング	良かった hh、もうほんとに、あの::、気をつけたほうがいいですよ h
13	IR	h そうですね::、いや、それはでも知らなかったです

この断片では IR が、過去は日本人だと思っていたロングが、自身のことをアメリカ人だと考えるようになったという意識の変化について質問している過程で語られたものである。ロングは自身の意識の変化が劇的に変化したわけではなく、小さな出来事の積み重ねによって変わっていたことを語っている(L2)。そしてその例として、自身が婚姻届を提出する際のトラブルの例を挙げ、その具体例を提示していく。

レベル 1

この断片では二つの軸について語られている。一つは、日本では外国人が婚姻届を提出する際には出生証明のようなものを同時に提出する必要があることである(L4)。そしてもう一つは、ロングがその事実を知ったのが婚姻届を提出するわずか3日前であり、非常に焦りを感じていたためという点である(L8)。特に二つ目についてロングは「すごい怒られそうに」なったために、それがロング自身の焦りを助長させることになったと語っている。なお、ここでロングが誰に怒られそうになったかについては直接的には語られていない。しかし婚姻届を提出できないという語りの内容から考えると、怒る主体はロングの妻(当時は婚約者)であると考えられるだろう。当時は「やばいやばい」と言うほど焦りを感じていたロングではあるが、結局出生証明書を取り寄せることができ、婚姻届の提出には

間に合っている。このように、最終的にはなんとか書類を手に入れることが出来たことを語っているが、注目したいのは、一連の経験を語り終えた後に IR に対して「気をつけた方がいい」とアドバイスを送っている点である。

レベル 2

ロングが自身の経験を語り、日本では出生証明³を手に入れることが出来ないことが語られると、IR はそれに対して「そうなんですか」と意外性を表明し、確認を求めている。すでに知られている情報や予想通りの情報に意外性はないとすれば(加藤 2005)、逆説的に、IR はこの情報について知らなかった、予想していなかったことが表明されていることになる。ロングはこの表明を受け、ロングはレベル 1 で分析されたような、自身が「すごい焦った」というトラブルを IR が繰り返さないように助言を送っているわけである。これはすなわち、将来的に婚姻届を提出する際には IR も出生証明などを海外から取り寄せる必要がある人物であることをロングが知っており、自分と同じ日本に居住する「外国人」として位置づけているということである。ここでの IR に対する位置づけを、そのままインタビュー全体に適用することは出来ないが、少なくともロングが IR を自身と同じカテゴリーに属する人物として位置づける可能性があると言うことは出来るだろう。ロングが断片 5 において積極的に自身の外国人性に関わる話を行ったという事実は、IR を同じカテゴリーに属する人物位置づけていたためとも考えることができるかもしれない。

他方、ロングはインタビューにおいて、断片 4, 5 で分析されたようなストラテジーが適用されない場面についても言及している。次の例を見てみたい。

(4) ラーメンやでの友人とのやりとりについての語り

インタビュー断片 7:

1	ロング	いや::、やっぱりほとんど無いですね、まあ、友達とネタ的にはありますけど hh
2	IR	ネタですか h
3	ロング	例えば、あの::友達とかと飲んで、最後にラーメン食べに行くかみたいな、よくあるじゃないですか
4	IR	そうですね h

³ 日本の法務省は、外国人が日本で婚姻届を提出する際に必要な書類として婚姻要件具備証明書を定めているが、自治体によっては出生証明書の提出が義務づけられている場合がある。例えば武蔵野市は出生証明書の提出は必要ないが(武蔵野市ホームページ)、岐阜市では提出を義務づけている(岐阜市ホームページ)。なお、出生証明書は各在日大使館・領事館で発行できる国もあるが、アメリカの場合、州政府による発行が必要である(在日米大使館・大使館ホームページ)。

5	ロング	そういう時とかに、こう箸を渡してくれたりするんですけど、ロング、大丈夫か、スプーンとフォークもらおうかっていう感じで hhh
6	IR	hhh
7	ロング	それでまわりもそれにのってきたり、ごめんやっぱステーキの方が良かったねみたいな、いや::大丈夫です hh、みたいな感じ::、でいじられることは、結構ありますね hh
8	IR	hhh そうなんですね h

この断片は、先の例と同様、現在アメリカ人や外国人として扱われることはあるか、という質問に対する答えを産出していく流れの中で語られたものである。この断片で、話されているスモール・ストーリーは、ロング自身の体験談であるが、L1 でロングが述べる「ネタ」の例が語られている。

レベル 1

この断片におけるストーリーには、ロングとロングの友人らが登場しており (L3)、彼らがお酒を飲んだ後にラーメン屋に入ったときの場面が語られている。そこでは、ロングの友人が、ロングに箸を渡す際に、ロングを箸の使えない者として位置づけて、「フォークとスプーンもらおうか」という提案を行っている(L5)。さらに、他の友人もそれに追従するように、ロングにとっては飲み会の後に食べるものとしては、ラーメンよりもステーキの方が好ましいことが述べられ、ラーメン屋に入ったことを謝罪している。ここでロングは、日本では一般的な食器である箸が使えないという点や、飲み会のあとにいわゆる「シメ」としてラーメンを食べるよりも、ステーキを好む者として位置づけられており、日本人とは異なる文化を持つもの、すなわち「外国人」として扱われていると言えよう。さらに言えばラーメンの代わりにステーキが提示されていることから、単に「外国人」と位置づけるよりも、「アメリカ人」として位置づけていると考える方が妥当であるように思われる。いずれにせよ、そのような位置づけに対してロングは「いや、大丈夫です」と述べることによって、そのような「アメリカ人」としての遂行的アイデンティティを受け入れて発話している。すなわち、箸が使えることやラーメンを食べることが当然、あるいはそれらを好んでいることを表明するなどして前提となる遂行的アイデンティティを否定するのではなく、あくまでもその位置づけに従って返答しているのである。

レベル 2

一方で、ロング自身が述べるように、これらの語りはすべて「ネタ」の例え話として語られている(L3)。「ネタ」という言葉はやや曖昧で内容が示されていないため、IR はその内容の確認を求めており(L2)、説明が開始されている。ロングはその「ネタ」の内実をスモー

ル・ストーリーを語ることによって説明しているが、頻繁に笑いを交えながら語りを進めている(L5、7)。すなわち、ストーリーの登場人物たちが行っている行為、すなわちロングをアメリカ人として位置づけて行われたやりとりはあくまでもロングに対する「いじり」であって、冗談としてのやりとりであることをIRに対して示していると考えられるだろう。IRもそれに対して同調するように笑っており(L6、8)、それが「ネタ」であり、冗談としてのやりとりであることに理解を示している。遊戯性のある「からかい」や「いじり」という行為は、攻撃的な内容であっても受け手に心地よさを感じさせる要素があることが指摘されているが(葉山・櫻井 2008; 望月他 2017)、これは、ここで語られているロングと友人たちのやりとりにおいても同様であると考えられる。すなわち、彼らの間においてはロングのアメリカ人という属性は「いじり」の対象となっており、その場において友人関係を築き、確認し合うためのリソースの一つとなっていると考えられる。

5.2.2 ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル3)

ロングは中学性の頃から英語の教科書をわざと拙く読むなどしており、自身のアメリカ人性、または外国人性を顕在化させることに消極的であり、むしろ潜在化させていると言ってよいだろう。またこれは、現在はそれほど「外国人」、あるいは「アメリカ人」として扱われることはないとも語っていることから、多くの場面において適用されているロングのマクシムとなっていると考えられることができるだろう。

一方で初対面場面において自分の名前を言う場合など、外国人性が顕在化する場合には自身がアメリカ人であることを認めるものの、「アメリカ人」に期待される英語能力については事前に否定している。すなわち、「アメリカ人」であることが明らかになった場合には、その期待をできるだけ小さくし、アメリカ人性を潜在化させるストラテジーを持っているということであろう。これは、英語を拙く読むという行動や、それをIRに対しても積極的に語るという点と矛盾せず、またロングのマクシムとも明らかに相互関係があると言える。

他方、IRに対しては同じ「外国人」としてお互いを位置づけてアドバイスを送ることもあった。また、友人間においてはロングが「外国人」あるいは「アメリカ人」であることが遊戯性のあるいじりの対象となり、冗談としてインターアクションを促進させることが語られており、「冗談としてのリソースとして許容する」というストラテジーが適用されていると考えられる。外来性がコミュニケーションのためのリソース、あるいは社会と個人のエンリッチメントの要素となりうることは、以前から指摘されているが(e.g. 岡崎 2003、村岡 2010b など)、この場面においても同様に友人間におけるリソースとなっているものと考えられる。これらの、先ほどのマクシムやストラテジーとは明らかに矛盾している。ここには、例えば積極的な社会参加や、ネットワーク維持の優先など、インタビューでは顕

在化しなかった、異なるマクシムと相互関係にあるストラテジーが適用されているための結果であると考えられる。

本節において分析されたロングの遂行的アイデンティティ構築の原則は以下のようになるだろう。ロングは、「一応」としながらも自らのことをアメリカ人だと考えているようである。ただし、インタビューでは、自分がアメリカ人であることを「たまに忘れ」るとも語っており、いまだに日々の相互行為や社会的な枠組みによって揺れ動いていることが語られていた。一方でロングは、アメリカ人に期待されるような英語能力を持っていないと感じており、自身がアメリカ人であることは周囲には言わず、基本的に潜在化しようとしている。しかし、初対面場面で名前を言う場面など、顕在化した際にはそのアメリカ人性や外国人性を最小化するように努めている。この最小化は「アメリカ人」あるいは「外国人」にかかる期待を否定することによってなされている。一方で、友人との相互行為においてはこのような最小化は見られず、異なるストラテジーが働いている。このようなストラテジーが、インタビューで語られていないどのようなマクシムと相互関係があり、それがどのような場面が優先されるのかについては、別稿での検討が必要であろう。

5.3 スミスの語りにおけるポジショニングの分析

スミスはインタビューで、文化的な蓄積アイデンティティについて悩みぬいた結果、個人としての蓄積アイデンティティを持つようになったことを報告している。一方で、自分からはそれを明かさないようにしているものの、法的な身分としてアメリカ人であることは理解しており、もし他の参加者に質問されることがあれば、自分が日系アメリカ人であることを明かすようにしているという。他方、スミスが高いレベルで英語を使用できることはまわりの人たちにも知られており、それを隠そうとはしていない。これは、スミスが英語を個人のスキルとして捉えているためであると考えられる。以下、スミスのインタビューの断片を見ながら、スミスの遂行的アイデンティティ構築の原則について分析していく。

5.3.1 語りの分析

(1) アイデンティティの危機についての語り

インタビュー断片 8 :

1	スミス	結構その、働いてちょっとしてから、感覚が変わったってのはある
2	IR	変わった、というと

3	スミス	あの::、大学のころから、外国人みたいな扱いをされるとちょっとイラっとしてたん () ね、こうみんな同じこと聞いてくるから、あの、ハーフなの::とか、これ食べれるの::とか、なんか、自分を見てない感じ
4	IR	ん::
5	スミス	納豆食える::とか、そりゃ食えるよみたいなね hh
6	IR	なるほど h
7	スミス	んで、その::結構悩んでた時期があって、日本では日本人じゃないし、まあアメリカ人でもないってのは分かってたから、それで、まあほんとに悩んでて::一回職場の先輩に相談したことがあって、まあ相談っていうか飲みに行ったときに話をして(はいはい)、んで::んなもんど::でもええやろ、お前はお前やって言われて、それでなんかはっとして、そっからは一切アメリカ人とか日本人とか気にしなくなった
8	IR	ん::
9	スミス	っていうのはまあ、すごい変わったことかな
10	IR	ん::なるほど

レベル 1 :

この断片の前ではスミスが、自身がアメリカ人であるという感覚が変化したことを語っていた。この断片では、IR がスミスに対して、自身のアメリカ人としての感覚が変化したのはいつ頃なのかという質問に対してのスミスの返答が語られており、二つのスモール・ストーリーから構成されている。一つは、外国人の扱いをされている例としてとして提示されており(L3、5)、二つ目は職場の先輩に相談をしたときのやりとりが語られている(L7)。一つ目のストーリーにおいては、スミスとスミスの大学時代の、具体的な関係性は定かではないが、知り合いとのやりとりが語られている。そこでは知り合いがスミスに対して「ハーフなの」、「納豆食える」など、スミスを「外国人」として位置づけて質問を行っている。これらはスミスが「外国人みたいな扱い」をされている場面であり、スミスはそれに対して「そりゃ食える」と、当然であることを質問されることに対して、怒りを感じていたことが語られている。そして、これは一人や二人からではなく、「みんな」からされており、次第にスミスが自分の文化的アイデンティティに悩みを持つていくことにつながっていったことが読み取れる。二つ目のストーリーはそういった悩みを抱えたスミスが、職場の先輩に相談をする場面が語られている。そこではスミスの先輩が、スミスが「アメリカ人」なのか、「日本人」なのかという問題は「どうでもいい」ことであって、スミスはアメリカ人や日本人関係なく「スミス」という人間であることが語られている。そしてこの言葉によって、スミスは悩みが解消され文化的なアイデンティティについて気にしなくなったということが語られている。これら二つのストーリーは、時間軸が整理され、苦難、危機、

解決という流れ(Plummer,1995=1998)が語られた一つの大きな物語が形成されていると言えよう。そしてこれはスミス自身が言うように、自身が「すごい変わった」(L9)ことの例として提示されており、すなわち、スミスはこれらの経験を経て、「アメリカ人」でも「日本人」でもない、「自分自身」というアイデンティティを持つようになったと語っているわけである。

レベル2

スモール・ストーリーは、時としてインタビュアーとの心的距離が開いた時に語られることがあるという(秦 2013)。この断片に限らず、インタビューを通して IR はインタビュイーを日本に住む外国人、スミスに関してはアメリカ人として位置づけている場面が散見される。レベル 1 の分析で述べたように、スミスが現在、アメリカ人や日本人という枠にとらわれない自分自身という蓄積アイデンティティを保持しているとすれば、ここでのスモール・ストーリーは、IR の提示するアメリカ人という遂行的アイデンティティに対する抵抗として現れているとも考えることが出来る。インタビューにおいて、インタビュイーは時に、他者や過去の自分の言葉の代用者⁴となり、インタビュイーとしての役割を保持しながら、自身の本当の見せたい自己を表現することがあるが(今 2010)、この断片においても同様のことが考えられる。すなわち、スミスはインタビュイーとして適切に受け答えをしながらも、IR から表示されるアメリカ人の遂行的アイデンティティに対しては抵抗を示し、自分は自分という主張を行っていると考えられる。

(2) 初対面場面についての語り

インタビュー断片 9:

1	IR	結構その、自分がアメリカ人だっっていうのは言ったりするんですか
2	スミス	まあ、言うかな::というか、あの聞かれたら言うって感じ
3	IR	ん::
4	スミス	ただ::その、自己紹介とかして名乗ると大抵聞かれるから、まあほぼ毎回言うことになるから
5	IR	ん::ですよ
6	スミス	そうそう、で結構説明がめんどくさいから、日系アメリカ人ですって言うようにしてる、まあ実際そうなんだけど h
7	IR	ん::

⁴ Goffman(1981)は話し手が発話に対して持つ自己の立場を示す産出フォーマット(Production Format)の概念を提出している。その中で、他者や自分の言葉の代用者となって自身の考えを示す話し手のことを Animator と呼んでいる。

8	スミス	それでそれでも突っ込まれたら、母方のばあちゃんが、あの:ひいばあちゃんが日本人でって説明して、結局自分もよく分かんないから日系アメリカ人で通してます::って言っちゃう
9	IR	そうなんですね
10	スミス	そうそう、まあ実際自分もうほとんど気にしなくなったんだけど、あの::自分が何人だとかってことね(はいはい)、聞かれればアメリカ人かな:って思ってる、その::まあいつも聞かれたりするから、あと、まあ英語のこととか聞かれたりね
11	IR	ん::
12	スミス	んでも、まあやっぱり自分からは言わない

この断片は、スミスが現在でも様々な場面な場面でアメリカ人、あるいは外国人として扱われることがあるという語りを受け、IR が自分からアメリカ人であることを言うのかという質問から始まる。ロングと同様、スミスも自己紹介をすると他の参加者から外国人性に関わる質問がされるということが話されており(L4)、そこでのスミスの対応が語られている。スミスは他の参加者から出身について質問をされると日系アメリカ人であると言うようにしており (L6)、そこからさらに追求された場合には、母方の曾祖母が日本人であるなどの説明を加えた上で、自分でもよく分からないために日系アメリカ人で通していることを相手に説明するということが語られている(L8)。

レベル 1

ここでスミスは、他の参加者に対して自己紹介をしており、初対面場面であると言えるだろう。そしてそこでは他の参加者から出身を質問され、それに返答する形で自身が日系アメリカ人であることを明かしている(L6)。さらに内容は明かされていないが、より詳細な質問をされており、自分の曾祖母が日本人であるという事実を自ら提示することによって返答している。しかし一方で、自身のルーツに関してはスミス自身も不明瞭な点が多く、そのため説明も困難なので、曾祖母が日本人であるという明らかな事実から、日系アメリカ人で「通して」いることを相手に説明している(L10)。この断片のストーリーにおけるやりとりは、スミス自身が語るように日本で生活をしていく上で、「言うようにしている」、あるいは「通している」ことであり、必ずしも本人の蓄積アイデンティティと一致しているわけではないだろう。断片 8 での分析を鑑みるに、むしろここでの語りは、自身の蓄積アイデンティティと異なる事実をどのように相互行為を通して構築しているかが語られていると考えるのが妥当であろう。

なお、ロングと同様スミスも英米語圏の名前を持っているため、名前を相手に伝えると相手から出身に関する質問をされることが多いことをと語っている。岡本(2006)によると、

日本人は初対面場面において不確実性を回避、あるいは減少させることを目的とし、相手に関する情報をできるだけ集めようとするのだという。そうだとすればこの場面において、またロングの事例も同様に、自己紹介の時に出身について訪ねるという日本人による行為は、名前や言語能力、また外見などからくる相手の不確実な情報をより確実な情報として取り入れようとしているものと考えられる。

レベル2

この断片のはじめに、IR はスミスに対してアメリカ人であることを他者に明かすのか、と質問を行っている。すなわち、IR はスミスのことを「アメリカ人」と位置づけて質問を行っている。スミスはIR に対して、初対面場面では自身が日系アメリカ人であることを「言うようにしている」と述べており、さらに「実際そう」と冗談げみに笑いながら認めている(L6)。ここでは、相互行為を通して提示される実際の属性を指しており、断片 8、また本断片のレベル1で分析されたように、本人の意識とは異なるものである。すなわちここではすなわち、本人の意識とは別の次元にある、法的な身分としてのアメリカ人という属性をどう扱うかが語られていると言えよう。L8でストーリーを語り終えると、念をおすように、自分が何人であるかは「実際ほとんど気にしなくなった」と述べる一方で、「聞かれれば」アメリカ人であると思っていることが語られている(L10)。さらにL12では「自分からは言わない」ことが加えられており、あくまでも自身が日系アメリカ人であることは他の参加者に聞かれたら答えることであることが強調されている。すなわち、自身の日系アメリカ人という属性は、社会的な制度から見た際には事実となるが、本人の意識とは異なっているため、自分からは語らず、あくまでも聞かれたら認めるということを主張しているのであろう。そしてこれらは、L1でIRからの位置づけに向けられていると言えるだろう。

(3) 英語能力に関する語り

自身がアメリカ人であるという事実は潜在化させているが、スミスは「アメリカ人」カテゴリにつながり得る英語に関しては隠そうとせず、職場では同僚などにも英語を教えていることも語っている。次の断片ではスミスが自身の英語能力についての意識が語られている。

インタビュー断片 10:

1	IR	でも、結構英語とか教えたりしてるんですよ
2	スミス	そうね、それもまあ変わったことかな::、英語使うことに関しては、まあ正直たまたまに、その::優越感みたいなものは、まあある(1.0)昔は、あの、高校とか大学の時とかは英語普通に話してすご::いみたいな感じで言われるのが鬱陶し

		かったんだけど、あまりに言われるから慣れてきちゃって、それでなぜか優越感が残ったみたいな hh、なんもすごいことじゃないんだけど hh
3	IR	ん::
4	スミス	まあいつ、って言われると、まああれなんだけど、今考えると、その英語ができることとアメリカ人だってことは違う、まあ違うって思えるようになったからかな::
5	IR	うんうん
6	スミス	その::オンゲしてる時とかに英語で話してて、どこ出身::とかって聞くと韓国って言われて、おまじかってなることとか普通にあるし
7	IR	なるほど h

これは断片 9 で、自分からアメリカ人であることは明かさないというスミスの語りが見られた直後の断片であり、英語使用に関するスミスの意識の変化が語られている。IR によって、職場などでは英語を教えていることに関して確認が求められると (L1)、スミスはそれに確認を与え、さらに自身の変化について語り始める。まず、現在英語を使うことに関しては優越感を感じていることが述べられ、それとは対照的に高校や大学生の時は英語を使用して褒められることに苛立ちを感じていたことが語られる。しかしその褒めが繰り返されることによって次第に慣れ、苛立ちでは無く優越感を感じるようになったという変化が語られる(L2)。そしてその理由として英語が出来ることとアメリカ人であることは違うというスミスの意識が語られ、さらにその具体例として、オンラインゲームでの韓国人との会話を語っている(L6)。

レベル 1

スミスはゲームをすることが趣味で、インタビューではよくオンラインゲームをしていることを報告している。オンラインゲームでは現在チャットといわれる文字でのコミュニケーションや、ボイスチャットと呼ばれる音声のコミュニケーションを行いながら世界中の人と遊ぶことが出来る。スミスによると、このようなツールでコミュニケーションを行う場合、基本の言語として英語が選択されることが多いのだという。L6 で語られているスミスの経験はこのようなオンラインゲームをしている時の経験である。この場面では、スミスは他の参加者と英語で会話を行っており、相手に出身を尋ねている。すると相手の参加者は、自身が韓国人であることを明かしており、スミスはそれに対して「おまじか」と驚いている。

ここでスミスが驚きを表明していることから、その参加者が韓国人であったことはスミスにとっては予想外のことであったと言えよう。そしてそれは、直接的には述べられては

いないものの、相手の話す英語がそれほど流暢であったということのあらわれでもあったと考えられる。すなわち、ここでは、韓国人であってもスミスが驚くほどの流暢な英語を話すことが出来るという経験が、英語の能力が必ずしもアメリカ人と結びつくわけではないという、スミスの意識の変化のきっかけとして語られているのである。

レベル 2

すでに述べたように、これは断片 9 の直後の断片であり、L1 の IR による「でも」という逆説的な表現は、先の例の最後の「自分からは [日系アメリカ人であることは] 言わない」というスミスの言葉に向けられている。この断片以前のインタビューでは、スミスは英語を使用できることに関しては、他者にも知られており、職場などでは英語の電話対応をまかされることも多く、また同僚には英語に関する質問をされたり、英会話の練習につきあっていることが語られていた。言語と民族、あるいは国家アイデンティティの関連については多くの研究があり(例えば鈴木、2004; 小張 2004, Batten, 2004、加藤 2014 など)、言語は文化を象徴するものであり、自分を何者だと見せたいかという心理と結びついているとされる(丸井 2012)。すなわち、ここで IR は日系アメリカ人であることは言わないという行動と、英語を使用することは隠していないというスミスの行動に矛盾を感じており、それが表明されていると言えよう。それに対してスミスはまず、英語を話すことに関する自身の感情の変化を語っている。すなわち高校や大学時代などの過去には、英語を使用して褒められることに対して抵抗を感じていたが、それがいつからか優越感を感じるようになったという変化である。スミスは続けて、その変化の要因としてレベル 1 で分析されたストーリーを語っている。すなわちここでは、英語の使用を肯定的に評価されることによって感じる優越感は、自身のアメリカ人という属性とは関係が無く、英語を個人の能力として捉えるようになったということ、ストーリーを交えながら提示しているのである。IR は優越感に関する語りがなされたあと IR は「ん::」というあいづち的な発話を行うのみであったが、最終的にスミスによって具体的な例が示されると「なるほど」とスミスの主張を受け入れている。具体的なスモール・ストーリーが示されることによって、スミスは自身の主張に説得力を持たせ、自身の主張を受け入させることが可能となっているのである。

5.3.2 スミスの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル 3)

ここまで見てきた各断片での分析を踏まえ、スミスの遂行的アイデンティティ構築の原則について分析を行っていく。

スミスは、日本で生活していく上で様々な場面で「アメリカ人」あるいは「外国人」として位置づけられてきた。そしてこれが繰り返されていくうちに、「日本人」でもなく「アメリカ人」でもない自身が何人であるかが分からなくなるという文化的なアイデンティティ

いの危機をむかえることとなった。しかし、職場の先輩の「お前はお前」という一言によって自分が何人であるかを気にしなくなった。この苦難、危機、解決を経験したことによって、現在はアメリカ人や日本人という枠に縛られない、「自分自身」という蓄積アイデンティティを持つようになった。

一方でスミスは、自身が日系アメリカ人であるという事実は認めているものの、それを自ら顕在化させることはせず、基本的には潜在化させている。ところが、自身の名前などをきっかけとして自身の外国人性が示され、他の参加者から自身の外国人性に関わる質問がされると、日系アメリカ人であることを認め、それで通しているという説明を行うようにしている。これは、スミスは、自身が社会的にアメリカ人と定められていることを認めているためであると言えるだろう。すなわち断片 9 では、法的な身分として逃れることのできないアメリカ人という属性を、本人がどのように遂行的アイデンティティとして構築するかの原則が語られており、まさしくアイデンティティをどのように演じているか(北出 2013)が語られていると言えるだろう。

スミスはまた、「アメリカ人」や「外国人」として位置づけられる可能性のある英語使用に関しては特に潜在化させてはいない。これに関しては英語使用と、自身の「アメリカ人」という属性は関係がなく、むしろスミスにとっては他者から肯定的に評価されることによって、優越感を感じるものであることが語られていた。すなわち、スミスにとって英語能力は「アメリカ人」としての能力ではなく、個人の能力、あるいはスキルの一つとして理解されているということが考えられる。そうだとすれば、言語が英語であることには注意を払うべきではあるが、言語を必ずしもアイデンティティと結びつけて考えることが出来ないということを意味している⁵。スミスが語るように、スミスははじめからこのような意識を持っていたわけでは無く、様々な場面に参加することで次第に変化していった意識である。様々な場面で繰り返される相互行為を通して変化するの、自身をどのように示していくか、すなわち遂行的アイデンティティ構築の意識だけでは無く、外国人として判断されうる要素を、どのように理解するかにも及ぶのである。

ここまで分析してきたスミスの遂行的アイデンティティ構築の意識は、以下のように示すことができるだろう。スミスは、文化的な蓄積アイデンティティを持つことなく、個人としての蓄積アイデンティティを持っているように思われる。すでに述べたように、これ

⁵ 前野(2003)は、インド英語やシンガポール英語、フィリピン英語などの英語変種について指摘しながら、世界共通語としての世界英語(World English)について言及している。それによると今後広がっていくと予想される世界英語は、イギリスやアメリカなどの母語話者特有の表現が弱り、世界的に普遍的な価値を持つものになるという。そうだとすれば、英語が「アメリカ人」と結びつけることのない、スミスのような考えを持った者が増えていくことは十分に考えられる。ただしインタビューで語られたように、スミスはあくまでも英語を個人の能力として捉えており、前野の述べるような世界英語とは異なっている点には注意が必要である。

は相互行為を通して他者から遂行的アイデンティティを示され、日本人でもアメリカ人でもなかったものの、他者からの一言で起きた変化であり、文化的アイデンティティからの脱却という点においては、「国際人」とでも言えるような、「新統合型」のアイデンティティ（中島 2001, pp.190）ともいうことができるだろう。ただし、新しい統合であるというよりは、むしろ統合からの脱却である点は興味深い。一方で、スミスは法的な身分として、逃れることのできないアメリカ人という属性についても理解しており、こちらについては聞かれれば顕在化させるものの、聞かれなければ潜在化させている。もしそれらが他の参加者からの質問などによって顕在化した場合には、それを認めるようにしている。一方で、英語使用については、アメリカ人との属性とは関係がない個人的なスキルとしてとらえており、スミスが高い英語能力を持っていることは、周りの人たちにも知られている。そしてときにはその個人的な能力を他者から肯定的に評価されることによって、優越感を得ることもある。

5.4 パクの語りにおけるポジショニングの分析

パクは、基本的には外国人や韓国人ことを潜在化させるようにしていると考えられる。これは、自身の望まぬ場面において外国人、あるいは韓国人として評価されることを否定的にとらえているためである。またこれは、それを達成するために、パクが日本人のようになることを目標としており、言語のみならず、仕草や習慣をも学習し実践してきたという語りにも表れている。一方で、パクは自身が韓国人であることは認めており、韓国語教師のボランティアなどには参加をしていることが報告されている。また、インタビューにおいても韓国人、あるいは外国人として自らを位置づけることが多く見られた。これらのことから、パクは限定的な場面においては韓国人や外国人として振舞っていることが分かる。すなわち、パク自身と他の参加者とが、パクを外国人、あるいは韓国人として位置づける場面においては、抵抗なく相互行為を行っているのである。以下、インタビュー・データを見ながらパクの遂行的アイデンティティ構築の原則を分析していく。

5.4.1 語りの分析

(1) 外国人として扱われることについての語り

パクはインタビューで、外国人、あるいは韓国人として扱われていると感じている場面について、来日当初から現在まで常にそのような場面があり、外国人として扱われることに対して否定的な意見を語っている。次の断片は、来日直後の方がそのような場面が多かったのか、という IR の質問に対する返答から始まっている。

インタビュー断片 11 :

1	パク	う:ん、そうだね、来てすぐの時間が一番そうと思う、でも、まあ来たてのときは本当に、分からないことも、本当に多かったから、しかたないかなまあ、そのころから嫌だったけど
2	IR	そうなんですね
3	パク	その、外国人と思われるのが、ばれるのが嫌で、その、外国人だとわかると、先入観が入るから(うん)、普通に自分が違うのに:、外国人だから違うんだよねと、先入観があるから、なんでも外国人のせいにされるから
4	IR	ん::
5	パク	この前もあった、あの:やっぱ韓国の人って違うねって言われていやいやいやいやって、韓国人みんなこうじゃないからねって言った覚えはある
6	IR	ん::
7	パク	なにか違うことをしたときに外国人だから、韓国の人ってみんなそうだよねって思われがちだけど、そんなことはない、たまたま自分が違うだけなの
8	IR	ん::そうだよね

パクは、来日してすぐの期間が一番外国人として扱われることが多かったと述べるが、来日当初は分からないことも多く、仕方がなかったことを語っている。しかし、同時に当時から外国人として扱われることは嫌だったことが語られている(L1)。そしてその理由について、外国人だというのが相手に伝わると先入観が生じ、個人的な理由でなにかをしたとしても、それを「外国人」のカテゴリーと結びついた活動(Sacks, 1995)として捉えられてしまうことを挙げている(L3)。さらに続けて、最近パクが経験した場面について語る(L5)。そして最終的に、日本人と異なる行動をしたときに、外国人や韓国人としての行動を捉えられがちであるが、その認識は正しくなく、個人としての行動であると述べ、自身の考えを語っている。

レベル 1

この断片におけるストーリーではパクと、日本人と思われる他の参加者が参加しており、以下のようなやりとりがなされている。正確には語られていないが、まずパクが何かしら日本人とは「違う」ことを行い、他の参加者から、その行動が、パクが韓国人であるために行われたことであることを指摘される。言い換えれば、パクの行動は「韓国人」というカテゴリーに結びついた行動として見られており、それが遂行的アイデンティティとして示される場面が語られている。パクはそれに対して、「いやいやいやいや」あるいは、「韓国人みんなこうじゃないからね」と、述べることによってそれを否定している。すなわち物語の世界においてパクは、韓国人あるいは外国人として遂行的アイデンティティが構築

されるのを拒否しているわけである。

レベル2

この断片において IR は相槌をうっただけであり、パクの語りを促すような発話は行っていない。すなわち、自身が外国人として見られることに対する否定的な意見、あるいはレベル1で分析されたようなストーリーを積極的に語っていると推察できる。他方、パクは自身が韓国人である、あるいは外国人であることを否定しているわけではない。パクが外国人と「ばれる」(L3)のが嫌だと語っているように、自身が外国人であることは認めつつ、自身の「なにか違う」(L7)行動が全て「外国人」、あるいは「韓国人」というカテゴリーに結びついた活動として見られることを拒否しているのである。すなわちパクは、この場面でインタビュアーに対しては自身が外国人、あるいは韓国人であることを潜在化させることはしていない。またインタビューの他の部分においても、パクは多くの語りを行っており、自身の韓国人性の表出を潜在化させるような、消極的な姿勢は見られなかった。一例として、以下の断片を見てみたい。

インタビュー断片 12:

1	IR	日本語を話すときは、結構猫をかぶることがあったの h
2	パク	ありますあります h、ありました、話し方とか
3	IR	ん::
4	パク	その::韓国の人話し方は結構ストレートで、日本の人が聞くと毒舌、ドライに聞こえる、女の子が、女子女子してるのを、猫をかぶるのを嫌う文化
5	IR	うんうん
6	パク	でも日本では礼儀正しさとか、気をつかう、日本に慣れていく中でそういうところを身につけないと、コミュニケーションに障害がでちゃう

この断片の前では、パクが日本語使用や学習について自身の意見を述べていた。その中でパクは、日本語を話すときは猫をかぶらないといけないと述べており、この断片はその発話に対するインタビュアーの確認から始まっている。IR は猫をかぶることがあったのか、とパクに確認を求め(L1)、パクは「あります」と二回繰り返した後に「ありました」と言い換え、過去には猫をかぶることがあったと述べて確認を与えている(L2)。続けて、「話し方とか」と具体的な例を挙げて、韓国人と日本人の話し方の違いについて語っていく。それによると、韓国人はストレートな話し方をしており、日本人にとってはそれがドライに聞こえてしまう可能性があることを指摘し、さらに女子が「女子女子している」、すなわち過度に女子らしく振舞うことを嫌う文化であると語っている(L4)。ここではパクは「韓国人」を代表する立場に立っており、韓国の社会的な通念について語っていると理解することが

できるだろう。さらに続けて、日本でのコミュニケーションについて語っている。ここでは礼儀正しく、また相手に気をつかいながらコミュニケーションをしなければ障害が出る、と述べており、日本の社会言語的、あるいは社会文化的な規範について語っていることが分かる。ここでパクは、「日本に慣れていく」者、すなわち日本に慣れていない者として自身を位置付けて語りを行っていることと理解することができるだろう。これは、日本語でのコミュニケーションを学ぶ学習者としての語りかもしれないし、あるいは日本で生活する外国人居住者としての語りであるとも考えられる。いずれにせよ、外国人性のあるものとしての立場で語りを行っていることに変わりはないだろう。IR はここでも相槌をうつにとどまり、相手の語りを促すような発話は行っていない。このようにパクは、インタビューを通して自身の韓国人性や外国人性を顕在化させることに消極的な姿勢は見せていない。

(2) 片言ではない日本語使用についての語り

インタビュー断片 13:

1	パク	それはずっとある、アルバイトで接客ばかりしていて、そのうちにちゃんとやらなきゃって思った、その::接客しているうちに、お客さんにいい気持で食べてもらいたいと思うようになって、そのために、その::円滑なコミュニケーションは基本中の基本だと思ったので、その接客の人が片言だったりしたらいやかな::と思ったので
2	IR	ん::
3	パク	外国人だからいいよ、留学生だもんね日本語、まだまだだからとか、言われるのがすごい嫌いだったから
4	IR	ん::つまりその、日本人と同じように扱われたかった
5	パク	それはずっとそう、やり方が違ったら教えてほしいし、叱られたい、しょうがないではなくて
6	IR	ん::今はどうなんですか
7	パク	今も外国人と扱われることはある、同期と同じ資料を作っても、がんばってたねとか、まちがっててもしょうがない、か、とか、同じように扱ってほしいんだけど(1.0)まあ今は少なくなったけど、三年目だし、でも一年目はやっぱりあった

この断片では、パクが自身の日本語使用について語っている。まず、ずっときちんとした日本語を使用したかったことが語られる。そして、その理由として過去のアルバイトの場面、そして現在の職場の場面における、他者からの自分の位置づけについて語っている。パクは大学生アルバイトをしていた当時から、「外国人」あるいは「留学生」として位置づ

けられることに嫌悪感をもっていただことを示している。それは現在の職場についても同様であり、他の日本人、あるいは「同期」(L7)とおなじように扱われたいというパクの希望が語られている。

レベル1

この断片では、二つの短いストーリーが語られている。一つはアルバイトをしていた時についてであり、もう一つは現在の職場についてである。アルバイトのストーリーにおいては、まず、当時のパクがアルバイトの場面でどのようなことを考えていたのかが示されている。すなわち、接客をする上で円滑なコミュニケーションは「基本中の基本」であり、お客さんに気持ちよく料理を食べてもらうためには自身が片言ではない日本語を使用することが不可欠であると考えていたことが語られる(L3)。さらに、L5 ではほかの登場人物が現れ、当時のパクは、外国人あるいは留学生なので日本語ができなくても仕方ないという言葉がぶつけられている。すなわち、日本語ができないという事実が「外国人」、あるいは「留学生」というカテゴリーと結びつけられているとも言うことができるだろう。このような位置づけを行っている他の登場人物が誰であるのかは語られていないが、当時のパクは仕方ないと言われることに対して「嫌だった」と強い嫌悪感を持っていたことが明かされている。興味深いのは、ストーリーの登場人物としてのパクはあくまでも嫌悪感を持っていたことのみが語られており、「外国人」あるいは「留学生」というカテゴリーを否定、拒否することは行っていない。これは断片11のL1で語られていたことと呼応しているように考えられる。すなわち、「外国人」や「留学生」として位置づけられることも「しかたない」ことであると考えていたと推察することができる。

続いて、IRの質問に促される形で二つ目のストーリーとして、現在の職場の場面に関するストーリーも語られている。ここでは、パクが職場の同期と同じ資料を作った際に、それを「頑張ってたね」と言われて肯定的に評価されたり、間違った資料を作成したときにも「しょうがない」とされ否定的に評価されないという、接触規範(フェアブラザー2000)が適用されたやり取りがされている。ここでも他の登場人物について明言はされていないが、自身の仕事を評価する人物であることから、上司もしくは先輩であると考えられる。ここで語られているストーリーは、1年目よりは少なくなったとしながらも、現在でも職場において行われることのある、他者から「外国人」として位置づけられる場面について語っていると考えられる。一方で、先ほどの断片11と同様、パクがそのような位置づけをされたときに、実際にその位置づけに対して交渉をしているかどうかについては語られていなかった。しかしこのような他者からの位置づけは、頻度は変化しながらも、大学時代から繰り返し経験してきた場面であるということと言えるだろう。

レベル2

この断片では、先ほどの断片 11 とは異なり、IR の質問に促される形でストーリーが語られている。しかし、断片 12 でも見てきたように、IR に対しては「外国人」であることを潜在化させようとはしていないように見える。一方、IR の確認の求めや質問によって、「外国人」であることが顕在化させられているようにも見える。

すでに述べたように、パクは片言ではない日本語を使用したい理由として、アルバイトでのストーリーを語っている(L1)。L3 では、「外国人だからいいよ」、や「日本語まだまだだから」とストーリーを語っているが、アルバイトという文脈を考慮して考えると、これは日本語の問題というよりは、日本語の能力が不足していたために起きた業務上の問題を指しているように思われる。これは、L5 においてきれいな日本語の話からアルバイトの「やり方」へと話が移行していることから言えるだろう。IR はそれを「日本人」と「外国人」という位置づけとして解釈しているが(L4)、パクは「アルバイト」という自らを位置づけて語りを行っている。すなわちパクが語っていることは、自身を「アルバイト」と位置づけている場面において、他者から「外国人」という位置づけが持ち込まれるというストーリーなのである。これは二つ目の職場でのストーリーに、より鮮明に現れている。

IR がパクの現在について質問をすると(L6)、パクは職場における自身の体験を語り始める(L7)。レベル 1 で分析したように、職場において他の同期と同じ業務を行っていても、異なった評価や調整がされていることが語られており、それが「外国人」として扱われていると感じる根拠となっている。他方、パクの「同期」という発話からも分かるように、ここでパクが問題にしているのは会社内の階級である。すなわちパクは自身を同期の一員として位置づけており、それが同期メンバーの業務が「上司」あるいは「先輩」によって評価される際の体験が語られているのである。ところが、その「上司」あるいは「先輩」は自身の会社の業務に「外国人」という位置づけを持ち込んで評価を行っている。すなわち「同期」の他のメンバーを同じ業務をしても、「がんばってたね」とより肯定的に評価されたり、ミスがあったとしてもそれを訂正されずに「しょうがない」ことだとされる。パクはそういった位置づけに対して不満を持っているのである。

5.4.2 パクの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル3)

ここまで見てきたように、パクはアルバイトや職場などの場面において、自らの位置づけと異なって、他者から「外国人」として位置づけられることに強い嫌悪感を持っている。しかしインタビューでは、自分が韓国人であることをリソースとして、ネットワークの確保、拡大を図っていたことも語られていた。本節では次の断片におけるパクの語りを分析しながら、ここまでの断片での分析をまとめ、パクの遂行的アイデンティティ構築の原則についてまとめてみたい。

インタビュー断片 14:

1	パク	日本が、というわけではないが、自分自身がどういう人か分からなくなる時はある、その一応、外国人という形で日本に来て、外国人として暮らしているが、外国人として一番早く身に着けたいことは、いち早く、その土地になれること、それで慣れて、そこの人達のようになること、を目指して、会話の言葉、仕草、習慣をまねする、日本の人はご飯の時にこう食べるのか:とか、話をするときこういう話し方するのか:とか、まねしていくうちに、自分って何人だっけ↑、なる、たまに
2	IR	ん::

この断片は、パクが来日してからの生活、そして自身の文化的アイデンティティの変化について語っている場面である。パクは其中で、「外国人」として自らを位置づけ、外国人が日本で生活をする中で大事なことを述べている。つまり、外国人として一番早く身につけたいこととして「いち早くその土地に慣れること」そして、「そこの人達のようになること」を挙げ、言葉や仕草、習慣を真似することが重要であると語っている。これは、これらのことを繰り返し行った結果、自分が何人か分からなくなったという語りからも分かるように、パク自身の経験から導き出されている。すなわちパク自身が、日本に慣れ、そして日本の人達のようになることを目標としてきたことがうかがえる。パクが語る「そこの人達のようになる」ための要素は、言語のみならず、仕草、習慣など、インターアクションに関わる様々な要素が含まれており、これらを日常的に真似し、自身の行動にとりこむ努力をしてきたことが語られているのである。

これらは断片 11 で分析されたような、外国人であることが「ばれ」ないようにするためにやってきたパク自身が意識してきたことであると考えられる。一度外国人であることが明らかになってしまうと、断片 13 で分析したように、自身の位置づけとは異なる、望まぬ位置づけを他者からされることにつながりかねないためである。パクの行動はこれを回避するために意識的に行ってきたものである。そして、ここでパク自身が語るように、これは自分が何人か分からなくなるほど行われてきたことでもある。すなわち、広くまた多くの場面において行われてきた、パクのマクシムとして考えることができるだろう。また、自分が何人か分からなくなるというのも、このマクシムに従ってインターアクションを繰り返していくうちに、次第に自身の蓄積アイデンティティにも揺らぎが生じてきた結果であると言えるだろう。

一方、限定的な場面に目を向けると、過去のアルバイトの場面や、現在の職場など、他者から自身の位置づけと異なる位置づけがされたときには、それを否定したり拒否したりすることは語られなかった。この点については 6 章で考察していくが、上司や先輩、あるいはアルバイトの店長など権力差のある関係性の中で、押し付けられたカテゴリーを否定

することができなかつた可能性が考えられる。

他方、パクはインタビューにおいては自身が「外国人」であること、「韓国人」であることを表示することに関しては消極的ではなかつた。また、自身のネットワークを広げるために、自身が「韓国人」であることをリソースとして利用することも見られた。これらの事から、限定的な場面においては、必ずしもマクシムに従った戦略が見られるわけではない。すなわち、日本社会で生活する上で、他の参加者から、またパク自身も自らを韓国人として位置づける場面においては「韓国人」、あるいは「外国人」として行動をしている。しかし、職場など自身が望む位置づけと異なって「外国人」と位置づけられる場面においては、それを否定的に捉えていると言えるだろう。

ここまでで分析したことをまとめると、パクの遂行的アイデンティティ構築の原則は以下のように示すことができるだろう。パクは、蓄積アイデンティティとして基本的には自らを「韓国人」であると考えている。アルバイトや職場など、自身の位置づけとは相反して「外国人」、あるいは「韓国人」として位置づけられるという経験を通して、自らの韓国人性、あるいは外国人性を潜在化させるマクシムを持つようになった。そしてそのマクシムに従って様々な場面において相互行為を繰り返してきた結果、韓国人という蓄積アイデンティティにもゆらぎが生じている。一方限定的な場面においては、自らが韓国人であることをリソースとしてネットワークを拡大させるなど、潜在化させていない場合もある。パクが語る韓国語ボランティアでは、自身と他の参加者どちらもパクのことを「韓国人」あるいは「外国人」であると位置づけている場面であると考えられる。言い換えると、自己と他者の双方が「韓国人」あるいは「外国人」とパクを位置づける場面においてはそれを構築させるという戦略を持つようになったのではないだろうか。

高(2010: 39)では接触場面の参加者を考える指標として母国での言語習得と現在の言語使用を挙げており、単一言語社会社会である出身国の言語環境を受けているとされる韓国人の場合は、①母国で断言語話者で、日本でも日本語だけを使うモノリンガルタイプと、②母国で単言語使用者で、日本で母語と日本語を使用するモノリンガルタイプが多いことを指摘している。また韓国人であるKRの言語バイオグラフィーの分析から、特に①のモノリンガルグループに属する者にとっては、日本での接触場面は常に自己を抑制した、相手言語である日本語を受け入れる形での参加となることを指摘している。この指摘は片言ではない日本語の習得を目指していた、あるいは日本語を使用する際には「猫をかぶる」というパクの語りとも共通していると言えるだろう。一方で、高(2010; 2014)ではネットワークの拡大によってモノリンガルな言語習慣からバイリンガルな言語習慣へと変化していく過程について分析されており、この点についても、韓国語ボランティアというネットワークの拡大を図ったパクと共通している。このように考えるとパクは①のモノリンガルタイプから②のバイリンガルタイプへと移行する過程にあるとも考えられる。高(2010)は事例分析

から KR が多様なネットワークを持つようになった理由として、KR が自己の存在や所在をはっきりと外国人コミュニティとして位置づけたことを挙げている。パクの韓国人という蓄積アイデンティティには現在揺らぎが生じているが、今後自身をどのように位置づけていくかによって、パクのネットワークや言語使用にも変化が見られると考えられる。

5.5 チャドの語りにおけるポジショニングの分析

チャドは、自身がブラジル人であると考えていることを報告しており、また自分らしい行動をするという意識を持っている。そのような自分らしい行動をしていくうえでトラブルが生じた際には、それを交渉し、自らの望む行動を勝ち取っていくことが語られている。一方で、これらの交渉をうまく進めていくためには自身の意見をきちんとした日本語で述べる必要があると考えており、そのためのツールとして日本語を学ぶ必要があり、またそれが日本語学習のための動機ともなっていることが報告された。以下、チャドのインタビューを見ながら遂行的アイデンティティ構築の原則を分析していく。

5.5.1 語りの分析

(1) 職場での行動についての語り

次の断片は IR によってされた、まわりの人から外国人、あるいはブラジル人として扱われていると感じることがあるかという質問に対して語られた返答の一つである。ここでは、チャドが職場において、外国人らしい行動をとることがあり、職場では少なくとも表面上ではそれが許容されていることが語られている。

インタビュー断片 15:

1	チャド	いや、する、するかもしれないけど:、あの::、逆に hh、外国人だから気にしてない、普通日本人が気にしているところは私はぜんぜん気にしてない
2	IR	あ::
3	チャド	はいお先に失礼します全然、失礼じゃないと思ってるもう時間だから
4	IR	はい、なるほど h
5	チャド	言うんだけど:、ん::あの::重く感じない
6	IR	ん::なるほど
7	チャド	それはどうやって相手が、私のこと考えてるは悪いかもしれない、全然仕事してね:じゃんって、思うかもしれないけど
8		(1.5)

9	IR	hh 気にしない h
10	チャド	気にしてない hhh、ぜんぜんどうでもいい hh,なんでも考えてもいいって
11	IR	ん:::
12	チャド	いいかどうか分かんないけど::、一応そのスタンスで、自分が今日:、今日それやろうとしてて:やって:帰ります
13	IR	なるほど、いいですね hh
14	チャド	h だからたぶん、いいと思ってる人いるし:よくないと思ってる人も:少なくは h ない
15		と思う
16	IR	まあその、自分たちのやりかと違う
17	チャド	ん:
18	IR	まあそれはそれで、合わせる必要がないと、思ってるんですよね
19	チャド	合わせられない hhh
20	IR	hh
21	チャド	もちろん必要があると:、遅くまでやりますけど:(1.0)必要性感じないからしない
22	IR	なるほど

まずチャドは、外国人として扱われているかもしれないということをはじめに述べ、一方で自分はそれを全く気にしていないことを語る。さらに日本人が気にすることは、自分は気にしていないと語り(L1)、日本人と外国人である自分を対象化させることによって語りを行っていつている。具体的には、他の人よりも早く帰ることを全く失礼なことでは無く当然なことだと考えていることが語られ(L3)、「お先に失礼します」とは言うがそれが本当に失礼なことだと考えていないことを明かしている (L5)。そして、まわりの日本人からは仕事をしていないと思われるかもしれないが、それは自分にとっては気にかけるようなことではないということが述べられる (L7、L10)。さらに、それが自分の基本的なスタンスであることが述べられており、またその日にやると決めた仕事は終わらせていることを述べ(L12)、そのスタンスを他の人たちにあわせることはできないということが語られている(L19)。

レベル 1

この断片でチャドは、自身を外国人として、そして職場の同僚を日本人として対象化させることによって、チャドが日本人の習慣に合わせる必要がない、あるいは合わせられない者として行動する様子が語られている。すなわち職場では他の日本人よりも「お先に失

礼します」と言って先に退勤しており、それを言うときでも、本当は失礼なことだとは思っていない。この場面でのチャドは、職場の他の日本人とは異なり、先に退勤することを「気にしてない」のである。すなわちここでは他の人よりも先に帰ることを気にする「日本人」と気にしない「外国人」としての行動が示されているとすることができるだろう。他方、チャドはそのような自身の行動に対して否定的な評価を持っている人もいるかもしれないと語っているが、それは逆説的に、直接それを示されたことがない、ということの意味している。すなわち、チャドは職場内において、日本人とは異なった振る舞いをするのが、少なくとも表面的には許容されているとすることができるだろう。

このように、日本の社会文化的規範からは逸脱した行動をとる一方で、チャドは同時に退勤時には「お先に失礼します」と述べるのが語られている。すなわち、相互行為上においては、日本の社会言語規範に合わせた行動を行っているようである。

レベル2

すでに述べたようにこの断片は、まわりの人から外国人、あるいはブラジル人として扱われていると感じることがあるかという IR の質問に対する回答として産出されている。しかしレベル 1 で見てきたように、ストーリーの登場人物が相互行為上で「外国人」として位置づけられたことが語られているわけではない。すなわちチャドが自身の行動のうち、まわりの日本人と異なっており、外国人だと思われる可能性があるものを語ることになる。事実、チャドは他の日本人からの評価については、「(行動を)するかもしれない」(L1)、「思うかもしれない」(L7)、「たぶん」(L14)などと推測のモダリティ表現を使用して、それらが予想であることを示している。職場の場面においてその行動を行うときに、チャドがその行動を「外国人」のカテゴリーと結びつけた行動として考えているかは定かではないが、少なくとも職場の他の日本人からはそれを指摘されてはいない。すなわちこの断片での「外国人」としての位置づけは、職場における実際の位置づけではなく、インタビューに示している位置づけであると考えられる方が妥当であろう。

(2) 職場での肯定的な評価についての語り

チャドは断片 15 において、自身の異なる行動が「外国人」としての行動なのかどうかについては明確には述べられておらず、また他の日本人からの位置づけについても語られていなかった。一方、日本人と異なる行動が肯定的に評価される場面について語られることもあった。次の断片を見てみたい。

インタビュー断片 16:

1	チャド	逆なんだけど、あの、失敗か失敗じゃないかはあんまり気に、しない私ね、とりあえずやる
---	-----	---

2	IR	ん::
3	チャド	失敗なったらまあ失敗で:、やってみた失敗ですから
4	IR	ん:
5	チャド	できる限り:こうよく考えてよくやって、それ以上は、もうで-できない というか、それ以上はもうかh、かhのhうではないから、一応やります
6	IR	はい
7	チャド	でやって、いいでしたり悪いでしたり、けど一応やる、というのはもう、 あそれはよくやってるねって言われたことはある
8	IR	ん::
9	チャド	あの、普通日本人はそれやってない
10	IR	あ:なるほど
11	チャド	あの考えすぎというか、あのん::まあけどこうやったら:、失敗だったら:、 あの上司はどうやって、思う俺の事とかね、こうあの、考えすぎでやらない
12	IR	ん:なるほど
13	チャド	で考えずにやる、失敗かどうかは()、やってみて意外と、すむんじゃないかなという、まあ印象があってそれ、日本人と違うんじゃないかなって自分が思ってる
		[中略]
21	チャド	で周りには、そのやってみよう文化は:なかなかないという
22	IR	ん::、それであのなにか、言われたんですか↑、上司か
23	チャド	ん:、ん上司、まあいいこと、まあ、ほめられたことがあります、あの、あ: いいですねそれ、やってみようって
24	IR	じゃあ逆に、プラスなこととして
25	チャド	ん::、違うけどいいかなって

この断片も断片 15 同様、IR がまわりの人から外国人、あるいはブラジル人として扱われていると感じることがあるか、という質問に対して語られた返答の一つである。この断片でも、職場におけるチャドの習慣的な行動が語られている。そこでは、チャドが失敗を恐れずになんでもやってみるということが語られており(L1、3、5、7)、さらにそれが褒められたということが述べられている(L7)。そしてそのやってみるというチャドの習慣はここでも日本人と対象化され(L9、11、13)、日本人にはやってみるという文化が無いことが語られる(L21)。そして上司にそのやってみるという文化が褒められた経験が語られている(L23)。

レベル1

この断片では、自身の行動が上司から褒められている場面が語られている(L23)。自身の行動というのは、失敗かどうかを気にしないでやってみる、という行動である。断片15と同様に、これは自身の職場での習慣として語られているが、この断片ではその習慣が上司によって肯定的に評価されているという点において異なっている。特に断片15での、自身の行動が否定的に評価されているかもしれないという語りとは異なり、直接的に肯定的に評価されている場面が語られているという点において対照的であると言える。チャドにとっては、上司による肯定的な評価が、断片15における否定的な評価の可能性よりも重要な出来事として蓄積されているのであろう。

レベル2

この断片において語られているのは、上司に褒められたという経験であり、それが日本人とは異なる行動であるというのは、あくまでもチャドの考えである。断片15と異なるのは、チャドが自身の行動を直接的に「外国人」、あるいは「ブラジル人」の行動として位置づけている点である。すなわち、よく考えた後にやってみるという行動が、「日本人はそれやっていない」(L9)行動であり、「日本人と違う」行動であると「自分が思ってる」(L13)ことが示されているのである。さらに、やってみるという行動は「文化」であると述べることによって(L21)、より明確にされている。一方で、チャドがL23において、自身の「やってみよう」という文化が上司に褒められたという語りは、L22におけるIRによる質問によって誘発されているように見える。しかし、L7の時点でチャドはすでに「よくやってるね」と上司から言われた経験を語っており、自身の行動が肯定的に評価されたことを自発的に語っている。すなわち、L23におけるチャドの語りは、一度語ったことに対してされたIRの質問に答える形で産出されているのである。そのため、L7よりも直接的に、上司に「ほめられた」と語っているのであろう。

他方、より明確に「外国人」あるいは「ブラジル人」らしい行動を語っているこの断片においても、他の参加者、すなわち外国人として扱われたとは語られていない。これらのことから、チャドが職場で外国人として扱われることが無い、あるいはあったとしてもそれを大きな問題として捉えていないと言うことができるだろう。また、断片15と同様、この断片においての「外国人」としての位置づけも、職場における実際の位置づけではなく、インタビュアーに示している位置づけであると考えられる。すなわち、チャドは異文化環境であっても、少なくとも職場においては他の参加者から「外国人」として位置づけられることなく、自分らしく行動することができているのである。

(3) 休暇申請に関する語り

一方チャドが全く自由に、自分らしく行動しているというわけではない。次の断片では、

日本との文化的な差異によって問題が起きた場面におけるチャドの交渉の様子が語られている。

インタビュー断片 17:

1	チャド	まああの、あるじゃないですか休みの取り方は、なかなかおかしいねこの国
2	IR	ん::まあ確かにおかしいかもしれない hh
3	チャド	お、おかしい、自分が思うね、あの::ドドイツもブラジルも、まあアメリカはどうか分かんないけど、ちょっと長くしていくんじゃない
4	IR	ん::アメリカもそうですね
5	チャド	ん::、二三週間は:
6	IR	うん、まとまった休みを
7	チャド	するんじゃない、別におかしくはない、ちょっと三週間、どっか行きます、なかなかないねここ
8	IR	ないですね
9	チャド	でも:実家帰るときは、三週間がないと別に動きたくない、地球の反対側まで行って:二日かかるのに::、一週間で戻る、
10	IR	たしかに、それはちょっと
11	チャド	なかなか、ないじゃん、で初めて::ブラジルに戻ったとき、日本来てから二年間なんです、初めて行ったときに、上司とその、会話があつて、でやっぱり長いって感じる、それはちょっと::、じゃあどうしましょっか、もう実家に帰れないわけ、で::まあ納得させたっていう h
12	IR	あ::そう hh, じゃあ三週間休めたんですかそのとき
13	チャド	休めました、休めました
14	IR	お::、じゃあまあ、できるんですね一応
15	チャド	できるってのはできる、まあたぶん::慣れてきたというか、あの最初は::(1.5)え、そんな長く休むのって言ってたんだけど、まあどんどん簡単になってきた、気がするね
16	IR	あ::毎年
17	チャド	毎年ね、ん:長く休む、一応:一日とか、はなかなか休まない、休むときは長く休む、というスタイルを伝えて、まあ納得させたという、ん::まあ納得してくれました
18	IR	お::それはでもよかったですねじゃあ

この断片は、日本文化の文化について、特にチャドが自文化との違いについて語ってい

る時のものである。チャドはまず、日本企業の休みの取り方がおかしいことを述べ(L1)、比較としてドイツやブラジルでは2、3週間のまとまった休みを取ることが普通であることが語られる(L3、7)。さらに、チャドが実家であるブラジルに帰るためには、ある程度まとまった休みが必要であることが主張される(L9)。そして、来日後に初めてブラジルへ帰国使用としたときの経験を語り始める。チャドは実家に帰るために3週間の休みをとろうとするが、上司は難色を示している(L11)。するとチャドは、上司と交渉をし、納得させて休みを取得することに成功したことが語られている(L17)。

レベル1

ここでは職場において、休暇の申請を行うチャドと、その上司とのやりとりが小さなストーリーとして語られている。日本からブラジルに渡航する場合には二日かかるため、チャドは帰国のために3週間ほどの休みが必要であると述べている(L9)。しかし、チャドが実際に休暇を申請すると、上司は「それはちょっと」(L11)、あるいは「え、そんな長く休むの」(L15)と難色を示しており、チャドが3週間の休暇を取得することに対して否定的な態度をとっている。チャドはそれに対して、はじめは「どうしましょっか」、あるいは「実家に帰れない」と休暇を申請した理由を述べるなどし、休暇の取得が認められるように交渉を行っている。特に興味深いのは、休暇を取得する際のスタイルに言及して交渉を行っている点である。ここに至るまでの語りにおいて、チャドはドイツとブラジルを例に挙げ、2-3週間のまとまった休みを取得することが「おかしくはない」ことだと主張している(L7)。この「おかしくはない」という主張は明らかにL1における自身の、「この国」、すなわち日本の休みの取り方は「おかしい」という発話と対象化されているだろう。すなわち、L17における「休む時は長く休む」というスタイルは「日本」と対照的に示されている「ブラジル」あるいは「ドイツ」のスタイルであると考えられる。ここでも上司がチャドをどのように位置づけていたかは明確にはされていないものの、実家であるブラジルに帰るためという理由づけや、ブラジルあるいはドイツのスタイルであることを上司に示していることなどから、自身を「ブラジル人」あるいは「外国人」として位置づけて相互行為を行っていると言えよう。言い換えるならば、休暇の許可を得るために、自ら自分を日本のルールに縛られない「外国人」あるいは「ブラジル人」として位置づけて交渉を行っているのである。そしてこれは成功し、上司を「納得させ」ることができているのである。

レベル2

このような位置づけは同時に、IRに対しても行われているように見える。すなわちこの断片における一連の語りは、チャドが自身の行動を正当化し、IRから共感を得られるように構成されているということである。まずチャドは日本の休みの取り方はおかしいという自身の意見を主張しているが、IRは「おかしいかもしれない」と言葉を濁しており、チャ

ドの言葉を格上げしておらず、同意を示してはいない(Pomerantz, 1984)。すると続けて、ブラジルやドイツではまとまった休みを取ることが通常で「おかしくない」ことであることを述べる。ここでさらに、「アメリカはどうか分からない」と述べることによって、自身を「ドイツ」もしくは「ブラジル」の者として位置づけると同時に、IR に対して「アメリカ」の者としての位置づけを試みている(L3)。IR はどの位置づけを受け入れ、アメリカもドイツやブラジルと同様であることを述べる。さらにL5 から L7 にかけて「2, 3 週間はまとまった休みをする」と発話を共同で構築していくことにより、アメリカ、ドイツあるいはブラジルを合わせて外国人カテゴリー集合(赤羽 2017)として再構築している。すなわち、休みの取り方がおかしい「日本人」対、おかしくない「外国人」という位置づけがお互いによってなされたのである。ここからは、より現実的な問題として、自分の実家に帰るためには 3 週間程度の休みが必要であるという主張を行う。すなわち、まとまった休みは自分の文化では通常のことであって、かつ必要であることを述べてその正当性を確保しているわけである。このようなチャドの主張に対して、同じカテゴリー集合に属するものとして、IR は「ないですね」(L8)、「たしかに」(L10)、と同意を示しており、最終的にも「それはよかった」(L18)と共感を示しているであろう。

この断片では、チャドが異なる文化を持つ者として自らを位置づけることによって、上司を納得させるというストーリーが語られており、それは IR からも共感が得られるように論理的に構成されていた。インタビューでは、交渉は頻繁に行われていることが報告されており、チャドは自分が自分らしく行動するために、自分が不自然だと感じる事柄については他の参加者と交渉し、自らの望む行動を勝ち取っている様子がうかがえる。一方チャドはインタビューで、チャドはディスカッションを日本語でするためには自分の意見をストレートに言う必要があり、日本語ではまだ難しいという意見を語ることもあった。すなわち、自らの望む行動を勝ち取るための交渉をより有利に進めてくためには、日本語で自分のストレート意見をストレートに言う必要があると感じており、これがチャドの日本語学習のための動機の一つとなっていると考えられる。

(4) 上下関係が強い場面についての語り

他方、チャドにとって日本語は、会社という組織に貢献し、望ましい評価を得るための手段であることが報告されている。この断片は、IR がチャドに対して来日してからの日本語学習について質問の流れの中で語られたものである。チャドは来日当初を振り返って、日本語ができなかったために経験した困難さ、そしてそれがモチベーションとなって日本語学習に取り組んだことを語っている。そしてさらに、日本語は職場でのほかの参加者にいい印象を持ってもらうためのツールだと述べている。

インタビュー断片 18:

1	IR	職場で、日本語、その日本人の人が多くなって言っていましたけど、どうですか、大変だったんじゃないですか
2	チャド	大変でした、大変でした
3	IR	ん::
4	チャド	そのほんとに汗かいたです
5	IR	ん::
6	チャド	その、いろいろ聞くんじゃないですか、日本って::、その先輩後輩上司、あの部下ってすごい、強いじゃないですか、それを聞くじゃ
7	IR	ん:
8	チャド	で::表現のできない、私をあの:、structure がすごい強いところ、にいれると:すごい汗かくんですよ
9	IR	hhh
10	チャド	失礼なこ k-こと言いたくないわけね
11	IR	はいはいそうですね:
12	チャド	あの:いい印象残してほしいけど、ツールがないと、汗かくしかない
13	IR	hhh なるほど
14	チャド	でも:それもモチベーションになるんじゃないですか
15	IR	なるほど、勉強の
16	チャド	勉強の
17	IR	なるほど:
18	チャド	必要だからね、あの勉強しないと、どうする↓、ってなあって、最初の一年間はめっちゃくちゃ勉強した、ほんとに日本語勉強 sh::、しかない、ほんとに毎日

IR がチャドの職場で日本人が多いので、日本語の学習歴が短い時は日本語でコミュニケーションをとるのは大変ではないのかと確認を求めると(L1)、チャドは、それに確認を与える(L2)。さらに続けて日本語でコミュニケーションをとることは、どのように大変なのかを述べ (L4)、さらに詳細に語っていく。チャドにとって、日本では先輩や上司と部下の関係は強固なものであり(L6)、彼らに対して失礼なことは言いたくないと考えていることを明かす(L10)。そしてそれが日本語の勉強のためのモチベーションとなっており(L14)、特に来日してからの1年間は必死に勉強していたことを語っている(L18)。

レベル 1

ここで語られるストーリーでは、チャドと先輩、もしくは上司が登場しており、チャド

は彼らにいい印象を残すために、必死に汗をかいている様子が語られている。ここでは「先輩」や「上司」に対して、チャド自身は「後輩」、もしくは「部下」として位置づけられている(L6)。さらにストーリーの登場人物であるチャドは「上司」対「部下」、もしくは「先輩」対「後輩」が参加する場面は、「structure がすごい場面」(L8)であることを場面に参加するよりも前に聞いており、知っている(L6)。そのため、失礼なことを言いたくない(L10)、すなわちいい印象を残したいと考えている(L12)。しかし、同時にそのためのツールをチャドは持っていないため、「汗をかく」ことでこれを達成しようとしているのである。注意すべきなのは、チャドがこの語りで問題にしているのは、あくまでも職場における「上司」や「先輩」に対する言語使用であり、「外国人」の「日本人」に対する言語使用ではないことである。

レベル2

レベル1で分析されたような「上司」対「部下」、もしくは「先輩」対「後輩」強い関係性に対する理解は、チャドが聞いてきた、また実際の経験によって培われており、社会的通念として理解しているといえよう。このよう社会通念は、チャドの職場において「汗をかく」という苦労の物語として語られており、明らかに L1 における IR の確認に向けられている。またすでに述べてように、これはチャドが来日してからの日本語学習に関する IR の質問の流れの中で語られた断片であるが、これは L15 の IR による確認の求めに現れていると言えよう。すなわち、チャドは L14 では「モチベーションになる」としか述べておらず、何のモチベーションになるかについては触れていないにも関わらず、それが「勉強の」モチベーションになると解釈して確認を求めているためである。実際に、IR の解釈は正しいことがチャドによって確認されている。

一方でチャドはこのような職場での苦労から脱却するためのツールとしての日本語に言及している。そして、チャドにとってはそれが来日1年目に日本語の勉強しかしてない(L18)というほど日本語を勉強するためのモチベーションとなっていたのである。なお、インタビューの別の箇所ではこの学習はビジネス日本語を中心とした日本語学校で学んだことを報告している。また、インタビューでチャドは、繁忙期には会社の役に立ちたいが、日本語で自分の意見を簡潔に言うことができなければ相手はそれを聞いてくれないので自分の意見を伝えることもできないとも語っている。すなわちチャドにとっては、「いい印象を残す」、言い換えれば上司から肯定的な評価を得るための手段として、日本語を学んでいるということができるだろう。チャドは来日して1年目は日本語の勉強しかしてないというほど、日本語学習に力を入れていたものの、現在はそれほどには力を入れていないことを語っている。他方、現在は友人との会話で日本語を学ぶことが多いとも語っている。

5.5.2 チャドの遂行的アイデンティティ構築の原則(レベル3)

ここまで、インタビューでのチャドの語りを分析してきた。本節ではここまで分析してきたことをまとめ、チャドの遂行的アイデンティティ構築の原則を分析してみたい。

チャドはインタビュアーである IR に対しては、外国人だと扱われうる行動を語ることによって「外国人」という位置づけを示していたものの、職場においては直接外国人として扱われたという経験は語られなかった。またそのような行動をとっていた場合にも、職場の他の日本人からは否定的に評価されうるとしながらも、直接は否定的な評価をされることも無かった。むしろ、「やってみる」という他の日本人にはない文化を実践することにより、上司からは肯定的な評価をされていることが語られていた。これらのことから、チャドは職場において周りの日本人の規範に合わせることなく、自分自身の規範に従って行動することが可能となっていると言えるだろう。これはすなわち、異文化環境で生活をしていても、自身の遂行的アイデンティティ構築の原則を大きく変えること無く生活することができているということでもある。断片 15-17 においてはこのような原則を「外国人」と判断されうる行動として語っていたものの、このような立ち位置はインタビュアーに向けられており実際の場面においてはこれらの行動によって「外国人」と位置づけられることは無かった。すなわちチャドは、「日本人とは異なる行動」や「ブラジル人らしい行動」ではなく、「自分らしい行動をする」という原理を持っているということができよう。

そしてこのような自分らしい行動が他の参加者に認められない場合には、交渉を行い、自身の行動の正当性を勝ち取ろうとすることも語られた。これは、自らの望む行動が否定的に評価される、あるいは阻害される場合には、「自分らしい行動をする」という原理に従って、相手と交渉を行うというチャドの戦略として考えることができるだろう。このように考えると、「自分らしい行動をする」というチャドの原理はより広い場面に適用されるマクシムとして考えることができるだろう。

断片 17 においては、「自分らしい行動」をとることを上司に納得させるために、「ブラジル人」としての自分の休暇のスタイルを伝えることによって交渉を成功させた経験を語っていた。チャドにとっては、「ブラジル人」であることは「自分らしい行動」を他者に認めさせるためのリソースとして、すなわち交渉を有利に進めるための材料として考えられていると言えよう。そしてこれは相互行為を通して、何らかの形で自身の外国人性、あるいはブラジル人性を顕在化させることによってなされている。すなわち、外国人性、ブラジル人性を明かすことをルールレベルで保持していると考えられるだろう。

他方、断片 18 では職場で上司や先輩にいい印象を持ってもらうツールとして日本語を学んだことが語られていた。チャドにとって日本語は、会社という組織に貢献し、望ましい評価を得るためのツールとなっていると言えるだろう。すなわち、職場という限定的な場面においてその場面の規範に合わせて行動するという戦略も持っていることにな

る。これは「自分らしい行動をする」というマクシムからは矛盾しているが、ネウストプニーや村岡が指摘するように、インタビューでは語られていない他のマクシムや決定要因が関わっているためであると考えられる。例えば、ネウストプニー(1989)が述べるような自己利益のタイプからの原理、すなわち上司や先輩に評価されることによって自身の昇進や賃金の上昇などを期待しているために、自分らしくない行動であってもそれを許容していることなどが考えられる。

ここまで分析してきたチャドの遂行的アイデンティティ構築の原則は以下のように示すことができるだろう。チャドは、「自分らしい行動をする」というマクシムを持っている。その自分らしい行動を実現するために、その行動が否定的に評価されたり、阻害されうるような場合に時には自信が「ブラジル人」、「外国人」であることを顕在化させるなどしながら交渉し、自らの望む行動を勝ち取っていくストラテジーを持っている。一方で、職場という限定的な場面などでは、組織の中での自身の望ましい評価を得るために日本の規範に従うこともある。また望ましい評価を得るためのツールとして日本語を学んでおり、それが日本語学習のための動機ともなっている。

5.6 本章のまとめと考察

本章ではポジショニング理論を援用してインタビューのデータを分析することによって、各協力者の遂行的アイデンティティ構築の原則を見てきた。そこでは日本に住む外国人居住者が、相互行為を通してどのような遂行的アイデンティティを顕在化させ、あるいは潜在化させようとしているのかが語られていた。

来日当初から、周りからの期待と、自身の原則が比較的一致していたワンは、異文化接触の程度が小さく、大きな問題が語られることがなかった。また、原則についても大きな変化に関しては報告がなく、比較的安定した原則を保っていた。

ロングやスミスは、幼少のころから日本に住んでいる日系アメリカ人であり、共に日本語や見た目の外来性が小さい。しかし、両者とも法的な身分や名前が引き金となって周囲の人たちから外国人やアメリカ人として見られることを語っていた。このように共通点が多いロングとスミスもアメリカ人であることを潜在化させるとう点は共通であったものの、その他の遂行的アイデンティティ構築の原則については違いが見られた。ロングはアメリカ人であるという意識は持ちつつも、そこに結びついた期待である英語の能力がないことを明かすことによって、自身のアメリカ人性を最小化するようにしていた。スミスは、事実として日系アメリカ人であることは認めるものの、蓄積アイデンティティとしては個人としての意識を持つようになった。また英語に関しても、アメリカ人に結びついた能力ではなく、個人のスキルとして捉え、顕在化させることによって周囲にもその能力が周知さ

れるようになっていた。

パクは限定的な場面では韓国人や外国人として自らを位置付けるものの、自分の望まぬ場面において韓国人や外国人として評価されないために通常は日本人のようにふるまうことによって、韓国人、あるいは外国人性を潜在化させていた。一方で、そのような外国人性は、就職などによって新しい場面に参加するたびに顕在化してしまうため、パクは現在も葛藤しながら生活しているものと考えられる。一方で、パクは自身のネットワークの拡大についても語っており、遂行的アイデンティティ構築の原則は今後も変化していくと予想される。

チャドはワンと同様、比較的大きな問題が語られることがなく、自分らしい行動する意識を持っていた。一方でチャドが自分らしく生活するためには、時には上司など他の参加者との衝突生む可能性があり、何か問題が起きると、交渉によって自身の行動を勝ち取っていることが報告された。またそのような交渉や、職場での望ましい地位の獲得することが、チャドにとっては日本語を学ぶモチベーションとなっている。

本章で明らかになったことは非常に限定的であるが、いくつかを以下に示して本章のまとめとしたい。まず、(1)遂行的アイデンティティ構築の原則にはいくつかのレベルがあり、上位レベルの複数の原理が関係しあって、下位レベルの原理の指針となっている。例えばロングのように、自身のアメリカ人性や外国人性を潜在化させるマクシムと、それらが明らかになった場面ではそれを最小化させるというストラテジーを持っていた。このような自然な相互依存関係のある原理である場合もあれば、チャドのような自分らしい行動をするというマクシムを持ちながら、他のタイプからのマクシムに影響されて職場などの限定的な場面ではその場面の規範に従った言語を使用するという、マクシムとは矛盾するようなストラテジーを持っている場合もある。(2)これらの遂行的アイデンティティ構築の原則は、実際の相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティをどのように表示する/しないのか、またどのように交渉するのか/しないのかを決定する指針となっていると考えられる。詳細は次章で考察するが、例えば4.3.3で分析されたようなロングの「アメリカ人」というカテゴリーの潜在化は明らかにロングのマクシムに基づいた行動であると言える。また、(3)他者から表示、構築された遂行的アイデンティティが自身の原則と異なっていた場合にも、調整は様々な方法で行われうる。例えばチャドのようにその場で交渉して自らの原則と合うような行動を勝ち取ることもあれば、パクのように外国人性の潜在化させるようにつとめるような場合もある。(4)いずれにせよ、新しい原則の構築や、既存の原則の変化は、相互行為を通して他者から表示、構築された遂行的アイデンティティが自身の原則と異なるという場면을繰り返し経験する場合に起こりうる。そのような場面をそれほど経験してきていないワンなどは、それほど大きな変化が報告されていない。一方で、そのような経験を多くしてきたロングやスミスは、自らの蓄積アイデンティティやマクシム、ストラテジーを変化させて、他者から示される遂行的アイデンティティに対応してきてい

るのである。

6章 遂行的アイデンティティ構築の原則に関する考察と仮説

本調査では、日本に居住する外国にルーツのある者を対象に、自然会話データとインタビュー・データを録音して収集した。そしてここまで各データの分析を行ってきた。

4章では自然会話データに対して、相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティのうち、特にカテゴリーに焦点をあてて分析を行った。遂行的アイデンティティは自身だけではなく他の参加者からも表示され、それらが複雑に交差して構築されていた。一方で、文化的なカテゴリーや「外国人」カテゴリーなどは自身の主張を他の参加者に納得させるため、あるいは冗談を言って友人関係を行為するためのリソースとなりうることも指摘した。また、時にはカテゴリーとの距離を示すことによって他の参加者に自分がどういう人間かを示していることを指摘した。

5章では各協力者のインタビュー・データを、ポジショニング分析を援用して分析し、各協力者の遂行的アイデンティティ構築の原則を類型論的アプローチによってまとめた。その結果、遂行的アイデンティティ構築の原則を、蓄積アイデンティティを頂点としてマクシム、ストラテジー、普通規則といういくつかのレベルに分類することができた。一方で、下位のレベルの原理は、複数の上位レベルの原理からの影響を受けており、矛盾しているように見える場合があることを述べた。そして、これらの原則は実際に相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティの表示、交渉の指針となっていることを指摘した。本章では、4章および5章での分析を協力者ごとにまとめ、遂行的アイデンティティと原則の考察を行っていく。そしてその考察をもとに、遂行的アイデンティティの原則に関する仮説を提示する。

6.1 各調査協力者の考察

本節では、遂行的アイデンティティ構築に関する考察および仮説提示の前に、まず各調査協力者の、4章での自然会話データと5章でのインタビュー・データの分析を概観し、主に自然会話データで見られた行動がどのような原則のもと行われていたのかに焦点をあてて考察していく。

6.1.1 ワンの遂行的アイデンティティと原則

ワンは4章での自然会話データにおいて、以下のような分析がされた。まず、①中国語の「言語ホスト」としての位置づけの構築(会話例2)、そして②相手の期待する「外国人」カテゴリーとは異なる外国人としての自らの位置づけ(会話例11)である。本節では5章にお

けるインタビュー・データの分析を交えて、この2点について考察を行っていく。

①中国語「言語ホスト」の構築

インタビューでワンは異文化接触による問題を語る事がほとんど見られなかった。一方で、特に語学学校に関する語りで見られるように、「中国人」として行動することが期待されるような場面では、その期待に添って行動していることが語られていた。4章で分析した会話例2はまさに、中国語母語話者であるワンが中国語非母語話者であるアイによって中国語の言語ホスト、すなわち「中国人」としての行動が期待されていた場面であると言える。すなわち、5章で分析されたような、「中国人」としての行動が期待される場面においては「中国人」としてふるまうというストラテジーが見られた事例として捉えることができるだろう。ワンはインタビューにおいて、ゼミや勉強会では「専門家」としての位置づけを構築させているが、中国語学校以外の場面において「中国人」としての位置づけが表示されたときにどのような反応をするのかについては語っていなかった。一方でそのような位置づけによって大きな問題が起きたというような語りもしておらず、基本的には否定することなく構築させているものと考えられる。

②「外国人」カテゴリーとは異なる外国人としての位置づけ

すでに述べたように、ワンはインタビューで異文化接触による問題を語る事がほとんど見られなかった。一方で4章の会話例11において、ワンは相手からの位置づけである「外国人」のカテゴリーからは距離をとって、自身がどのような外国人であるのかを自ら位置づけていることが分析された。これは4章で分析されたようなカテゴリーの個人化の過程であると考えられることができるだろう。すなわちアイは少なくとも、ワンは太宰治を知らない「外国人」ではなく太宰治を知っている外国人であることを、この相互行為を通して蓄積したことになる。一方でこれは、インタビューでは語られることのない小さな問題、あるいは逸脱を日々経験していることの証左でもあり、少なくとも自分自身の知識に関して、異なる情報が相手から提示されたときにはワンはそれを否定するのであろう。自分に関する情報の調整は、スミスのデータにおいても分析されたており、より詳細な考察はスミスの節で述べることにしたい。他方、この会話例での位置づけがワンにとって大きな問題となり得るかについては疑問ではあるが、現在のところ確定的なことは言うことができない。ただし、ロングやスミスがインタビューで語っていたように、小さな問題であったとしても、それが繰り返されることによって大きな問題へとつながることも十分に考えられる。どのような問題、あるいは逸脱が本人にとって、インタビューで語られるような大きな問題となり得るかについては今後も研究を続けていく必要があるだろう。

6.1.2 ロングの遂行的アイデンティティと原則

ロングは、4章での分析において以下のような分析がなされた。まず、①「アメリカ人」としての位置づけの回避(会話例 7)、そして②「新潟人」カテゴリーの顕在化(会話例 5)である。5章での分析を交えながらこの2点について考察していきたい。

①「アメリカ人」としての位置づけの回避

ロングの会話例では、「アメリカ人」や「外国人」というカテゴリーが提示されることが見られず、このようなカテゴリーの構築は見られなかった。5章で分析したインタビューでは、初対面場面などで「アメリカ人」であることが明らかになった場面についてのストラテジーについては語られていたものの、自身がアメリカ人であることを明らかにするかどうかに関しては、明確には語られていなかった。一方で5章では、自身のアメリカ人性、または外国人性を顕在化させることに消極的で、むしろ潜在化させている可能性について言及した。このことから考えると、会話例 7における「アメリカ人」としての位置づけの回避、すなわちビールを飲んでもらうという目的を達成するためには自身がアメリカ人であることを明かして説得したほうが効果的であるにも関わらず、それをしなかったというロングの行動は、アメリカ人性を潜在化させるというロングのマクシムに従った行動であると考えられるだろう。

②「新潟人」カテゴリーの構築

このような自身の属性を潜在化させるというロングの行動と対照的であったのが、自身を「新潟人」カテゴリーに属する者と位置づけてもつ焼きをすすめるという会話例 5での行動であるだろう。すなわち、ロングは自身の属性について明かさないわけではなく、あくまでも「アメリカ人」という属性を明かさないマクシムを持っていると言えよう。「アメリカ人」以外の属性を明かすことによって、結果的に自身が「アメリカ人」であることは潜在化されているのである。インタビューではアメリカ人性、あるいは外国人性以外の意識について語られることが無かった。そのためこれが、意識的な行動なのか無意識的な行動なのかは定かではない。

一方で興味深いのは、ロング自身は自分のことをアメリカ人であると考えており、事実社会的な身分としてもアメリカ人である点である。実際、インタビューの英語能力に焦点が当たっていない場面においては筆者と自身を同じ「外国人」あるいは「アメリカ人」として位置づけてアドバイスを送ることも行われていた。ただし5章で分析されたようにロングは自身を、英語能力を持たないアメリカ人であると考えているようである。しかし、ロングが経験してきたようにアメリカ人と聞いて多くの人が期待するのは、英語母語話者としての「アメリカ人」であるだろう。そのため、ロングは自身がアメリカ人であること

は潜在化するマクシムを持ち、またそれが明らかとなった時には、ロングはアメリカ人であることを否定するわけではなく、「アメリカ人」と結びつけられる期待を否定するという戦略を持つようになったのだと考えられる。

他方、友人間においてはロングが「外国人」あるいは「アメリカ人」であることが遊戯性のあるいじりの対象となり、冗談としてインターアクションを促進させることがあると語られていた。これと類似する行動はスミスの自然会話データでも見られており、詳細は次節で考察したい。

6.1.3 スミスの遂行的アイデンティティと原則

スミスの4章での分析においては、以下の分析がなされた。まずスミスは、①高い英語能力を持つ者としての位置づけ、また、②「ハワイ人」としての位置づけが構築されていた(会話例14、12)。しかし、③「外国人」というカテゴリーからは距離をとって、自分がどのような外国人であるのかを他の参加者に示していた(会話例4)。一方で、④スミスの外国人性や英語能力は、フルタからは冗談のリソースとして利用される場合がある(会話例12、14)。この4点について5章の分析を踏まえつつ考察していきたい。

①高い英語能力を持つ者としての位置づけの構築

インタビューでスミスは、「日本人」でもなく「アメリカ人」でもない自身が何人であるかが分からなくなるという文化的なアイデンティティの危機をむかえ、職場の先輩の一言によって自分が何人であるかを気にしなくなったこと、すなわち自身のアイデンティティの変容について語っていた。そして、現在はアメリカ人や日本人という枠に縛られない、「自分自身」という蓄積アイデンティティを持つようになったという(断片8)。一方でスミスは、英語使用に関しては潜在化させていないことが語られていた。これに関しては英語能力と自身の「アメリカ人」という属性は関係がなく、個人の能力、あるいはスキルの一つとして理解されているのである(断片12)。このことから、スミスが高い英語能力を持つ者としての位置づけを受け入れることは、「自分自身」という蓄積アイデンティティを持つことと矛盾しないと言えるだろう。英語能力を「アメリカ人」というカテゴリーと結びつけてカテゴリー自体の潜在化をはかるロングとは対照的に、スミスにとっては、英語能力はあくまでも個人の能力として捉えているのである。

②「ハワイ人」としての位置づけの構築

スミスは、自身が日系アメリカ人であることを自ら顕在化させることはせず、基本的には潜在化させている。ところが、自身の外国人性に関わる位置づけがされるとそれを認めて構築させると語っていた(断片9)。断片9では名前をきっかけとして自身の社会的な身分

を認める、すなわち日系アメリカ人であることを明かしているが、ここからは以下のことが考察可能となる。一つは、顕在化させないのは自身の身分のみでありそれにかかわる可能性のある事実については顕在化させることである。断片 9 にそくして言うならば、日系アメリカ人であることは自分からは言わないがそれに関わる可能性のある、そしておそらく関わるであることを経験的に知っているはずの名前を隠したり、偽ったりするようなことはしないということである。別の言い方をすれば「アメリカ人」であるカテゴリーを直接表示することはしないが、カテゴリーに結びつく活動までは潜在化させないとも言うことができるだろう。そうだとすると、ハワイにルーツのある者としての位置づけを構築させた例も理解することができる。すなわち、「ハワイ人」であるということは直接顕在化させることはしないものの、アービーズというスミスの外国人性と結びつけられうる社会的文化的知識までは潜在化させていないのである。これは「ハワイにあんの」というハワイとの結びつけが他の参加者から行われているということからも分かるだろう。この点についても、自身のアメリカ人生、あるいは外国人性と見なされうるビールの情報を伝聞の形で産出したロングとは対称的である言えよう。

③「外国人」カテゴリーからの距離

スミスは会話例 4 において、他の参加者からの「外国人」という位置づけからは距離を取り、異なる外国人として自らを位置づけていた。これはパクの事例と同様に、相手が期待する「外国人」から自身がどのように異なっているのかを示しており、カテゴリーの個人化の過程が見られた場面であると考えられる。一方、ハワイにルーツがある者として位置づけられた際とは異なり、「外国人」というカテゴリー自体も、それと結びついた行動であるハグをするという提案も相手であるフルタからされており、スミスはそのカテゴリーと結びついた行動を修正することによってカテゴリーからの距離を示していた。ここでスミスが「外国人」のカテゴリーから距離を示すことができたのは、結びつけられた行動について優先的に言及できるのは外国人であるスミスだからであるようにも見える。しかしここではそれとは全く異なったやりとりが行われていると考えられる。フルタは「外国人」カテゴリーに属する者の行動規範を述べてそこにスミスのカテゴリー化しようとしており、スミスはそれに対して自分自身の行動規範を述べることによって距離を取っている。すなわちここで焦点が当てられているのは外国人の行動規範ではなくスミスの行動規範なのである。自身の規範に優先的に言及できるのは言うまでもなく自分であるであろうし、事実スミスは自身の行動規範を相手に納得させている。インタビューでスミスは、自分自身の行動規範の調整について語ることはなかったが、相手から示された自身の行動規範が自身の規範と異なっていた場合は、できないような場面を除きそれを調整するのが自然であるだろう。

④冗談のリソースとしての「外国人」カテゴリーの利用

すでに述べたように、フルタはスミスを「外国人」とカテゴリー化することによって提案を行っている。ただしスミスの会話(会話例 4)では、これは冗談として構成されている可能性がある点についても触れた。人は相互行為の相手に関する知識である「あなたに関する知識」を提示することによって、相手をからかうことがある(千々岩 2013)。そうだとすれば、このような場面では一度蓄積した、もしくは個人化された情報をあえて提示することによってからかいを行っていると考えられる。さらに言えば千々岩(2013)は、からかいは相手にとって好ましくない候補⁶を提示することによってなされることがあると述べており、「外国人」としてカテゴリー化されることがスミスにとっては好ましくないことであることをフルタが知っていたとも考えることができる。これはロングがインタビューで語っていた、はしが使えない「外国人」としてカテゴリー化されるというストーリーにも共通しているだろう。ただしこれらの例で好ましくないとされているのが「外国人」として位置づけられること自体なのか、それと結びついた行動であり相手がしない、あるいはできる行動がする/できない行動として提示されていることなのかについては定かではない。しない行動とはスミスの事例におけるハグであり、できる行動というのはロングの事例における箸の使用である。

一方、このようなからかいは、「あなたに関する知識」、すなわち一度蓄積した相手の情報を再度提示する形でしかあり得ない。さらに言えば相互行為の参加者がお互いに、好ましくない候補の提示であるからかいを遊戯性のあるものとして認識するためには参加者間に心理的な結末が必要であり(葉山・桜井 2008)、ある程度のつきあいが無ければ難しいだろう。それゆえ、友人、あるいは親しい間柄での行動として語られていると考えられる。

6.1.4 パクの遂行的アイデンティティと原則

パクは 4 章において、以下の分析がなされた。パクは他の参加者であるアキから「韓国人」として位置づけられていたが、①「韓国人」カテゴリーの構築を拒否し「専門家」として自らを位置づける場面(会話例 11)と、②「韓国人」カテゴリーが構築される場面(会話例 8)が分析された。本節では 5 章での分析を交えながらこの 2 点について考察していく。

①「韓国人」カテゴリーの拒否

4 章で分析されたデータ(会話例 11)において、パクは言語の難しさを比較する際にもう一人の参加者であるアキによって「韓国人」として位置づけられたが、「専門家」という代替カテゴリーを構築させることによって、それを拒否し異なる位置づけを構築させていた。

⁶ 例えば千々岩(2013)では、トマトが嫌いな人に対してトマトサラダをつくる提案をするという事例が分析されていた。

これは、構築されるカテゴリーが「外国人」であったとしても同様であると考えられる。すなわちパクは上下関係等の制約が無いような状況においてはカテゴリーの拒否、交渉、再構築を行っているのである。一方、パクがインタビューにおいて強調していたのは特定の場面において、「外国人」として位置づけられることへ嫌悪感、そして自身が「外国人」であることが露呈しないために自身の外国人性を潜在化させるための努力であった。また、パクは自身が「外国人」であることが明らかになった後についても、アルバイトや職場の場面ではそれを拒否するような場面については語っておらず、嫌悪感を持ちながらも受け入れていたことが推察できる。これは、会話例 11 で行われているカテゴリーの拒否と代替カテゴリーの拒否とは明らかに異なっているが、これには何かしらの制約、すなわち会話参加者間の権力が関係していると考えられる。インタビューで語っていたように、パクが現在「外国人」として位置づけられるのは職場の上司や先輩からであり、いずれも職場での仕事を評価する立場にあり、通常部下はその評価を否定することができない。さらに言えば、近年はそれほど厳格ではなくなっているが、一般的に韓国では職場において地位や年齢などで呼称が決められ、上下関係がはっきりと区別されていることが多い(林・玉岡 2004)ことが関係している可能性もある。いずれにせよ、上司がパクの仕事を評価する際に「外国人」カテゴリーを提示したとしても、パク自身がその場の参加者の属性を「上司」と「部下」のようなカテゴリー対で捉えていたとすれば、パクからはそれを拒否することができず、結果としてディスコース上では「外国人」のカテゴリーが構築されることになってしまうのである。

②「韓国人」カテゴリーの構築

一方で、パクは常に「韓国人」カテゴリーが構築するのを拒否したり、嫌悪を感じているわけではない。インタビューでパクは、韓国語のボランティア教師を行うなど、むしろネットワーク拡大のためのリソースとして利用していることを語っていた。すなわちパクは、自身が「韓国人」として参加すべき、あるいは参加したいと考えている場面においては「韓国人」として参加することに抵抗はないようである。事実、会話例 8 において韓国の英語教育について「韓国人」と位置づけられて質問された際にはそのカテゴリーを構築させて質問に返答していた。すなわちパクは、自身が「韓国人」カテゴリーが構築されてもよいと考えている場面においては、それを構築させているのである。一方で、すでに述べたように、職場などにおいて「上司」と「部下」というような関係性を望んでいる場面において「韓国人」あるいは「外国人」というカテゴリーが持ち込まれることに対しては、それを拒否することができず、構築されることを否定的に評価することしかできないのである。そしてこれはパクが自身の外国人性を潜在化させる原則を持つようになった大きな要因でもあるだろう。すなわち、このような「外国人」カテゴリーの構築を拒否できないような場面を、学生時代のアルバイトなどにおいて繰り返し経験してきたために、パクは

自身の外国人性、韓国人性を潜在化させるという原則を持つようになったのである。

6.1.5 チャドの遂行的アイデンティティ

チャドは4章において、以下のような分析がされた。まずチャドは相手から、①日本語の言語的な知識、あるいは社会文化的な知識を持たない「学習者」としての「外国人」という位置づけがされていた(会話例 1, 3)。また、チャドは相手によって「ブラジル人」(会話例 9)、あるいは「日本語学習者」(会話例 13)であることが蓄積されており、その立ち位置が構築されることも見られた。特に相手による語彙の確認求めという習慣化された言語行動と結びついた②「日本語学習者」としての位置づけはチャドとタカに共通したカテゴリーとして蓄積されており、チャドの日本語学習の機会となっていることを指摘した。一方でチャドは、③自ら自分を「外国人」として位置づけることによって相手に自分の主張を納得させる場面も見られた(会話例 6)。本節では以上の3点について、5章での分析を交えて考察していきたい。

①「学習者」としての「外国人」の構築

チャドは本研究で収集した自然会話のデータにおいて、最も「学習者」である「外国人」として位置づけられ、調整の対象となっていた。そしてそれは言語的な逸脱のみならず、社会文化的な逸脱に対しても行われていた。これはチャドの滞日歴が最も短いためとも考えられるが、それ以上にチャドの日本語学習に関する意識が反映されていることが考えられる。チャドはインタビューで、自身が日本語を学ぶ理由について主に二つを挙げていた。一つは、職場の上司や先輩などに対して失礼なことを言わないためにはもっと日本語を学ぶ必要があること、すなわち職場での昇進や成功のためであり、もう一つは、自分らしい行動を勝ち取る交渉をうまく行うためである。この二つは時として矛盾が生じるものであるが、すでに述べたようにここにはインタビューで語られていない他の決定要因やマクシムが関係しているように思われる。5.5 節で述べたように、例えばネウストプニー(1989)が述べるような自己利益のタイプからの要因などが考えられる。一方で、チャドはインタビューで、以前は日本語学校に通っていたものの、インタビュー時点ではすでにやめていることを語っていた。すなわち、インタビューでは明確には述べられていないものの、チャドの日本語学習の機会、日本語学校での学びから日常における会話での学びへとシフトしていると考えられる。そうだとすれば、チャドが友人と考えているタカとの会話において、タカがチャドに対して日本語を教える行為が頻繁に見られたことにもうなずける。チャドは日本の言語的知識や社会文化的知識を学ぶ場面においては、「外国人」として位置づけられることに抵抗を感じていない。むしろチャドにとって、それは職場での成功や、自分らしい行動をするために必要な、言語や文化の学習機会として好意的

に受け止められているとも言えるだろう。

②他者からの「日本語学習者」としての位置づけ

チャドが日常における会話を、日本語を学ぶ機会として捉えていることは、もう一人の参加者であるタカにも認識されていると考えられる。自然会話データの分析においてタカは、チャドが理解していない可能性のある語が使用された際にはチャドに確認を求め、不理解が示された場合にその語の意味を教えており(会話例 1)、逆に確認が与えられれば説明をすることがなかった(会話例 13)。そしてこのような確認は、両者の間で習慣化していることについても言及した。チャドはインタビューにおいて、会話中において日本語を学ぶことについて、相手が自分の分からない言葉を察してくれるので助かっているとも語っている。すなわち、ある程度関係性を構築した相手との会話において行われることであると考えているようである。逆に、職場の中でこのような日本語を学ぶ機会についての語りはしておらず、友人などの間でのみ行われていることを示唆している。しかし、このような場面で学んだ言語などは、職場での言葉遣いや他の場面での交渉をうまく進めていくために利用されるのであろう。

③自らの「外国人」としての位置づけ

チャドは職場において他の日本人とは異なる「やってみる」という文化が上司によって肯定的に評価されていたことを語っており、チャドにとっては「外国人」らしい行動⁷をすることは職場では許容されていると考えられる。一方で、インタビューにおいてチャドは、職場において上司との交渉時などにも自身が「ブラジル人」であることを利用することを語ったり、他の日本人よりも先に帰ることを正当化する理由として自身の外国人性を挙げている。すなわち、チャドにとって自身が「外国人」あるいは「ブラジル人」であることは、自分らしい行動をするための妨げになっておらず、むしろ時には利用する要素として捉えられていると言えるだろう。そしてこれは職場のみならず、他の場面でも同様である。実際チャドは、タカとの会話において自らを「外国人」として位置づけることによって相手を納得させることも行っていた(会話例 6)。接触場面において「外国人」であることは必ずしも否定的に捉えられるわけではないが(e.g. 吉川 2017)、チャドにとっても「外国人」であることは否定的に評価されること、あるいは「学習者」としての場面を除けば調整の対象となることではない。少なくともインタビューで語られている場面においては、肯定的で利用されうる属性なのである。

⁷ ただし 5 章で分析したようにチャドにとっては、それは「外国人」あるいは「ブラジル人」らしい行動ではなく、自分らしい行動である。

6.2 遂行的アイデンティティと原則に関する考察

ここまで、各調査協力者の自然会話データ、およびインタビュー・データを考察してきた。すでに多くの指摘があるように異文化接触によってアイデンティティの変化は起こりうる(丸井 2012)。しかし本論でも見てきたように、異文化環境に身を置くことが常にアイデンティティの変化を意味しない。ここで問題となるのは、アイデンティティ、特に本研究が対象としている文化的アイデンティティの変化にはどのような要因が関係しているのかである。言い換えれば、どのような相互行為での経験が蓄積されるかによって、アイデンティティの変容に迫られるのかを考える必要がある。4章および5章での分析と、これらの考察を踏まえて、以下の三点に焦点を当てて考察を行っていく。

- i. 遂行的アイデンティティの交渉と蓄積
- ii. 遂行的アイデンティティに影響する権力と社会制度
- iii. 蓄積アイデンティティの変容とアイデンティティ構築の原則の変容

6.2.1 遂行的アイデンティティの交渉と蓄積

本研究では、4章において各協力者の遂行的アイデンティティを分析し、日々の生活においてどのような遂行的アイデンティティが構築されているかを分析してきた。本研究で収集したデータは各協力者が日常的に行っている相互行為のほんの一部であるが、その中でも多様な遂行的アイデンティティをめぐる交渉や構築が分析されたと言えるだろう。まず、ワンは「外国人」という位置づけに対しては距離をとったものの、「中国人」としての位置づけはそのまま構築されており、大きな問題が顕在化することは見られなかった。ロングは、そもそも自身のアメリカ人性を様々な方法によって潜在化させており、同様に問題が顕在化することがなかった。スミスは「外国人」としての立ち位置をからは距離をとることが見られたものの、「ハワイ人」や高い英語能力持ち主としての立ち位置は構築されているのが見られた。パクは「韓国人」としての立ち位置を拒否して「専門家」を構築させる場面と、「韓国人」が構築される場面とが見られた。チャドは「学習者」としての位置づけや、ブラジル人としての認識が構築される場面に加え、自ら「外国人」を表示し構築させている場面も見られた。

これらの分析から、通常ディスコース上に遂行的アイデンティティが表示されたアイデンティティが自身の望むものでなかった場合にはそれを構築させるのか、それとも交渉するのが選択されると考えられる。交渉を行う場合には、パクのように①代替のカテゴリーを提示したり、スミスやパクのように②カテゴリーに結びつく行動を否定して距離を示すことによって行われる。ワンのようにインタビューで大きな問題を語ることがない場合

でも、日々の相互行為を通してこのようなやり取りを行っていることは考えられる。しかし同時に、この交渉が成功し自身の望む遂行的アイデンティティを構築させることができる場合、それはアイデンティティの変化に結びつくような経験としては語られないのである。一方で何らかの理由でこのような交渉が成功しないこともあるだろう。例えばロングがインタビューで「アメリカ人」に期待されるような英語能力を持っていないと語っていたように、カテゴリーに結びつく行動を取ることができないような場合である。このように相互行為を通じた交渉ができないような場面を蓄積させていくと、アイデンティティの変容が起こりうると考えられる。

他方このような交渉は、同じ参加者との相互行為を繰り返すことによって減少していくと考えられる。これは、スミスやパクの事例でも分析されたように、交渉によって自身がどのような人物であるのかを相手が蓄積していくためである。接触場面を繰り返していくことによって習慣化され、逸脱が留意されなくなることが指摘されているが(e.g. 村岡 2010)、これは相手の遂行的アイデンティティが相互行為を繰り返すことによって、相手の蓄積アイデンティティとして理解されるためであろう。これは、カテゴリーと結びついた交渉についても同様であるだろう。すなわち、村岡(2010)が指摘するような習慣化された言語管理は、ある逸脱が様々な場面で繰り返されることによって「非母語話者」や「言語ゲスト」というカテゴリーから切り離され、個人的な行動として蓄積されたものであると考えることができる。

しかし、直接的にカテゴリーが明示されていない場合、相手によって蓄積されるのは、「個人」としての蓄積ではない可能性には注意をしなければならない。すなわち、ある人物の行動が、カテゴリーに結びついた行動としても蓄積される場合もあるだろう。例えば柳田(2013)は、「母語話者」による「非母語話者」に対する情報のやり取りに焦点を当て、接触経験が「母語話者」のコミュニケーション・ストラテジーの学習に影響を与えていると分析している。これは言い換えると、「非母語話者」の行動を経験したことによって、それに対応するかを学習したということであろう。柳田の研究では一つの場面の分析しか行われていなかったものの、ここで学習したコミュニケーション・ストラテジーが他の「非母語話者」との相互行為でも見られるのであれば、最初の場面でのやり取りを個人の行動だけでなく、「非母語話者」に結びついた行動としても蓄積したということになるだろう。

6.2.2 遂行的アイデンティティの交渉に影響する権力と社会制度

ワンやスミス、パクの事例では、自身の望まぬ遂行的アイデンティティ、すなわち「外国人」や「韓国人」というカテゴリーが他の参加者によって示されると、それは交渉される異なる位置づけが構築されていた。一方、パクがインタビューで語っていたように交渉が

できない場面が見られたり、本研究では見られなかったが交渉が行われたとしても失敗し、望まぬ遂行的アイデンティティが構築されるという場合があることは十分に考えられる。例えば 6.1.4 で考察したようなパクが上司や先輩との場面など、参加者の間に何らかの権力関係があるような場面では相手からの位置づけを拒否することは難しいだろう。また、このような交渉は、特にチャドの事例で多く見られた「学習者」などの言語的、文化的なゲストという位置づけにおいても行われにくい可能性がある。これは、西阪(1997; 96)が一般的に日本人は外国人の日本語能力を評価する資格がある、という期待があることを指摘しているように、ゲストの言語的、文化的な逸脱がディスコース上に現れている場合、ホストによる逸脱の判断、もしくは評価が優先されるという期待があるためであろう。参加者の間でどちらが評価をするに関して一般的な期待があるという点において、パクの事例とチャドの事例はよく似ているように思われる。むしろチャドのように日常の相互行為を言語学習の場として捉えていない場合には、「言語ゲスト」のような位置づけも否定的に捉えられる可能性があるだろう。

詳細は次節で考察するが、ディスコース上で構築される遂行的アイデンティティを交渉することが難しい場面が繰り返される場合、自身の想定するアイデンティティとの隔たりを他の手段によって解消する必要に迫られる、すなわちアイデンティティの変容が起きると考えられる。遂行的アイデンティティの交渉が困難な状況は、パクのように参加者の権力関係が影響している場面以外にも考えられる。例えばスミスがインタビューで語っていたように、本人が違うと考えていても自身の属性、すなわちアメリカ人であることが社会的な制度によって定められているような場合などである。社会的な制度によって定められた「事実」に対して交渉はされにくいであろうし、されたとしてもそれが他の参加者からは認められないこともあるだろう。制度によって「アメリカ人」であると定められていることは、少なからず彼らの遂行的アイデンティティやその構築の原則の変容に影響を及ぼしているためである。また、インタビューでロングが出生証明を取り寄せたという語りで見られるように、ディスコースよりもマクロなレベルが自分の遂行的アイデンティティや原則に影響を与えている点も考慮する必要がある。例えば、本研究では語られなかったものの、在日韓国人に対するヘイトスピーチ(e.g. 市川 2015; 井沢 2014)などを見聞きした韓国人が自身の韓国人性を潜在化させることなどが考えられるだろう。

6.2.3 蓄積アイデンティティおよび遂行的アイデンティティ構築の原則の変容

本研究における 5 名の調査協力者のうち、インタビューで文化的アイデンティティの変容について語っていたのはパク、スミス、ロングであり、ワンとチャドからはアイデンティティの変化についての語りはされなかった。ただしここで言うアイデンティティの変化

には、パクやロングのように遂行的アイデンティティ構築の原則を変化させる場合と、スミスのように蓄積アイデンティティを変化させる場合とがあることには注意が必要である。本節では変化についての語り語られた3名、および語り語られなかった2名について考察を行っていく。

アイデンティティの変化について語られた3名に共通するのは、なんらかの理由で相互行為を通じた遂行的アイデンティティの交渉ができなかった、あるいは交渉としたとしても様々な場面、特に初対面場面において望まぬ遂行的アイデンティティが繰り返し構築されていた点である。例えばパクは、ここまでで分析、考察してきたように、職場において自身の想定する職業的なカテゴリーと一致していない「外国人」として評価を受けることを否定的に捉えている。加えてこれは上司や先輩など権力差のある参加者による評価であり、交渉をすることができていない。Ericson(1968=1973: 55)が述べるように、対他関係で問題となる自己/パーソナル・アイデンティティに、「他人が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚」が必要になるとすれば、ディスコース上で構築される遂行的アイデンティティを認めさせることが難しい場合、自身の想定するアイデンティティとの差を他の手段によって解消する必要に迫られる。このように考えると、パクがなぜ自身のマクシムを、外国人性を潜在化させるというマクシムへと変化させていったかを理解することができるだろう。すなわちパクは、学生時代のアルバイトや職場において他の「同僚」と同じカテゴリーで評価を望んでいたが、遂行的アイデンティティの交渉が難しかったために、自身の外国人性を潜在化させるようになっていったと考えられる。パクのアイデンティティの変化と類似しているのがロングの原則の変化である。ロングは自身がアメリカ人であると考えているが、周囲が「アメリカ人」に期待するような英語能力を持っていないと考えている。そのため、できる限り自身がアメリカ人であることは明かさないようにするマクシムを持つようになり、またそれが明らかになったときには「アメリカ人」に対する期待を最小化する、すなわち英語が話せないことを明かすストラテジーを持つようになったのである。西阪(1997)では Sacks(1972a,b)を引用しながら、ある属性、あるいはカテゴリーが常に正しくはあっても、常に適切ではないことが指摘されている。適切でないカテゴリーが提示されたときにそれに対して交渉ができない場面が繰り返されると、適切でないカテゴリーが他の参加者から示されないように事前に調整を行うという原則を持つようになるのではないだろうか。一方で、スミスは自身の蓄積アイデンティティをカテゴリーなどの統合から脱却し、「自分自身」へと変化させるに至っている。これは「日本人」でも「アメリカ人」でもない自身の文化的アイデンティティの危機に直面した際の、職場の先輩による「お前はお前」という一言が強く影響しているものと考えられる。実際、インタビューにおいてもスミスのこの場面における語りはパクやロングとは異なり、苦難、危機、解決という流れが語られた(Plummer, 1995=1998)大きな物語として語られており、スミスにとってそれがエピソード(Denzin, 1989=1992)とも呼べるような人性の転機となっていたこ

とがうかがえる。

パクとロング、スミスの 3 名は、いずれも自身の望まぬ遂行的アイデンティティが繰り返されることによって、蓄積アイデンティティ、あるいは遂行的アイデンティティの原則を変化させていた。この 3 名と対照的なのが、チャドとワンである。その中でも、チャドはとパクはその対照性が際立っている。チャドがインタビューで語っていた、職場で「外国人」という遂行的アイデンティティが構築されていると考えられる場面は、少なくとも直接的には否定的に評価されておらず、また休みを得るために上司に対して交渉をし、それが成功している場面であった。チャド自身が語るように、定刻で退勤することや長い休暇を申請することは、必ずしも肯定的には捉えられていない可能性があるが、事実としてチャドは自身の望むよう行動することができている。また、他の日本人とは異なる仕事のやり方が上司によって肯定的に評価されていることなどを語っており、パクと比較すると、「外国人」らしく、あるいはチャドの視点からすれば「自分」らしく行動することはチャドと職場の他の参加者両者によって肯定的に捉えられている場面に参加していると言えるだろう。また、ワンはインタビューで大きな問題について語っていなかった。これは、主に参加している場面として挙げていた、ゼミや勉強会、また中国語学校などでは異文化接触度合いが小さかったこと、また自身の望まぬ遂行的アイデンティティが表示された際にも、それを交渉することによって自らの望む位置づけを構築することができていることが要因として考えられる。

ワンのように、比較的自身の望むアイデンティティが構築される場面に参加している場合や、チャドのように自身のアイデンティティを他者に認めさせることができる場面に参加している場合は、異文化の中に生活していたとしても、大きな問題は起きず、アイデンティティの変容は起きにくいと考えられる。一方、ロングやスミス、パクのように、自身の望まぬ遂行的アイデンティティが構築される経験を蓄積させる場合には、自らのアイデンティティと、他の参加者から表示されるアイデンティティとの隔たりを解消するために、蓄積アイデンティティを変化させたり、遂行的アイデンティティ構築の原則を変化させることによってなされるのである。

6.3 本章のまとめ：遂行的アイデンティティと遂行的アイデンティティ構築の原則に関する仮説

ここまで、遂行的アイデンティティとその構築の原則に関して考察を行ってきた。本節では 4 章と 5 章での分析と、本章におけるここまでの考察をまとめ、以下の二つの仮説を提示する。

- i. 遂行的アイデンティティの蓄積によるアイデンティティの変化
- ii. アイデンティティの新しい枠組み

6.3.1 蓄積アイデンティティおよび遂行的アイデンティティ構築の原則の変化

ここまでの分析と考察から、本研究で見られた、遂行的アイデンティティの蓄積による、文化的アイデンティティの変化までの過程は以下のようにまとめることができるだろう。

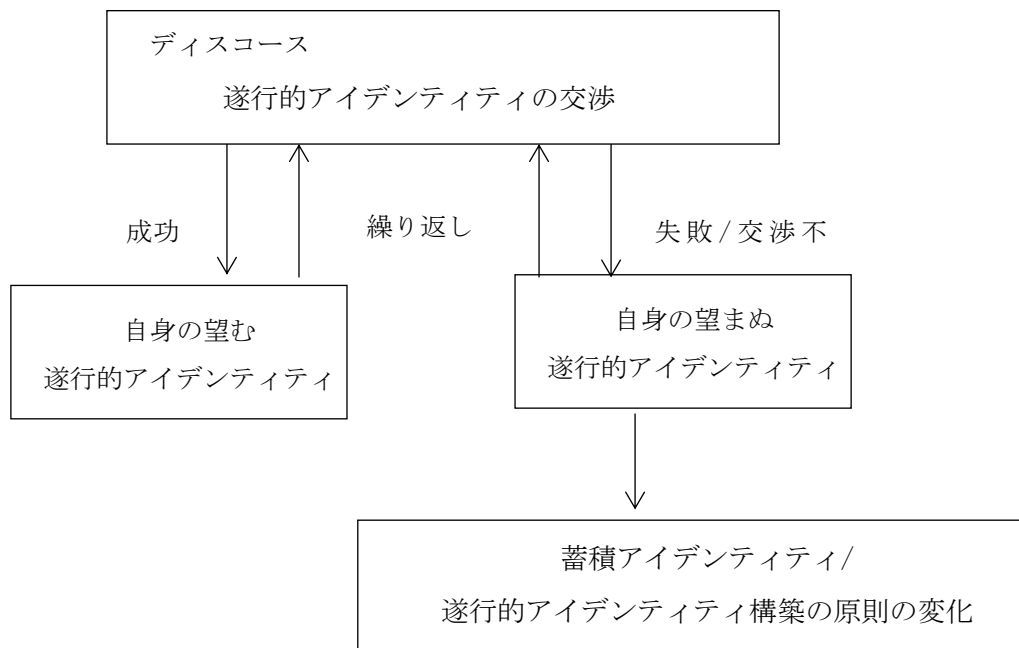


図5：遂行的アイデンティティの蓄積によるアイデンティティ変化の過程

本稿で見てきたように、相互行為を通してなど、ディスコース上に遂行的アイデンティティが表示された時に参加者はそれを交渉するかどうかを選択される。代替カテゴリーの提示や、カテゴリーと結びついた行動から距離を取るなどしてこの交渉が成功すると、自身の望むアイデンティティが構築されることとなる。ここまで見てきたように、本研究ではワンのように大きな問題やアイデンティティ変化についての語りがされなかったり、チャドのようにむしろ相互行為を通して自らの行動を勝ち取るために利用されることもある。一方、交渉が失敗したり、そもそも交渉ができないよう場合には自身の望まぬ遂行的アイデンティティが構築されることになる。交渉ができない、あるいは失敗するという状況とは、パクのように参加者の間に権力があるような場合や、ロングのように表示されたカテゴリーに期待されるような能力を持たないような場合などが考えられる。そして、自身の望まぬ遂行的アイデンティティの構築が様々な場面で繰り返されると、自分と他者によるアイデンティティに隔たりが生じるため、アイデンティティの変化が起こることになる。

このアイデンティティの変化とは、スミスのように蓄積アイデンティティの変化である場合も、パクやロングのように遂行的アイデンティティ構築の原則の変化である場合もあるだろう。

6.3.2 アイデンティティの新しい枠組み

本章の最後に、遂行的アイデンティティ、および蓄積アイデンティティを含む、遂行的アイデンティティ構築の原則についてまとめて、相互行為を通して構築されるアイデンティティについて新しい仮説を提示する。本稿で分析、考察されたアイデンティティは、以下のように示すことができるだろう。

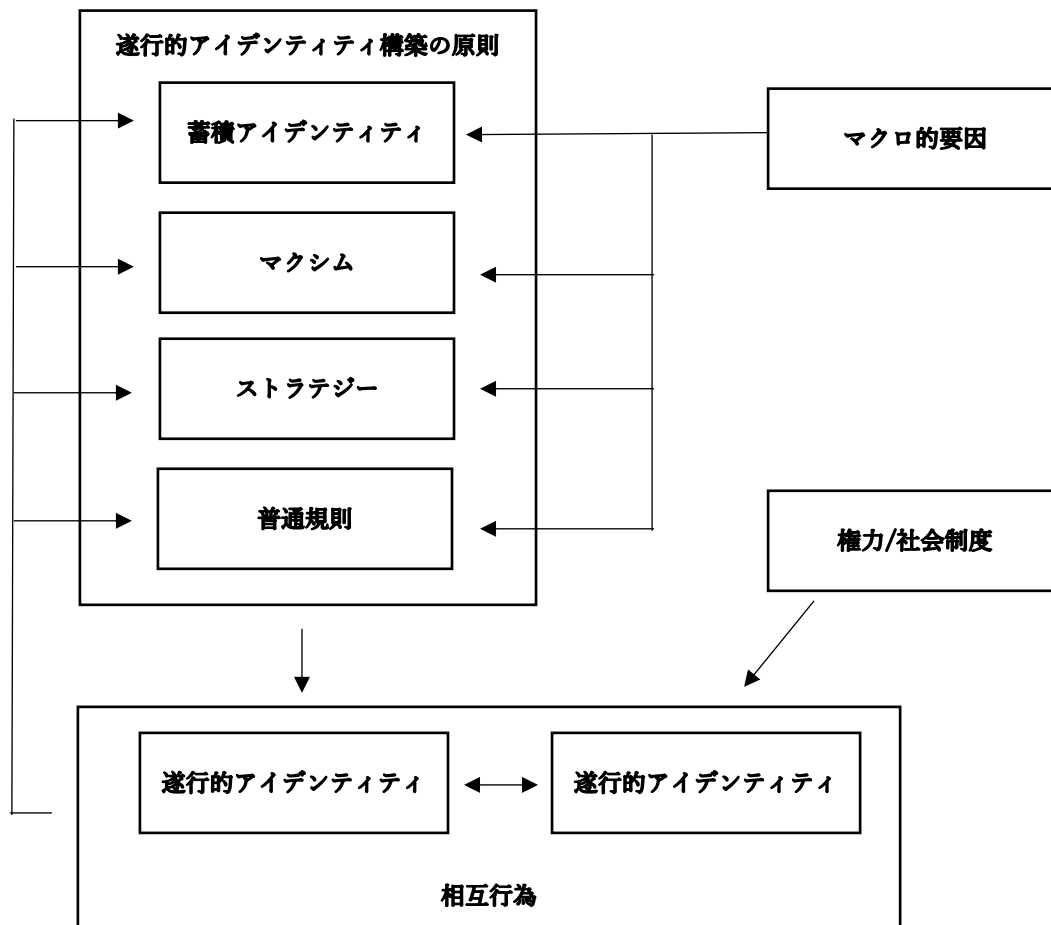


図6：アイデンティティの新しい枠組み

本稿の4章、および5章で分析、また特に本章6.1節で考察してきたように、相互行為を通してアイデンティティを構築する際には、遂行的アイデンティティ構築の原則にもとづ

いて表示、交渉、構築がされている場合がある。また、ロングのように自身の原則にもとづいて遂行的アイデンティティの表示自体が回避される場合もあるだろう。ディスコース上で遂行的アイデンティティが表示されると、交渉されるかどうかを選択される。この際に交渉を行って他の遂行的アイデンティティが表示され、構築される場合もあるが、参加者の間に何らかの権力関係がある場合や、社会制度によって決定されているアイデンティティが表示される場合、また Block(2013)が指摘するように社会的な階級があるような場合など、交渉が起きにくい、もしくは交渉されても他の遂行的アイデンティティが構築されにくい場合もある。これらによって自身の原則にもとづかない、すなわち自身の望まない遂行的アイデンティティの構築が繰り返されると、遂行的アイデンティティ構築の原則に変化が生じる。この変化は、蓄積アイデンティティのみならず、どのレベルにおいても起こりうる。これらのことから、アイデンティティの構築、そして変化はこの循環によって生じるものであると考えることができる。ただし、本稿で分析考察された事例は非常に限定的であり、本枠組みも仮説の域をでるものではないだろう。今後はこの枠組みにもとづいてさらに実証的な研究をしていく必要がある。

一方で、本稿ではあまり扱うことのできなかつたが、変化の要因としてよりマクロなレベルのものも挙げることができる。例えば、スミスやロングのインタビューで分析されたような社会的な制度によって決定されている属性や、6.2.2 で触れたようなヘイトスピーチなどの対面の相互行為よりもマクロなレベルでされるカテゴリーの構築である。これらは、対面の相互行為で構築される遂行的アイデンティティよりも交渉が難しく、蓄積アイデンティティや遂行的アイデンティティ構築の原則に影響を与えていると考えられる。よりマクロなレベルにおける構築が、蓄積アイデンティティや遂行的アイデンティティ構築の原則にどのように影響していくかも今後研究を進めていく必要があるだろう。

7章 本研究のまとめと今後の課題

7.1 本研究のまとめ

本研究ではアイデンティティを、相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティと、それが繰り返されることによって蓄積された蓄積アイデンティティに区分した。さらに蓄積アイデンティティを、遂行的アイデンティティを表示、構築する際の規則や規範を含む、遂行的アイデンティティ構築の原則として捉え、日本に住む外国にルーツをもつ人々を対象に、彼/彼女らのアイデンティティを分析した。そして以下の研究目的を設定し、これらを明らかにした。

- ①：日本に居住する外国にルーツをもつ人々が、どのような遂行的アイデンティティを構築させているかを明らかにする
- ②：日本に居住する外国にルーツをもつ人々が、どのような遂行的アイデンティティ構築の規則、および蓄積アイデンティティを持っているかを明らかにする
- ③：①と②を踏まえ新しいアイデンティティの枠組みの有効性を検証し、ディスコース上でやりとりされるアイデンティティ、および蓄積アイデンティティの変化を捉えるための枠組みを提示する

7.1.1 遂行的アイデンティティ

4章では、収集した自然会話データに対して成員カテゴリー化装置の概念を使って、相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティの一部であるカテゴリーを分析した。これによって、日本に居住する外国にルーツをもつ人々が、相互行為を通して構築させている遂行的アイデンティティの一端を明らかにした。

ディスコース上で逸脱が留意されている場面であっても、「外国人」や「非母語話者」ではなく、「学習者」として、相手を言語や文化を教える者と学ぶ者と位置づけていることが見られた。一方、ディスコース上において留意された逸脱が見られない場合においても、文化的あるいは「外国人」というカテゴリーに自らを位置づけて利用することによって、他の参加者にたいして何かを勧めたり、自身の考えを相手に納得させることも分析された。これらは文化的、あるいは「外国人」というカテゴリーは相手から受動的に位置づけられるものではなく、自ら能動的に利用することのできる属性であることを意味している。また、相互行為を通して構築されたカテゴリーは他の参加者によって蓄積され、別の場面の

ディスコース上で示されうることを明らかにした。一方、ディスコース上で示された位置づけはそのまま構築されるわけではない。参加者は、他の参加者から示されたカテゴリーを否定し、別のカテゴリーとして自らを位置づけていることもある。また、他の参加者から位置づけられたカテゴリーと結びつく活動や期待を否定することによって、そのカテゴリーからの距離を示し、自分がどのような人物であるかを交渉して示している。相互行為の参加者は、このようなカテゴリーの交渉によって示された個人としての位置づけをも蓄積させているのである。他方、蓄積された位置づけは、その参加者の間において、習慣化した言語管理として行使されうること、また冗談を言うためのリソースとして利用し、友人関係を築くなど、参加者の間で特別な意味を持ちうる。ただし、蓄積されたカテゴリーが、その参加者間でどのように利用されているのかについては今後、より詳細な研究が必要とされる。

7.1.2 遂行的アイデンティティ構築の規則、および蓄積アイデンティティ

5章では収集したインタビュー・データに対し、ポジショニング分析を援用することによって語りを分析した。これによって、本に居住する外国にルーツをもつ人々が、どのような遂行的アイデンティティ構築の規則および蓄積アイデンティティ、すなわち遂行的アイデンティティ構築の原則を持っているかを明らかにした。またそこで明らかとなった原則を類型論的アプローチによって分類し、各原理の階層的な関係性を明らかにした。

異文化接触の程度が小さく、大きな問題が報告されなかったワンは、原則についても大きな変化が見られず、比較的安定した原則を保っているものと考えられる。チャドもワンと同様、比較的に大きな問題が語られることがなく、自分らしい行動する原則を持っていた。一方でチャドが自分らしく生活するためには、交渉によって自身の行動を勝ち取る必要があり、それがチャドにとっては日本語を学ぶモチベーションとなっていることを明らかにした。また社会的な属性や名前が引き金となって周囲の人たちから外国人やアメリカ人として見られることが多かったロングやスミスは、アメリカ人であることを潜在化させるというマキシムは共通であったものの、その他の遂行的アイデンティティ構築の原則については違いが見られた。ロングはアメリカ人であるという意識は持ちつつも、そこに結びついた期待を最小化する戦略を持つようになったが、スミスは、個人としての蓄積アイデンティティとしてを持つようになっていた。一方でパクは、限定的な場面では韓国人や外国人として自らを位置付ける戦略を持っているが、自分の望まぬ場面において韓国人や外国人として評価されないために通常は日本人のようにふるまうことによって、韓国人、あるいは外国人性を潜在化させるというマキシムを持っていた。

一方で、これらの分析を通して、遂行的アイデンティティ構築の原則に関して、以下四つのことを考察した。

- (1) 遂行的アイデンティティ構築の原則にはいくつかのレベルがあり、上位レベルの複数の原理が関係しあって、下位レベルの原理の指針となっている。各原理は自然な相互依存関係が見られる場合もあれば、他のタイプからの影響を受けて矛盾するように見える場合もある
- (2) これらの遂行的アイデンティティ構築の原則は、実際の相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティをどのように表示する/しないのか、またどのように交渉するの/しないのかを決定する指針となっている
- (3) 他者から表示、構築された遂行的アイデンティティが自身の原則と異なっていた場合にも、調整は様々な方法で行われうる
- (4) 新しい原則の構築や、既存の原則の変化は、相互行為を通して他者から表示、構築された遂行的アイデンティティが自身の原則と異なるという場면을繰り返し経験する場合に起こりうる

7.1.3 アイデンティティ、および蓄積アイデンティティの変化を捉えるための枠組み

5章での考察に加え、6章では4章と5章での分析を協力ごとにまとめ、さらに考察を行った。そして以下の二点についての仮説を提示した。

i. 遂行的アイデンティティの蓄積によるアイデンティティの変化

ディスコース上に遂行的アイデンティティが表示された時に参加者はそれを交渉するかどうかを選択される。この交渉が成功すると、自身の望むアイデンティティが構築される。一方、参加者間に権力関係が認められるような場合や、カテゴリーに期待されるような能力を持たない場合、また社会的な制度によって自身の属性が定められているような場合には交渉が失敗したり、あるいはそもそも交渉することができず、自身の望まぬ遂行的アイデンティティが構築される。このような自身の望まぬ遂行的アイデンティティの構築が様々な場面で繰り返されると、自分と他者によるアイデンティティに隔たりが生じ、その解消のためにアイデンティティの変化が起こりうる。ここで言うアイデンティティの変化とは、蓄積アイデンティティが変化すること、遂行的アイデンティティ構築の原則内のその他の原理が変化することもある。

ii. アイデンティティの新しい枠組み

一方5章および6章で考察したように、相互行為を通してアイデンティティを構築する際には、遂行的アイデンティティ構築の原則にもとづいて表示、交渉、構築がされている。また、個人の原則にもとづいて遂行的アイデンティティの表示自体が回避される場合もある

る。ディスコース上で表示された、自身の望まぬ遂行的アイデンティティの交渉ができない、もしくは交渉されても他の遂行的アイデンティティが構築されないような場面がこの変化は、蓄積アイデンティティのみならず、どのレベルにおいても起こりうる。これらのことから、アイデンティティの構築、そして変化はこの循環によって生じるものであると考えられる。一方で、本稿では扱うことのできなかつたが、変化の要因としてよりマクロなレベルのものも挙げることができる。社会的な制度によって属性が決定されている場合や、ヘイトスピーチなどの対面の相互行為よりもマクロなレベルでされるカテゴリーの構築である。これらは、対面の相互行為で構築される遂行的アイデンティティよりも交渉が困難であり、蓄積アイデンティティや遂行的アイデンティティ構築の原則にも影響を与えていると考えられる。よりマクロなレベルにおける構築が、蓄積アイデンティティや遂行的アイデンティティ構築の原則にどのように影響していくかも今後研究を進めていく必要がある。

本研究におけるこれらの考察は、Baynham(2015)の主張する遂行的アイデンティティと蓄積アイデンティティ、また本研究が主張する遂行的アイデンティティと遂行的アイデンティティ構築の原則の関係性を裏付けるものであるだろう。すなわち、日常的な相互行為を通して構築されるようなアイデンティティを研究していくためには、ディスコース上で示されるようなアイデンティティに目を向けるだけでは十分ではない。その遂行的アイデンティティがどのような原則もとづいて表示、構築、また交渉されているのかを分析することによって、本当の意味で当人の「アイデンティティ」として理解することができるのである。ただし、本研究は限られたデータを分析した事例分析であり、一般化ができるものではない。遂行的アイデンティティとアイデンティティ構築の原則については今後もさらに研究を続けていく必要があるだろう。

7.2 本研究の意義

本稿で分析、考察された枠組みではアイデンティティを、近年のアイデンティティ研究で流動的、複合的とされてきたアイデンティティを遂行的なアイデンティティとし、さらにその遂行的なアイデンティティが様々な場面で繰り返し構築されて蓄積した、蓄積アイデンティティとした。さらに、遂行的アイデンティティは、蓄積アイデンティティを頂点とする、遂行アイデンティティ構築の原則に基づいて表示、交渉されていることを指摘した。本研究で提示した枠組みによって、日常的な相互行為を通して構築されるアイデンティティに対して新しい視点を加えることができる。すなわちある程度固定的なアイデンティティと、それをどのようにディスコース上で構築させるかという原則を含めることによって、相互行為を通して構築されるアイデンティティが当人にとってどのような意味を持

つかを分析することが可能となる。それに加え、ディスコース上では分析することが困難であって、アイデンティティ表示の回避についても分析できると考えられる。

また、近年の、相互行為における位置取りをアイデンティティとして捉える視点は、グローバル化によって多様化する人々のアイデンティティを捉える上で非常に重要な役割を果たしてきた。しかしアイデンティティを、相互行為を通して構築される複合的で流動的なものとして捉えている以上、縦断的な研究をしなければアイデンティティの変化を捉えることはできない。本研究で示された枠組みならば、本稿でも多少議論したように、異文化接触によるアイデンティティの変化をより正確に捉えることができるようになるだろう。例えば、アイデンティティの変化を、蓄積アイデンティティの変化としてだけではなく、マクシムやストラテジーを含む原則の変化として捉えることにより、遂行的アイデンティティの変化についても分析することが可能となると考えられる。

また、本研究では自然会話の場面と、インタビューという比較的マイクロなデータを分析してきた。しかし、その中で社会構造や権力といった要因が遂行的アイデンティティやその構築の原則に関わっていることが示唆された。すなわち、ディスコース以外の要因、例えば外国人に対する政策のような、よりマクロなレベルの要因がアイデンティティの変化に及ぼす影響も捉えることができるように思われる。

また、本稿で示されたアイデンティティ構築の類型論的なアプローチは、他分野の研究にも応用することが可能であるように思われる。例えば、ネウストプニー(1989)が指摘している通り、文化などに対する社会学的研究にも有効であるだろう。また、本研究においてもパクやチャドの事例で多少触れられたように、言語学習の態度を分析することが可能となるため、第二言語習得とアイデンティティとの関連性における研究にもきよすることができるものであると考えられる。

7.3 今後の課題

以上、本研究で示されたアイデンティティの新たな枠組みを提示し、その応用の可能性を提示した。しかし、本研究は限られたデータを使用した事例研究であり、課題も多く残っている。以下に、残されている課題を挙げていく。

まず、本研究で提示された遂行的アイデンティティ構築の枠組みの、各レベルは今後詳細に検討される必要がある。また、本研究では特に文化的アイデンティティに焦点を当てていたが、これは相互行為を通して構築される遂行的アイデンティティのほんの一要素に過ぎない。本研究でもパクの分析など、職業的なアイデンティティとの関連など一部は指摘されたが、今後は他のアイデンティティとの関連も含めて分析される必要がある。さらに、文化的アイデンティティの構築に限っても、本研究でも見られたように、他のタイプの原理が関係してきている。例えばチャドの例で触れたような、企業での地位獲得などと

関わってくるような自己利益のタイプ(ネウストプニー1989)などである。一つのタイプのアイデンティティであっても様々な要素が関わっており、それらを包括した分析が必要となってくる。

また、方法論的にも大きな課題が残されている。本調査ではインタビューと自然会話の2つの録音データを使用した。特に自然会話のデータを録音する際には、普段から参加する場面という制限をかけており、インタビューで語られた場面とは異なった場面が録音された。当然ながら、これら二つのデータには隔たりがある場合もある。すなわち、インタビューでは問題が生じやすい場面に焦点が当てられ、自然会話では問題が生じにくい場面が録音されていたために、分析を困難なものとする要因となった。このようなデータの収集方法は、様々な場面を比較する場合には有効であるが、インタビューで語られたストーリーを実際の場面に適用して分析することは難しい。今後は、フィールドワークなどを含んだ調査方法を検討する必要があるだろう。

本研究の調査協力者は、比較的日本語のレベルが高く、また日本社会に積極的に参加している者たちであった。日本語の初級レベルの居住者などは、異なった原則を持ち、異なった遂行的アイデンティティが構築されていることも予想される。今後はこのような外国にルーツを持つ人々をも対象とし、様々なデータの分析を積み重ねていくことで、さらなる研究成果が期待できる。

グローバル社会において人々が移動し、その場所で相互行為を行うことによって生じるアイデンティティの変化は、肯定的な面もある一方で、否定的な面も多いように思われる。それらの問題の解決、また軽減のため、今後の研究に本研究が少しでも貢献できることを望んでいる。

謝辞

本論文は私が執筆したものではありませんが、私一人の力ではとうてい完成させることはできませんでした。ご指導、ご協力、またご支援いただいた全ての皆様に御礼申し上げます。

本論文の作成にあたり、また私が修士のころから、長い間ご指導いただいた指導教官の村岡英裕先生には心から御礼申し上げます。時にはご迷惑をおかけすることもあったかと思いますが、あきれずに最後までご指導をいただいたこと、とても感謝しています。また副指導教官である高民定先生と西阪仰先生にも、しばしば相談に乗っていただき貴重な助言をいただきました、ありがとうございました。また、研究の初期段階から何度も私の拙い発表を聞いて、質問やアドバイスを送っていただいた合同ゼミの先生方、並びにメンバーの皆様にも御礼申し上げます。ただし、文責は全て著者にあります。

また、当然のことながら本研究はデータの収集に協力をしてくれた調査協力者なしには実現しませんでした。ここでは名前を挙げることはできませんが、忙しい中ご協力いただきありがとうございます。

本論文の執筆にあたり、時には苦しい時期もありましたが、私生活を含めてはげまし、支えてくれた全ての皆様に、心から感謝しています。皆様、本当にありがとうございました。

参考文献

- 赤羽優子 (2017). 第二言語としての日本語使用者同士のカテゴリー化実践: 第三者言語場面の対称的なやりとりに注目して 国際日本研究, 9, pp. 83-105.
- 浅井亜紀子 (2006). 異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ ミネルヴァ書房
- バルト, F. (1996). エスニック集団の境界: 論文集『エスニック集団と境界』のための序文 青柳まちこ(編・監訳) エスニックとは何か—エスニシティ基本論文選, pp.23-71. 新泉社
- Banberg, M. (1997). Positioning between structures and performance. In M. Bamberg (ed.), *Special Issues Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis, Journal of Narrative and Life History*, 7, pp.335-342.
- (2004). “We are young, responsible and male”: Form and function of “slut-bashing” in the identity constructions in 15-year-old males. *Human Development*, 47, pp.331-353.
- Bamberg, M. and Georgakopoulou, A. (2008). Small Stories as a New Perspective in Narrative and identity Analysis. *Text and Talk*, 28 (3), pp.377-396.
- Batten, P. (小野原信善監訳) (2004). ニューージーランドにおけることばとアイデンティティ—言語の選択と使用を通してみる現代人の帰属意識 小野原信善・大原始子(編著) ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し, pp.151-176. 三元社
- Baynham, M. (2011). Identity brought about or brought along?. International Doctoral Summer School on ‘identity and Interculturality: Research Methods’, 4-8 July 2011 at Roskilde University. (<https://www.youtube.com/watch?v=DffiHFD5z9A>) (2017年2月20日確認)
- (2015). Identity: Brought about or brought along? Narrative as a privileged site for researching intercultural identities. In F. Dervin & K. Risager (eds.), *Researching identity and interculturality* pp.67-85. London: Routledge.
- Becker, H. (1963). *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*. New York: The Free Press. (村上直之訳 (2011). 完訳アウトサイダーズ: ラベリング理論再考 現代人文社)
- Block, D. (2007). The rise of identity in SLA research, post Firth and Wagner (1997). *The Modern Language Journal*, 91(Focus Issue), 863-876.
- (2013). *Social Class in Applied Linguistics*. London: Routledge
- Bourdieu, P. (1980). *Le sens pratique*, Editions de Minuit. (今村仁司・港道隆訳 (1988). 実践感覚みすず書房)
- Bushnell, C. (2014). On developing a systematic methodology for analyzing categories in talk-in-interaction: Sequential categorization analysis. *Pragmatics*, 24(4), pp.735-756.
- (2015). Lost in translation?: On using conversation analysis to examine cross-linguistic data. *Area Studies Tsukuba*, 36, pp.107-126.

- Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York, NY: Routledge. (竹村和子訳 (1999). ジェンダー・トラブルフェミニズムとアイデンティティの攪乱 青土社)
- 千々岩宏晃 (2013). からかひの相互行為的達成: 「あなたに関する知識」を用いた発話のー用法 日本語・日本文化研究, 23, pp.129-141. 大阪大学
- Connolly, W. E. (1991). *identity / Difference, democratic negotiations of political paradox*, Cornell University Press. (杉田敦・斉藤純一・権左武志訳 (1998). アイデンティティ、差異/他者性の政治 岩波書店)
- Cross, R. (2010). Language teaching as sociocultural activity: Rethinking language teacher practice. *The Modern Language Journal*, 94(3), 434-452.
- Davies, B. & R. Harré (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20, pp.43-63.
- Denzin, N. K. (1989). *Interpretive Biography, Applied social research methods series 16*. Sage Publication. (片桐雅隆他訳 (1992). エピファニーの社会学: 解釈的相互作用論の核心 マグロウヒル出版)
- Erikson, E.H. (1959). *Psychological Issues: identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳編 (1973). 自我同一性 誠信書房)
- (1963). *Childhood and Society*, New York: W.W. Norton & Company. (仁科弥生訳 (1977/1980). 幼児期と社会(1・2) みすず書房)
- (1968). *Identity: Youth and Crisis*. (岩瀬庸理訳 (1973). アイデンティティ—青年と危機 金沢文庫)
- Fan, S. K. (1994). Contact situation and language management. *Multilingua*, 13(3), pp237-252.
- ファン, サウクエン (1998). 接触場面における言語管理 日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議録, pp. 1-16. 国立国語研究所.
- (1999). 非母語話者同士の日本語会話における言語問題 社会言語科学, 2(1), pp. 37-48.
- (2006). 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所編 日本語教育の新たな文脈〜学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性 pp.120-141. アルク
- (2010). 異文化接触—接触場面と言語 西原鈴子[編]シリーズ朝倉〈言語の可能性〉8 言語と社会・教育 pp.75-99. 朝倉書店
- フェアブラザー, リサ (2000). 言語管理モデルからインターアクション管理モデルへ 村岡英裕[編] 接触場面の言語管理研究 vol.1 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 pp.55-65. 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- (2003). 場面と外来性-母語話者のインターアクション管理の観点から 千葉大学大学院博士学位論文
- Georgakopoulou, A. (2007). *Small stories, interaction and identities*. Amsterdam: John Benjamins.

- イェルガコポロ、アレクサンドラ (2013). ナラティブ分析 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか pp.1-42. ひつじ書房
- Gergen, K, J. (1999). *An Invitation to Social Construction*. Sage. (東村知子訳 (2004). あなたへの社会構成主義. ナカニシヤ出版)
- 岐阜市ホームページ. 外国人との婚姻届(日本方式での婚姻).
<https://www.city.gifu.lg.jp/6870.htm>(2018年10月30日確認)
- Goffman, E. (1959). *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc. (石黒毅訳 (1974). 行為と演技—日常生活における自己呈示 誠信書房)
- (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (石黒毅訳(2001). ステイグマの社会学: 烙印を押されたアイデンティティせりか書房)
- (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Cambridge: Harvard University Press.
- (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press
- Hall, S. (1989). Cultural identity and Cinematic Representation, *Framework*, 36, 69-81.
- (1990). Cultural identity and Diaspora. In Rutherford, J. (ed.), *identity, Community, Culture Difference*. London: Lawrence and Wishart, pp.222-237. (小笠原博毅訳 (2014). 文化的アイデンティティとディアスポラ 現代思想, 42(5), pp. 90-103. 青土社)
- 春口淳一 (2004). 言語ホストとしての上級学習者の自己調整参加調整ストラテジー—第三者言語接触場面における会話参加の一考察 千葉大学日本文化論叢 5, pp.73-86.
- Hymes, D. (1972). Models of the interaction of languages and social life. In Gunperz, J.& Hymes, D. (Eds.), *Directions in sociolinguistics*. Pp35-71. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 秦かおり (2013). 「何となく含意」の舞台裏—在英日本人女性のインタビュー・ナラティブにみる規範意識の表出と交渉のストラテジー— 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線—人は語ることで何をなすのか—, pp.247-272. ひつじ書房
- (2014). 国外在留邦人が語る東日本大震災:対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する 言語文化研究, 40, pp. 123-142. 大阪大学
- 原田琢也 (2007). アイデンティティと学力に関する研究—「学力大合唱の時代」にむけて、同和教育の現場から— 批評社
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, 79, pp.18-26.
- 法務省 (2017). 平成 29 年 6 月末現在における在留外国人数について 法務省ホームページ http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00068.html (2018年8月6日確認)
- Housely, W. and Fitzgerald, R. (2009). Membership categorization, culture and norms in action. *Discourse and Society* 20, 345-362.

- 細田由利 (2008). 「第二言語で話す」ということ : カタカナ英語の使用をめぐる 社会言語科学, 10(2), pp.146-157.
- 市川正人 (2015). 表現の自由とヘイトスピーチ 立命館法學, 2, pp.516-528. 立命館法学会
- 池田佳子 (2007a). L2 言語相互行為とアイデンティティ構築-ハワイにおける日系人学習者とのインタビュー談話の分析から-. Journal CAJLE. Vol.9. pp.1-20. カナダ日本語教育振興会
- 池田佳子 (2007b). 言語相互行為とアイデンティティ構築-第二言語教育への応用を考える-. 言語と文化. Vol.8. pp.201-218. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 岩田夏穂 (2005). 日本語学習者と母語話者の会話参加における変化-非対称的参加から対称的参加へ- 世界の日本語教育, 15, pp.135-151.
- 石川准 (1992). アイデンティティ・ゲーム-存在証明の社会学 新評論加藤雅人 (2005). 意味論的情報の可能性と限界 関西大学総合情報学部紀要 第 23 号 pp37-50.
- 岩崎久美子(編著) (2007). 在外日本人のナショナル・アイデンティティ 明石書店
- 井沢泰樹 (2014). ヘイトスピーチと若者の意識: 大都市圏の大学生の調査から 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 16, pp. 87-109.
- Jernudd, B. H. & Neustupný, J. V. (1987). Language planning: For whom? In Lafarge, L. (Ed.), Proceedings of the international colloquium on language planning. pp. 71-84. Ottawa: Les Presses de l'Universite Laval.
- Kasper, G. (2004). Participant orientations in German conversation for learning. *The Modern Language Journal*, 88, pp.551-567.
- 加藤雅人 (2005). 意味論的情報の可能性と限界 関西大学総合情報学部紀要 第 23 号 pp37-50.
- 加藤由香子 (2014). エスニック・アイデンティティと言語: ハンガリーにおけるロマニ語話者の言語意識の観点から 国際開発研究フォーラム, 45(1), pp.1-17.
- 河井亨 (2011). アイデンティティ形成についての社会的考察—Erikson のアイデンティティ理論とそれ以降のアイデンティティ研究の検討 現代社会学理論研究, 5, pp146-158.
- (2013). E.H.Erikson のアイデンティティ理論と社会理論についての考察 京都大学大学院教育学研究科紀要, 59, pp.639-651.
- 河野理恵 (1999). 『異文化コミュニケーション』としての『日本事情』—エスノメソドロジ—からの示唆—21 世紀の「日本事情」 創刊号, pp.40-53. くろしお出版.
- 金政芸 (2011). ナショナル・アイデンティティと他国意識—自国への愛着・自国優越意識・自国特別意識と他国への好感度 同志社社会学研究, 15, pp.13-24. 同志社社会学研究会.
- 北出慶子 (2013). 相互文化グループ学習活動におけるアイデンティティ形成の学び: 正課授業における相互文化学習活動の実践分析 言語文化研究, 11, pp.282-305. 早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会

- 岸政彦 (2009). ハビトゥスとアイデンティティ：非対称性の理論への試み 龍谷大学社会学部紀要, 34, pp.42-54.
- 小張順弘 (2004). フィリピン多言語社会での言語とアイデンティティ—セブアノ多言語話者の事例から— 小野原信善・大原始子(編著) ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し, pp.53-76. 三元社
- 児玉徳美 (2012). 日本語と言語類型論 立命館文學, 627, pp. 221-244.
- 今千春 (2010). 日本の韓国人居住者のインタビュー場面における footing：「animator」の分析 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理：接触場面の言語管理研究 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書, 228, pp.61-78.
- 今千春 (2012) 韓国人居住者の接触場面に向かう言語管理：言語バイオグラフィーからの記述の試み 村岡英裕(編) 外来性に関わる通時性と共時性：接触場面の言語管理研究 vol. 10 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書, 292, pp.49-67.
- 高民定 (2010). 接触場面の変容とその可能性を探って—韓国人が参加する接触場面の例を中心に—村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理研究 vol.8 千葉大学大学院人文社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書, 228, pp.35-45. 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- (2011). 日本語学習者の「よ」「ね」「よね」について—日本語初級・中級教科書の機能分析を中心に 国際教育, 4, pp. 11-23. 千葉大学国際教育センター
- (2014). 日本の韓国人移民の言語習慣に向かう評価—語りに見られる言語習慣の通時的管理の関りから— 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理研究 vol.11 千葉大学大学院人文社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書, 278, pp. 131-144. 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 窪田光男 (2005). 第二言語習得とアイデンティティ—社会言語学的適切性習得のエスノグラフィー ひつじ書房
- 久野弓枝 (2015). 中国人編入留学生のライフストーリー研究(1)編入留学後の問題に着目して 札幌大学総合論叢, 39, pp.63-73. 札幌大学附属総合研究所
- 黒坂愛衣、福岡安則 (2008). 越境する「在日の苦難」—日本名でアメリカ国籍になった在日コリアンからの聞き取り— 日本アジア研究,5, pp. 107-130
- Labov, W. (1997). Some further steps in narrative analysis. *Journal of Narrative and Life History*, 7, pp. 395-415.
- 林炫情・玉岡賀津雄 (2004).韓国の職場での呼称使用の適切性判断に及ぼす属性・対人関係特性・性格特性の影響 広島経済大学研究論集, 27, pp.29-44.
- Luk, J. C. M. (2008). Classroom Discourse and the Construction of Learner and Teacher Identities. In M. Martin-Jones, A. M. de Mejia and N. H. Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of Language and Education*, 2nd Edition, Volume 3: Discourse and Education. pp.121-134. Springer.

- 前野澄子 (2003). 「世界英語」と新英語: 変わりゆく英語 鎌倉女子大学紀要, 10, pp.159-165.
- 前山隆 (2001). 異文化接触とアイデンティティ—ブラジル社会と日系人— 御茶ノ水書房
- 丸井ふみ子 (2012). アイデンティティ研究の動向: 異文化接触・言語との関係を中心に 言語・地域文化研究, 18, pp.193-209. 東京外国語大学大学院
- 箕浦康子 (2003). 子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学研究— 新思索社
- 望月正哉・澤海崇文・瀧澤純・吉澤英里 (2017). 「からかい」や「いじめ」と比較した「いじり」の特徴 対人社会心理学研究, 17, pp.7-13. 大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室
- 森真弓 (2002). 「同化」ではなく「共生」を— 在日コリアン・アイヌ民族・沖縄の女たちから学ぶ— 北星学園大学経済学部北星論集, 42, pp. 57-72
- Mouer, R. & Y. Sugimoto (1986). *Images of Japanese Society*. Kegan Paul International.
- 村岡英裕 (2010a). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか: 類型論的アプローチについて 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理: 接触場面の言語管理研究 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228, pp.47-59.
- (2010b). 接触場面におけるコミュニケーション—日本に住む外国人の言語管理を通して見た言語問題の所在— 日本語学臨時増刊号, 29(14), pp.153-169. 明治書院
- (2016a). 接触場面研究のパラダイム 村岡英裕・サウクエン、ファン・高民定[編] 接触場面の言語学 pp.3-18. ココ出版
- (2016b).接触場面に向かう言語管理—多言語使用者の会話における footingと言語バイオフィーによる分析— 村岡英裕・サウクエン、ファン・高民定[編] 接触場面の言語学 pp. 339-364. ココ出版
- (2017). 移動する人びとの言語レパートリーに関する研究ノート: 日本語の自己評価の語りはどのように構築されているのか 村岡英裕(編) 接触場面における儀礼的相互行為: 接触場面の言語管理研究 vol.14 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書, 309, pp.62-82.
- 武蔵野市ホームページ. 戸籍の届出・証明書.
http://www.city.musashino.lg.jp/faq/faq_todokede/faq_koseki/1004064.html(2018年10月30日確認)
- 中河伸俊 (2010). 「自己」への相互行為論アプローチ: 経験的探究に有効な再定式化のために 人文学論集, 28, pp.45-71. 大阪府立大学
- 中島知子 (2001). バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること アルク
- ネウストプニー, J.V. (1989). 日本研究のパラダイム: その多様性を理解するために 世界中の日本 vol.1 pp.79-96 国際日本文化研究センター
- (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究, 7, pp.67-82.

- (1997).プロセスとしての習得の研究 阪大日本語研究, 9, pp.1-15
- Neustupný, J.V. (1978). *Post-Structural Approaches to Languages: Language Theory in a Japanese Context*. Tokyo: University of Tokyo Press
- (1985a). Problems in Australian- Japanese contact situations. In Pride. J. B. (Ed.), *Cross-cultural Encounters: Communication and Miscommunication*, pp.44-84. Melbourne: River Seine.
- (1985b). Language norms in Australian- Japanese contact situations. In Clyne, G. M. (Ed.), *Australia, meeting place of languages*, pp. 161-170. Canberra: Pacific Linguistics.
- (1994). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry. J. (Eds.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*, pp.50-69. Singapore: Academic Press.
- 西阪仰 (1997). 相互行為分析という視点 金子書房
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008). 特集「相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究」について 社会言語科学, 10(2), pp.13-15.
- Norton, B. (2000). *identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. Essex, UK: Pearson Education Limited.
- Norton, B., & McKinney, C. (2011). An identity approach to second language acquisition. In D. Atkinson (Ed.), *Alternative Approaches to Second Language Acquisition*, pp.73-94. New York: Routledge.
- 野崎京子 (2007). 強制収容とアイデンティティ・シフト: 日経二世・三世の「日本」と「アメリカ」 世界思想社.
- Oikawa, S. and Yoshida, T. (2007). An Identity Based on Being Different: A Focus on Biethnic Individuals in Japan. *International Journal of Intercultural Relations*, 31, pp. 633-653.
- 岡本佐智子 (2006). 日本人の自己紹介における自己開示 北海道文教大学紀要, 7, pp.51-63.
- 岡崎敏雄 (2003). 共生言語の形成—接触場面固有の言語形成— 宮崎里司・H. マリオット (編) 接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト pp.23-44 明治書院
- Pavlenko, A., Blackledge, A., Piller, I., & Teutsch-Dwyer (2001). *Multilingualism, Second Language Learning, and Gender*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Plummer, K. (1995). *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*. London: Routledge. (桜井厚・好井裕明・小林多寿子 (訳) セクシュアル・ストーリーの時代 新曜社)
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessment: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In Atkinson, J.M. & Herritage, J. (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. pp. 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Raynolds, E. (2017). Description of membership and enacting membership: Seeing-a-lift, being team. *Journal of Pragmatics*, 118, pp. 99-119.
- Ribeiro, B. T. (2006). Footing, positioning, voice. Are we talking about the same things? In A de

- Fina, D Schiffrin & M Bamberg (eds). *Discourse and identity*. pp.48-82. Cambridge, UK: Cambridge University Press
- Sacks, H. (1972a). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In Sudnow, D. (ed.), *Studies in Social Interaction*, pp.31-74. New York: The Free Press.
- (1972b). On the analyzability of stories of children. In Gumperz, J.J. & D. Hymes (eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, pp.325-345. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- (Edited by Jefferson, G. with an introduction by E. Schegloff) (1995). *Lectures on Conversation Vol. I & II*. Oxford: Blackwell
- 桜井厚 (2002). インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方— せりか書房
- 猿橋順子 (2016). アイデンティティの語りと継承言語の位置付け : ある在日コリアン二世女性のライフストーリーのポジショニング理論分析 ことばと社会: 多言語社会研究, 18, pp.35-60. 三元社
- Schegloff, E.A. (1992). Repair after next turn: The last structurally provided defense of inter遂行的アイデンティティ in conversation. *American Journal of Sociology*, 97(5), pp.1295-1345.
- (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., and Sacks, H. (1977). The Preference for Self Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53, 361-382.
- 関口知子 (2001). 在日日系ブラジル人生徒のアイデンティティの全体像 異文化間教育, 15, pp.162-187. 異文化間教育学会
- (2003). 在日日系ブラジル人の子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成— 明石書店
- 椎野信雄 (1980). 社会的世界とアイデンティティ ソシオロギス, 4, pp.66-78.
- 末田清子(2012). 多面的アイデンティティの調整と面子(フェイス) ナカニシヤ出版
- 杉原由美 (2003). 地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践: エスノメソドロロジーの視点から 世界の日本語教育. 日本語教育論集, 13, pp.1-18. 国際交流基金
- 鄒曉依 (2013). 接触場面に向かう外来性管理 : 中国人居住者の移動のライフストーリーに関する事例研究 千葉大学人文社会科学研究, 27, pp54-70.
- 鈴木一代 (2005). 日系国際児の文化的アイデンティティ形成 : 事例の検討 埼玉学園大学紀要・人間学部篇, 5, pp. 85-98
- (2008). 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成 ブレーン出版
- (2013). グローバル化社会と多元的アイデンティティ 埼玉学園大学紀要, 13, pp.97-106
- 鈴木義里 (2004). インド人とはだれなのか?—言語とアイデンティティ— 小野原信善・大

- 原始子(編著) 言葉とアイデンティティ：ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し 三元社
- Tajfel, H. & J.C. Turner (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In Austin, W.G. & S. Worchel (eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations*. Monterey, pp.33-47. CA: Brooks Cole.
- 鑪幹八郎, 山本力, 宮下一博, 岡本祐子(共編) (1984-2002). *アイデンティティ研究の展望 I, II, III, IV, V-1, V-2*, ナカニシヤ出版
- 塘利枝子 (2010). 生涯発達における文化間移動—青年期までのアイデンティティ形成を中心にして— *異文化間教育*, 31, pp.19-32.
- 津田正太郎 (2014). ナショナル・アイデンティティ, マスメディア, 社会政：領域横断的分析フレームの探究 (特集 メディア研究と政治・社会理論) *メディア・コミュニケーション：慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要*, 64, pp.25-40. 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
- Turner, J.C. (1987). *Rediscovering the Social Groups: A Self-categorization Theory*. Oxford: Blackwell. (蘭千壽・磯崎三喜年・内容哲雄・遠藤由美訳 (1995). 社会集団の再発見 誠信書房)
- Turner, J.C., M.A. Hogg, J.J. Oakes, S.D. Reicher, & M.S. Wetherell (1987). *Rediscovering the Social Groups: A Self-categorization Theory*. Oxford: Blackwell.
- 上野千鶴子 (2005). 脱アイデンティティの理論 上野千鶴子(編) *脱アイデンティティ*, pp.1-41. 勁草書房
- Watson, R. (1997). General reflections on 'categorization' and 'sequence' in the analysis of conversation. In S. Hester & P. Eglin (Eds.), *Culture in Action*. International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis and University Press of America: Washington D.C., pp. 49-75.
- Whaley, L. J. (1996). *Introduction to typology: The Unity and Diversity of Language*. Sage Publications. (大堀壽夫・山泉実・古賀裕章訳(2006). 言語類型論入門—言語の普遍性と多様性 岩波書店)
- 山下誠也・キムソンヒョ・日隈光男 (編) (2001). *在日コリアンのアイデンティティと日本社会—多民族共生への提言—* 明石書店
- 柳田直美 (2013). 接触場面における母語話者のコミュニケーション方略研究：情報やり取り方略の学習に着目して 筑波大学. 博士論文
- 吉川夏渚子 (2017). ビジネス接触場面における社会文化管理プロセス：海外現地日系企業における日本人ホストの評価と調整行動の傾向 *日本語・日本文化研究*, 27, pp. 226-235. 大阪大学
- 在日米国大使館・領事館. 各種証明書の取得方法.

<https://jp.usembassy.gov/ja/u-s-citizen-services-ja/citizenship-services-ja/obtaining-vital-records-ja/>
(2018年10月30日確認)

文字化の記号

- [複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧によって示される
- [] 重なり終わりが示されることもある
- () 聞き取り不可能な箇所は、()で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している
- (言葉) また聞き取りが確定できないときは、当該文字が()で括られる
- (m.n) 音声が途絶えている状態があるときには、その秒数が()内に示される
- 、 0.2秒以下の短い間合いは読点「、」によって示される
- 言葉:: 直前の音が延ばされていることはコロンの数で示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している
- 言- 言葉が不完全なまま途切れていることは、ハイフンで示される
- h 呼気音はhで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している
- .h 吸気音は.hで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している
- 言 h 呼気音の記号は、笑いを表すのにも用いられる。特に笑いながら発話が産出される時、そのことは呼気を伴う音の後にhを挟むことで示される
- 言葉 音が大きいことは斜体を用いることで示される
- ° ° 音が小さいことは当該箇所が° °で囲まれることにより示される
- ↓ ↑ 恩寵の極端な上がり下がり、それぞれ上向き矢印(↑)と下向き矢印(↓)で示される
- (()) 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる